

第4部 調査結果の分析／インタビュー調査編

第1章 外国人住民調査

第4部 調査結果の分析／インタビュー調査編

第1章 外国人住民調査

I 要約（再掲）

1 暮らしの実感

- 新宿には外国人が多いほか、さまざまな国の文化や料理を楽しめる「国際的なまち」という印象を持っている方が多かった。
- 日本人や日本の文化に好感を持っていること、交通の便などの生活環境の良さから、日本に住み続けたいと思っている方が多かった。
- 日本人は親切であるとの意見が大半であったが、その一方で、日本人との壁を感じたり、日本人の交友関係の希薄さに違和感を持っているとの意見もあった。

2 日常生活

- 日本の生活ルールに適應しようと努力した経験を持つ外国人は多い。特に、母国にはごみの分別がなく、来日した当初にごみを分別して出すことを理解しようとして苦労したというケースが複数あった。
- 部屋を借りるときに「外国人だから」という理由で断られたことや、入居時の保証に関する制約が厳しく苦労した経験が多くあげられた。また、契約書が日本語のみで、内容が理解できなかったという事例もあった。

3 偏見や差別

- 明確に差別を受けたという経験を持つ方は少なかったが、仕事(接客)をしているときに日本人から冷たい対応をされ、不快になったという事例が複数あった。
- 日本人が外国人に不慣れであることから、日本人に顔をじろじろと見られ不快になったという事例が複数あった。

4 ことば（日本語学習）

- 「保育園や学校からのお便りが読めない」「病院での説明が理解できない」「役所の手続きで使う言葉が難しい」などの事例が多くあげられている。
- 日本の保育園・幼稚園や小学校に通う(通った)子どもの日本語能力に親がついていけないため、親子のコミュニケーションに不安を抱えているケースが複数あった。また、一方で日本の生活が長くなるにつれ、子どもが親の母語を話せなくなるという心配をしている保護者も多い。
- 学校や地域において日本人とのつき合いを望んでいる方も多いが、日本語が苦手であることから積極的に交流することに不安を抱えている。

5 災害に備えて

- 東日本大震災を経験している方や防災訓練に参加したことがある方は、食料の備蓄など災害に備えている傾向がみられた。その一方で、日本での滞在歴が短い方や地震が起きない国の出身の方は災害対策をとっていないことがわかった。
- 新宿区が多言語で発行している防災パンフレットを知っている方は少なかった。一方で、防災パンフレットを知っている方の中には、同国人に配布するなど、有効に活用されているケースもあった。

6 必要な情報・サービスについて

- 区からの「大切なお知らせ」などの通知はわかりやすい日本語にするほか、せめて英語版を同封してほしいなど、多言語対応の拡大についての要望が多くあがった。
- 日本人との交流や地域のイベントに関する情報が多く求められていると同時に、それらの情報がどこで得られるのかがわからないという意見も多かった。

7 子育て・教育をする環境について

- 日本の保育園・幼稚園や小学校などに子どもを通わせている子育て中の方は、日本の教育環境には概ね満足している。
- 子ども同士は言葉や文化の違いに違和感を持っておらず、保育園・幼稚園や小学校などで日本人の子どもと良好な友人関係をつくっている。一方で、保護者の中では日本人と外国人との間に壁があるという意見があった。
- 日本の学校は海外の学校と違い英語教育が不十分であるとの指摘があった。

8 多文化共生のまちづくり

- 留学生は、日本での就職または母国で日本と関係する職業に就きたいという希望を持っている方が多い。また、日本で育った外国にルーツを持つ青年も、母国と日本を行き来したり、世界に向けた国際的な仕事をしたいという将来の展望を持っている傾向があった。
- 母国ではなく、自分がいる国のルールで行動するように子どもに教えているという意見があった。
- 自営業者や子育て中の方の中には、商店会やPTAなどを通じて日本人との地域活動に参加している方もいた。一方で、留学生や雇用労働者は、地域との接点が持ちづらいことが原因で地域活動に参加できていないという傾向が見られた。
- 全体的な傾向として、日本人、外国人を問わずいろいろな人と知り合い、仲良くなりたいという思いを持っている。そのために、行政が率先して交流の機会をつくることが望まれている。
- 外国人が日本語を話せるようになることが必要であるという意見や、日本語を学ぶ環境を充実させてほしいとの要望が多くあげられた。

Ⅱ 調査結果

外国人 子育て中の方

No. 1

中国 女性 30歳代 子ども（12歳）

【来日時期と来日目的】

2011年8月に来日しました。治安の良さ、生活レベルの高さ、日本人の真面目さなど日本の生活習慣に興味があって日本で暮らしたいと思ったからです。

【新宿のまちの印象】

来日した当初の半年は、川崎市に住んでいましたが、新宿の方がずっとにぎやかです。将来、子どもを日本に呼ぶときにできるだけ環境の良い所で育てたいという考えがあって、たまたま新宿区内に安い寮があったこともあります。首都の中心でもあるので新宿に決めました。

川崎と比べても、新宿は外国人が多いし、道を歩いていてもいろいろな言葉が聞こえてきます。

また、日本では信号が守られているので、安心して道路を渡れることがありがたいです。

【家庭内での会話】

子どもは、区立中学校1年生です。半月前に来日したばかりなので、日本語は話せなくて、学校で集中的に勉強している状況です。

夫は日本語がまったく話せず、家庭内では中国語で話しています。私自身は学校で日本語を勉強したことはなく、本で勉強しました。

【日本で生活するなかで感じること】

中国人の寮に住んでいるので、近所の人とはあいさつ程度しかしません。住んでいる地域にも日本人はあまりいません。町会など地域での活動については、今までは仕事ばかりだったので考えたこともありませんでしたが、子どもが来日したので、これから意識していきたいと思います。

差別を受けたことは一度もありません。役所での手続きなども言葉の面で難しいですが、日本人はとても熱心にいろいろと教えてくれました。一番印象的だったのは、道を尋ねたとき、目的地までわざわざ連れて行ってくれ、とても親切だったことです。

【災害に関する意識】

東日本大震災の時は、まだ中国でビザを申請している最中でした。地震について少し心配しましたが、やはり日本に来たいという気持ちの方が強かったです。出身地の中国北部は地震が少ないので、地震に対する防災意識はとても低く、今は何も準備していません。

【期待すること】

まだ2日間しか通学していないので、ほかの子どもたちとのつき合いはありません。

宿題の量が少ないので、子どもはあまりプレッシャーを感じていません。中国では、息が詰まるほど宿題が多いです。

周囲に教育関係者が多くいるので助かります。今は夫婦とも仕事が忙しいですが、今後、子どもの友だちの親と仲良くしたいと思います。そうすれば、子どももうまくやっていけると思います。

日本人と交流できる機会があれば、子どもと積極的に参加していきたいし、一緒に日本語の

勉強をがんばって、日本語で会話できるつながりをつくれたらと思います。

子どもにはいろいろなプレッシャーがあると思いますが、どんな環境にあっても、勇気と自信を持って立ち向かってほしい。将来、他国へ一人で行くことになったときのためにも、いろいろな経験をして、国際感覚を身につけてほしいです。

No. 2

フランス 女性 30歳代 子ども(4歳・0歳)

【来日時期と来日目的】

1997年に日本の大学に留学したのが最初の来日です。大学で半年間、日本語集中コースを受講し、そこで日常会話はほぼできるようになりました。日本語で受ける経済学部の講義に苦勞しながらも、何とか1年間の留学を終えてフランスに帰国しました。

フランスでコンサルタントとして働いていた時、東京の人材派遣会社社長と偶然出会い、日本で働きたいと話したところ、うちの会社に来たらと言われ、今思えば社交辞令だったと思いますが、その言葉を信じて1999年に再来日し、東京で就職しました。その後転職し、今に至ります。

【子どもの母語と母文化】

私たち両親の間の言語が日本語であるため、子どもにはしっかりと日本語を覚えてほしいと思い、区立幼稚園に入園させました。

私と子どもはフランス語、イラン人の夫と子どもはペルシャ語、フィリピン人のベビーシッターと子どもは英語、私と夫は日本語で話しています。家庭内で、それぞれのコミュニケーション言語が異なることは、ときに難しいこともあります。ただ、不思議なことに、子どもは私たち両親に日本語で話しかけてきません。私にはフランス語、夫にはペルシャ語とうまく使い分けて話しかけてきます。もし子どもが日本語で私たち両親に話しかけてきたら、私たちも日本語で返すことになり、ネイティブの話す日本語とは違う、外国人の話す日本語を覚えてしまう恐れがありました。また、日本で育つ外国人の子どもは両親の母語がわからなくなってしまうと聞いて心配していましたが、今のところは問題なく進んでいます。

子どもには、自分がいる国のルールで動きなさい、日本にいるときは日本のルール、フランスにいるときはフランスのルールを守るように教えています。文化によって、ルールやマナーにはいろいろな違いがあると理解することは必須です。

【働く女性のための託児環境】

就職後、子どもを産んだ時、保育園・幼稚園探しにとっても苦勞しました。第一子の出産と転職のタイミングが重なってしまい、入社日が迫っているのに子どもを預けられる場所が見つからず、本当に焦りました。妊娠中には保育園や幼稚園の申請ができず、生まれてから申請しても入園まで順番待ちなのは、まるで女性に働くなと言っているようなものです。入社日までに入園先が見つからなかったため、結局50人ものベビーシッターを面接し、ようやくフィリピン人の方をお願いすることができました。

子どもはその後、区立幼稚園に入園しました。フランスでは国が幼稚園のカリキュラムを示しています。文字を覚えること等を含めた、何歳では何ができるというチェックリスト形式のものです。日本の幼稚園に入園した時、子どもが自由な環境でのびのびと生活できるのは素晴らしいと感じましたが、もう少し学習の時間があると子どもにとって良い刺激になると思います。

日本の育児休暇という制度にも違和感があります。託児環境が整っていないから、このような制度が必要なのではないのでしょうか。出産後に職場復帰できるとうたっている会社でも、復帰後に出産前のポジションは保障されないことが多いと聞きます。復帰しても、園が指定するお迎え時間に間に合わせるため仕事を切りあげて帰らなければならない、出産前のように働く

ことができません。これは女性本人のストレスにもなりますし、仕事のモチベーションも低下します。会社にとっても良くありません。

共働き夫婦やひとり親も増えてきており、女性が家計の担い手になっている場合も増えていきます。それに対して、社会における男性と女性の扱いはまだ平等とは言えません。多くの女性は仕事から家に帰ると、さらに家事や育児をせねばならない状況です。その一方で男性のなかには、そういった妻の状況を考えず、独身の頃と同じように自由に行動する人もいます。

働きたい女性が思い切り働けるよう、託児環境に係る問題が一刻も早く解消され、男性が女性と同じように家事や育児に取り組むことが当たり前になる社会を期待しています。

No. 3

ミャンマー 女性 50歳代 子ども(16歳、15歳、13歳、9歳)

【来日時期と来日目的】

ミャンマーのカチン族出身で、難民として1992年に来日しました。日本政府にはミャンマー国籍として認められていますが、ミャンマー政府は、他の国で特定活動をする者の国籍を認めていないので、ミャンマー政府からすると日本国籍でもミャンマー国籍でもない状態です。日本で結婚、出産し、NPO活動と飲食店の経営をしながら、4人の子どもを育てています。

【子どもの言語】

子どもたちは日本で生まれ、日本の公立学校に通っているので日本語の問題はありません。そして親の母語については、小さい時から子どもたちに、「あなたはカチン人なのだから日本語だけでなく、カチン語もしっかり勉強しなさい」と言い聞かせてきました。しかし、カチン語をどのように習得させるかは、これまで試行錯誤の連続でした。

初めての子どもが生まれた時は、カチン語を覚えさせたい気持ちが強すぎて、結果として日本語習得がおろそかになってしまい、小学校入学当時、学校の授業についていけないという事態になりました。子どもたちには私ができなかったことをさせてあげたいし、日本で少しでも良い生活をしてほしいと思っています。それならば、親の母語のことはひとまずおいて、日本語を優先すべきだったと反省し、方針を変えました。

現在、子どもたちは日本語とカチン語の両方を習得しています。また、カチン人であっても国としてはミャンマーなので、現在はミャンマー文字を勉強させているところです。あわせて英語も勉強しています。

【日本での子育て】

日本の教育に満足しています。うそをつかず正直であること、真面目に物事に取り組むことを小さい頃から学ぶので、逆に子どもたちから行いを正されたりして、学ぶことが多くあります。子どもたちはリーダーシップのある明るい性格に育ち、頼もしく思っています。将来は、日本で学んだことを母国に伝え、母国と日本のために働ける人間になってほしいと願っています。

子どもたちは日本人の友だちと良い関係をつくっていますが、保護者の中では日本人と外国人との間には壁があります。日本語がわからないなど不便があった場合の対応のためか、学校では卒業式の保護者席を、外国人保護者だけ一か所に固められていたこともありました。日本人としては配慮のためにしたことでも、外国人保護者のなかには差別と感じた人もいたのではないのでしょうか。子育てに関する相談はもっぱら、NPO活動を通じて知り合った日本人にしている、学校の日本人保護者とはあまり交流はありません。

【多文化共生のまちづくりについて】

新宿区には、優秀でもっと勉強したいと本人が望んでいるにもかかわらず、経済的な事情から高校などへの進学を諦めざるをえない子どもがいます。小学生や中学生に対する奨学金制度

をつくって、そのような子どもたちを支援することはできないでしょうか。がんばることにより奨学金がもらえてもっと勉強ができる、という目標になります。奨学金とまではいかなくとも、作文コンクールで賞状や記念品を出すようなことでも、子どもにとっては良い動機付けになります。意欲的に勉強する子どもが増えることは、将来の担い手の質を高めることにつながると思います。

No. 4

フィリピン 女性 40歳代 子ども(17歳、6歳)

【来日時期と来日目的】

1994年8月に、仕事のために来日しました。その後、日本人と結婚し、子どもが生まれ、日本で暮らしています。

【子どもの母語と母文化】

上の子どもが生まれてしばらくは、何度か3カ月や5カ月程度の短期間でフィリピンに帰国していたため、その際は子どもをフィリピンの保育園に通わせました。また、日本にいるとき私は仕事をせず、専業主婦であったため、家ではタガログ語や英語で話しかけていたことから第一子は日本語、英語、タガログ語を習得しています。下の子どもにも、少しずつタガログ語や英語で話しかけるようにしていますが、まだ日本語しか話せません。

フィリピンの文化についてはよく話していて、貧困のため1日3食食べられない子どもや、学校に通えない子どもがいることも伝えていきます。自分たちがいかに恵まれた国で暮らしているか理解して、日々の暮らしに感謝してほしいからです。

子どもたちは、人が優しくてにぎやかなフィリピンが好きと言ってくれ、とてもうれしく思っています。大学を卒業してからどのような仕事に就くかは子どもの好きなようにと考えていますが、フィリピンに関わる仕事に就くかもしれないと思うと、今から楽しみです。

【日本での子育て】

上の子どもが幼稚園に入った時は、日本語で書かれた幼稚園からのお便りが読めなくて大変でした。しかしそのような状況でも、保護者会や行事には欠かさず出席することを心がけていたので、次第に日本人保護者と親しくつき合えるようになり、わからないことを教えてもらい、いろいろと助けてもらいました。

上の子どもが4歳の時に「ママはひらがなが読めないの」と聞かれ、「自分も勉強しなくては」と思い、ひらがなやカタカナを子どもに教えるために、文字を勉強しました。その後も自習ができるようになる小学校高学年まで、子どもに教えるために勉強を続けました。

幼稚園で知り合った日本人保護者とは今も親しくしています。しかし、下の子どもが通う保育園は働いている保護者がほとんどで、私も仕事を始めたため時間がとれず、朝のあいさつを交わす程度のつき合いしかありません。

【多文化共生のまちづくりについて】

学校からのお便りが日本語で書かれて読めないときや何かわからないことがあったとき、私は夫が日本人なので、聞いたり代わりにやってもらったり頼むことができました。しかし、両親とも日本語がわからない外国人であったら、とても困ると思います。実際、私のところにもフィリピン人夫婦からそのような相談がよくきます。これだけ外国人が多い地域なので、区役所や学校からのお便りは、せめて日本語のほか英語で書かれていると良いと思います。

また、英語で授業を受けるフィリピンで育ったので、日本の学校ももっと英語教育に力を入れた方がいいと感じています。学校での英語教育が十分ではないため、親たちは留学や英会話教室にお金をかけなければなりません。国語である日本語と同じレベルで英語が使えるよう、学校で教育ができると良いと思います。

ミャンマー 女性 30歳代 子ども(6歳)

【来日時期と来日目的】

13年前に長野県の大学に留学し、2年間勉強した後、東京で就職しました。

【子どもの母語と母文化】

子どもは日本で生まれ、区立保育園を卒園後はインターナショナルスクールに通わせているため日本語と英語を話しますが、ミャンマー語はまだ話せません。両親の母語をどう教えようかと思っていたところ、ミャンマー語教室を見つけ、今はそこに週末通って勉強しています。ミャンマー語は文字が多いので、まだ幼い子どもにとっては長時間机に向かって字を練習するのは大変なことだと思います。しかし、ミャンマー語教室を見つけられたことは、親にとって幸いでした。

子どもは、お経を読み、朝のおそなえ物の用意も手伝うなど、私たち両親からミャンマーの文化を引き継いでくれています。2、3年前にミャンマーから私の母が来日した時のことをよく覚えていて、その時の写真を見せると、ミャンマーの食べ物のことを話します。明日、僧侶である私の父が来日するので、仏教を教えてあげてほしいと期待しているところです。

【日本での子育て】

子どもが通うインターナショナルスクールには、さまざまな国籍の人が通っているため、国籍が違って同じ人間なのだということを学ばせることができ良かったと思っています。ただ、インターナショナルスクールの学費は負担でもあります。当初は区立小学校に入れる予定でしたが、保育園で日本人の子どもたちになじめなかったため、外国人であることが目立たない環境を選びました。私立学校を選んだので負担は仕方ありませんが、親への送金もあるので、経済的な補助をいただくと助かります。

子どもは未熟児で生まれ、日本の病院のお世話になってここまで大きくなりました。親としては、将来、医師になって、逆に皆さんを助けられるようになってほしいと思っていますが、本人の成長を見ながら、あまりプレッシャーをかけずに育てるつもりです。

今の職場は従業員が少ないため、家庭的な雰囲気、日常生活や子育てについてなど、日本人の同僚たちに何でも相談できる恵まれた環境です。同僚の家族と週末を一緒に過ごすこともあり、両親が来日したときにも観光案内をしてもらいました。また、学校の日本人保護者とも、学校の催しへの参加等を通じて、なるべくコミュニケーションをとるようにしています。

日本の習慣の中では、相手に対して丁寧に接し、あいさつをするところが良いと思います。職場でも「おはようございます」と言い合うと、やる気が出てきます。逆に残念なところは、先生への尊敬の念が薄れてきていること、そして無宗教が多く、信仰心が薄いことです。

【多文化共生のまちづくりについて】

地域のお祭りや防災訓練に参加したいと思っていますが、いつ、どこでやるのかがよくわかりません。掲示板等には情報があるのかもしれませんが、見に行かないとわからない状況です。

また、親子同士が交流できるイベントが週末にあるといいと思います。家でゲームばかりしている子どもが多いと聞きますが、自分の子どもには外に出かけてできるだけ多くの経験をさせたいと考えています。インターナショナルスクールに通っていると近所に友だちがいないので、地域の催しに参加することは子どもにとって良い機会になります。私自身も、地域でボランティアをやりたいです。

タイ 女性 30歳代 子ども(1歳)

【来日時期と来日目的】

2009年9月に日本語を勉強するために留学ビザで来日しました。小さい時から、日本は便利だしスキーもできるので、日本に来たいと思っていました。

日本語学校で夫と知り合い結婚しました。日本語を1年間勉強し、その後、タイの副菜の輸入の仕事をしました。今は、夫の店でアルバイトとして働いています。

【子どもの言語】

子どもはタイ国籍で1歳8か月になります。タイに帰って出産し、2か月前に日本に連れてきました。現在は、区立保育園に通っています。

保育園は、中国人、ミャンマー人、韓国人などいろいろな国の人がいますが、タイ人は私の子どもだけです。保育園ではだいたい日本人の子どもと遊んでいます。タイとは異なる言葉や文化をもつ日本人と一緒に保育を受けることは、子どもが小さいので問題ありません。子どもが大きくなってきたら、タイのお祭りや文化を教えていきたいと思っています。

家の中ではタイ語、保育園では日本語ですが、1歳8か月なのでどちらもまだあまり話せません。タイ語は家で教えることができるので、子どもには日本語を勉強してほしいです。

子どもにはずっと日本で仕事をして、日本で生活をしてもらいたいと思います。私たちも、日本に住んで1年に1、2回タイに帰るのがいいですね。祖母も日本に住んでいますし。

【交友関係】

保育園のほかのお母さんたちとは、日本語がよく話せないのでつき合いがありません。友だちもいません。仕事では使う言葉が決まっているので問題はないのですが、日本人とのつき合いでは言葉がわからないから会話が大変です。1年間だけでも日本語を勉強したいです。

家の隣のビルに、タイ人の祖母と日本人の祖父がいるので、手紙や書類などが読めないときなど、困ったときに助けてもらっています。

【日本で生活するなかで感じること】

家賃が高いので困っています。2LDKの家に6人で暮らしていますが、家賃が13万5000円と高いです。安い家賃の家に住みたいと思いますが、遠くに住むと通勤の際の交通費にお金がかかってしまうので、どっちもどっちです。

それ以外、子育てなど、日本で暮らしていて困ることは特にありません。いろいろな国の料理を食べることができたり、新大久保で安い料理をたくさん買えたりなど、新宿は便利なまちだと思います。また、楽しいこともたくさんあります。昼間はみんな忙しいけれど、仕事の後はみんなで楽しく過ごしています。みんなが同じ日にお休みなので、みんなで食べたいものを食べ、公園を散歩して、子どもの服を買ったりします。東京ドームやスカイツリー、お台場などにも遊びに行きました。

ネパール 男性 30歳代 子ども(6歳)

【来日時期と来日目的】

2005年に、日本語や日本の文化を学ぶために留学で来日しました。ネパールは観光客が多い「観光の国」で、日本人観光客も多かったのです。私は、日本で学んだことをネパールの観光に活かしたいと思いました。

日本語を2年間勉強したあと国際観光の専門学校に入学しました。卒業後は国に帰ろうと考えていましたが、そのときにネパール国内の治安が悪化していたため、日本にとどまることに

しました。英語は話せましたが、日本語が不十分だったため希望の旅行会社には就職できなかったのも、自分の飲食店を出しました。今はその資格で日本に在留しています。

【日本での生活】

店の経営がうまくいかず、生活が厳しくなったことから、3年前に一度帰国しました。その後1年経ってから再来日しました。そのタイミングで妻と子どもを日本に連れて来ようと思いましたが、日本での生活が厳しかったためできませんでした。去年の9月にやっと日本に呼び寄せ、一緒に住めるようになりました。

子どもは、インターナショナルスクールに通っていて、そこには日本人もいます。学校内では、英語が主な言語になっています。普段は、学校が終わったら近くの公園で遊んでから帰ってきますが、今は夏休みなので、学校の友だちの家などに遊びに行ったりしています。ただ、日本語が話せないのも、その友だちの中には日本人はいません。

【交友関係】

現在住んでいる大久保では、隣近所の日本人とのつき合いはありません。子どもも、たまに外に出て日本人の子どもと遊んでいます。日本語がわからないため、すぐに帰ってきてしまいます。

つき合いがある日本人は新宿区内に住んでいます。少し家が離れています。以前にアルバイトしていた時の同僚で、彼らはネパールを旅行した経験があり、ネパール人のことをすごく気に入ってくれていました。初めて会ったときから優しくしてくれて、今までずっと兄のような関係でいてくれています。問題やトラブルがあるとすぐに来てくれますし、今の仕事も彼らのおかげでうまくいっています。

【子どもの言語】

妻も子どももネパール人なので、家庭内の会話はもちろんネパール語です。子どもは5歳までネパールにおり、日本に呼び寄せて間もないため、まだ日本語は十分に話せません。日本で生活するうえでは、もちろん日本語が必要になりますので、私たちの方から日本語も使って話しかけています。また、家庭内のほか、ネパール人の友だちと遊ぶときにもネパール語で話しています。

【期待すること】

子どもが通うインターナショナルスクールは、いろいろな国の文化や人を知ることができる良い環境だと思います。子どもには将来的に医者になってほしいと思っていますが、本人はネパールにいるときから、先生になりたいと言っています。自分も、もし状況が許せばネパールに帰って国際関係の仕事をしたいと思っています。

No. 8

女性 40歳代 ミャンマー 子ども（16歳）

【来日時期と来日目的】

1995年9月に、タイで紹介された日本人と結婚して結婚ビザで日本に来ました。

【現在の仕事】

不動産の会社に勤めていて、外国人相手の、賃貸物件の入居希望者の経済状況などの調査をしています。あとは、信用のある入居者から新しい入居希望者を紹介してもらうという営業をしています。

【子どもの言語】

出産の際に一時的にミャンマーに帰りましたが、その後はずっと日本で生活しています。娘

は日本語しか話せません。またミャンマー語もタイ語も話せません。そのため、娘からは「ママに話してもわからないことが多いから嫌だ」と言われます。娘の日本語についていくために一生懸命勉強しても、そこまで日本語がうまくならないので、少し寂しいです。

【家庭内での会話】

娘としては、学校での出来事を私に話したいと思っているのですが、私は日本語が不十分なので、娘に対して、「いろいろ言われても、私には日本語の意味がわからないから困る」と言いました。子どもには子どもの寂しさがあるし、私には私の寂しさがあります。

娘とミャンマーに行ったことはなく、ミャンマーにいる母にも娘を会わせたいのですが、「ああいう国は行きたくもない」と言われました。また現地の友人から娘を連れて来るように頼まれたので、「遊びに行けますか」と娘に聞いたら、「行きたくないので、聞かないで」と言われてしまいました。実際のところ、サッカー部のマネジャーをやっているのです、そこまでの暇ありません。

子どもには、スポーツは少なめにして、勉強、テストについていけるようにがんばってもらいたい。日本でちゃんと勉強して、良い仕事に就いてほしいと思います。

【学校での保護者とのつき合い】

娘以外にミャンマーの子どもは学校にいませんでした。それはやはり少し寂しいことでもありました。娘の学校の保護者の中には、韓国の人もいましたが、ほとんどが日本人でした。日本人の保護者とのつき合いは、保育園や小学校の頃は、PTAのグループで飲み会をしたりとたくさんありました。学校のことがわからないから教えてください、よろしくお願ひしますと声をかけたことがきっかけで、いろいろと教えてもらいました。

【交友関係】

ミャンマー人と日本人では、ルールの守り方など考え方が違います。ミャンマー人が集まる場所に行って知り合いができましたが、知らないうちにトラブルになりました。日本人はまじめ過ぎると思いますが、ミャンマー人はまじめではないところがあります。日本人が一番良いと思います。

近所に娘と同じ学校の日本人のお母さんがいて、料理などを多めに作ってあちこち運んで行き来するのが楽しかったです。最近は仕事が忙しいのであまりできていませんが。

No. 9

韓国 女性 40歳代 子ども(15歳・12歳)

【来日時期と来日目的】

2011年2月に、夫の仕事の都合で家族一緒に来日しました。

【子どもの言語】

家庭内では韓国語で話しますので、子どもは韓国語は上手です。また、子どもは二人とも公立の小・中学校で日本語を教えてもらいましたので、会話だけでなく筆記も日本語で困ることはありません。

家庭内では、いろいろなニュースや韓国と日本の政治・歴史問題について話しています。日本の友だちと仲良くできるようにするため、歴史は立場によって評価が変わることを教えています。

子どもたちは、友だちは多いです。特に長女は小学3年生の時から日本にいますので、毎日日本人の友だちと遊んでいます。長男も同じように日本人の友だちが多いです。

【日本での子育て】

世界にはいろいろな人がいること、同じ国でも人の性格はそれぞれ違うということ、よく

子どもに話しているので、日本で育つことについて問題はありません。子どもはいろいろな文化を知ることができるし、長女は、地域のお祭りや行事にもよく呼ばれて参加しています。

子どもの将来についての私の希望はありません。来日してすぐに東日本大震災がありました。そのときに長男に韓国に帰りたいかと聞いたところ、長男は、「死ぬ人はどこにいても死ぬし、生きる人はどこにいても生きるから、自分は日本にいる」と答えました。

私たちが韓国で住んでいた所は、田舎で自然も多いので、子どもが小さい時には住んでいても良いのですが、子どもが大きくなったので、今は東京のような都会のほうが良いと思います。

【学校での保護者とのつき合い】

私は日本語が少ししか話せず、PTAの会合に出ても終わったらすぐに帰ってきてしまうため、ほかの保護者とはあまりつき合いがありません。韓国では友だちになると、「今暇なら会いましょう」という感じで、気軽に行き来します。でも、日本は韓国と違い、会うために事前の約束が必要だったりします。直接会っているときは、ゆっくり話してもらうこともできますが、電話だとそれが難しいので、電話をするのは怖いのです。

【日本での子育て】

子育てのことを相談できる人はいません。私が日本語があまり上手ではないことを、子どもたちが学校の先生に、伝えていきますので、子どもたちは問題が起きて自分たちで学校に相談して解決しています。先生との面談の時は、「学校生活はまったく問題ないので、安心してください」と言われるだけでした。

【新宿区の学校教育】

子どもを日本の学校に行かせたら、問題がたくさんあって結局韓国の学校に転校したという話を、新宿区以外に住んでいる韓国人から聞いたことがあります。私が日本の学校に子どもたちを通わせようと思った時には、日本語が話せて友だちができれば十分だと思っていたのですが、成績も良く学校生活には何の問題もありませんでした。私はずっと新宿区に住んでいるので、日本の学校はどこでも韓国人が通うことに問題はないと思っていましたが、その話を聞いた時に、外国人の子どもに対する新宿区の教育システムがとても良いことがわかった気がしました。

No. 10

フィリピン 女性 50歳代 子ども(28歳・25歳・20歳・18歳・16歳・12歳)
--

【来日時期と来日目的】

30年前に仕事のため来日し、原宿にある日本語学校で2年間勉強した後、日本人と結婚しました。

【子どもの母語と母文化】

夫が日本人で、日本で暮らしているため、子どもたちは日本語で育ちました。子育てと夫の家業で忙しく、余裕がなかったため、子どもたちは私の母語であるタガログ語を話せません。フィリピンではタガログ語のほか、学校では英語を使って授業を受け、大学に入るとスペイン語を勉強します。自分の子どもたちにもタガログ語や英語を教えておけば良かったと後悔しています。しかし幸いなことに、2、3年前から子どもたちが「タガログ語と英語を教えて」と言うようになりました。外国語は、将来の仕事に生かせるのでこの機会に教えようと思っています。

私は子育てをするなかで日本語を習得しましたが、日本語が話せるようになった今でも、キリスト教のフィリピンと、神道や仏教の日本の間には文化の違いを感じています。

【日本での子育て】

初めての子育ての時は、日本語がまだ上手に話せなかったので、自分に自信が持てず、どうしたらいいのか不安でいっぱいでした。自信が持てないと、自分から人に声をかけることがとても難しくなります。その後、日本語が話せるようになり、自信がついてきて、今は人と話すのがとても好きです。子どもたちが通う学校の保護者とは、日本人と外国人とを問わず、よく話して情報交換しています。忙しくてなかなか時間がつくれませんが、仲の良い保護者で集まって食事をするのはとても楽しみなものです。

最近、フィリピンから来日したての、日本語がまだ話せない保護者から、子育ての相談を受けることが多くなりました。日本で暮らしてきたなかで知ったこと、6人の子どもを育てて経験したことをもとに、少しでも役に立てたらと思って話をしています。通っている教会で牧師に相談することもあります。

【地域での交流】

子どもたちが小さかった頃は、地域のお祭りを手伝っていました。料理を作って、とても楽しかった思い出があります。住んでいる地域は、道で会うとあいさつだけでなく、立ち話をするような雰囲気の良いところでした。以前住んでいたマンションでは、年に1回は日帰りの旅行をしていました。同じ地域に住む者同士が、お互いの顔を知り合っていることは大切だと思います。

【災害に備えて】

東日本大震災の後、水、懐中電灯、洋服、缶詰等を袋に入れて準備しました。年月が経って少し意識が薄れてきているので、もう一度しっかり準備しなくてはと思っています。

新宿区が作っている情報紙やチラシは英語でも書かれているので、それをもらってきて、日本語がまだ読めない来日したばかりの人に渡すと喜ばれます。

No. 11

中国 女性 20歳代 子ども（5歳・3歳）

【来日時期と目的】

2011年9月に来日し、新宿区には2012年3月から住んでいます。2008年4月に夫が先に来日し、その後、私が子どもと一緒に来日しました。

【家族のこと】

夫の両親は中国残留邦人で、今は近所に住んでいます。子どもは中国で生まれた長男（5歳）と日本で生まれた次男（3歳）の二人です。国籍は、夫と子ども二人は日本国籍で、私だけが中国国籍です。長男は現在幼稚園に通っています。次男は入園の申請中です。私の母は中国に住んでいて、子どもたちは私の兄を「中国のお兄ちゃん」と呼んでいます。兄には娘が3人いて、夏休みに中国へ帰る時は、「誕生日に一緒にどこで遊ぼうか」と話し、仲良くしています。

【子どもの言語】

私も夫も日本語をあまりうまく話せないで、家では中国語で話しています。子どもは日本語を幼稚園の先生に教えてもらっています。上手ではありませんが、子どもたちの間では問題ありません。しかし、親子間は別です。中国語は私が教えられるのですが、日本語のことを子どもから聞かれても答えられないことが多いです。子どもが日本語を間違えても私には直せません。

一方で、このまま日本で教育を受け続けると、子どもは中国語があまりわからなくなっていくと思います。そうすると、将来中国に帰ることになった場合、中国語が話せないことが心配なのです。インターナショナルスクールに入学させて中国語も勉強させたいと思いますが、日

本語と中国語の両方を勉強すると混乱する心配があります。特に、このふたつの言葉はときどき同じ漢字を使うので、混乱しやすいのです。いつ中国語の勉強を始めさせれば良いのかわかりません。混乱しない時期から同じ学校で両方の言葉を勉強できれば一番良いです。

【日本での子育て】

今の幼稚園は、外国人が多いのでいじめも少ないだろうと思い、自宅から少し遠いですが自転車で通っています。友だちのうち中国語が話せる子は1人だけで、あとはすべて日本人と韓国人の子どもです。遊ぶときには言葉が多少通じなくても困らないので、幼稚園が終わった後、毎日のようにみんなで公園に遊びに行っています。

幼稚園での出来事について、よく話を聞いています。子どもは性格が明るいので、幼稚園での生活は心配していません。幼稚園の日本人のお母さんとのつき合いはありますが、日本語があまりできないので深いつき合いではありません。

私は日本語ができないので、日本人の友だちやお母さんに相談することはほとんどありません。子育てについて困ったときは、近所に住んでいる姑に相談しています。

子どもは「どうして自分は日本人なのに中国語が話せて日本語ができないのか」などと聞いてきますが、デリケートな問題なのでどう答えたら良いのかわかりません。いずれ子どもが高校生になり日本語を上手に使えるようになれば、日本人のアイデンティティが確立すると思います。

【多文化共生のまちづくりについて】

一番の問題は言葉です。私は日本語が上手ではないので、子どもの具合が悪くなって病院に行った時は、紙とペンを持って行き、漢字を書いて伝えました。言葉が通じないと先生に状況を詳しく伝えられません。特に大きな病院に行くときは余計に難しいです。病院に通訳の人がいてほしいです。

No. 12

韓国 女性 40歳代 子ども(6歳)

【来日時期と来日目的】

日本語を勉強するために、2006年3月に日本に来ました。その後、日本で仕事をしている夫と結婚しました。現在は、夫と6歳の娘との3人家族です。

【子どもの言語】

子どもは韓国で産みましたので、国籍は韓国です。その後、日本には友だちがおらず韓国に母がいたので、子どもが幼稚園に入るまでは、母娘2人で韓国と日本を2～3か月おきに行ったり来たりしていました。

娘は日本語と韓国語の両方の言葉を話すことができますが、どちらかという韓国語のほうが上手です。日本語を覚え友だちをつくるために、幼稚園に入ってからはずっと日本にいます。今年の夏に韓国に1か月ぐらい帰っていたら、韓国語のほうが上手になりました。韓国語を話すときは、親や大人に対して丁寧な言葉を使うのですが、日本語を話すときは丁寧な言葉を使わないので、ときどき頭に来ることがあります。

私自身は、韓国人の友だちが多く夫も韓国人なので、日本語が以前より話せなくなっています。逆に、娘はどんどん日本語が上手になってきました。最近、娘が日本語で話しかけてきても聞き取れないことがあります。これからどうなるか少し心配です。

子どもたち同士は、国籍に関係なくみんなが友だちです。でも、特に仲の良い友だちは、同じ国の子どもが多いと思います。同じ国同士のほうが言葉は通じますし、母親同士の仲が良くなりやすいということもあると思います。

通っている幼稚園は半分ぐらいが外国人のため、母親たちもオープンマインドになりトラブ

ルは少ないです。それぞれの国の母親たちが知っている情報が違うので、いろいろ情報交換できるという利点があります。

娘は、韓国と日本の両方の言葉と文化を身につけています。さらに英語圏の国などに行って、いろいろな文化を学び、国際的な仕事に就けたらいいと思っています。

【学校での保護者とのつき合い】

日本人の保護者とのおつき合いは、簡単なメッセージを送ったり、知らないことを相談したりする程度です。話してみるとやはり韓国人と感覚が違います。どこまで立ち入っていいのか、相談をしても失礼にならないか、などいろいろと考えてしまいます。同じ国の人かどうかということは、結構意識しています。

今住んでいるマンションにいる中国人や日本人とのつき合いは多いです。マンション内のハロウィンパーティーなどのイベントに子どもたちを誘ってくれるので、そこで仲良くなっています。同じマンションには、韓国人はあまりいません。

【地域活動について】

町会は入っていません。町会は神社のイメージや高齢者が多いという印象があります。もう少し年をとって参加する勇気が出たら、お祭りなど町会の仕事を一緒にやりたいと思います。

【多文化共生のまちづくり】

いろいろな国の人と一緒に住んでいるまちだけど、仲よくなるためのきっかけがないです。知り合うためには、それぞれの国の流行などを話題にした簡単な会話を楽しめる機会があると良いと思います。そのためのひとつとして、日本語を教えてくれたらいいと思います。私自身もどんどん日本語のレベルが下がっているので、漢字のテストがあったりいろいろなことを教えてもらえたりするなど、役に立つ日本語教室だったら、みんな来ると思います。これは、私だけの考えではなくて、韓国人のママ友も同じ意見です。

【日本で生活するなかで感じること】

困ったことは、韓国料理のお店で、日本人にはとても優しいのに私たちにはぞんざいだったりする「逆差別」が何回もあったことです。また、娘がまだ小さかった時、一般のクリニックに連れて行きました。そこは小児専門ではなかったもので、乳幼児をちゃんと診てくれるのか心配でした。日本は小児科が少ないと感じます。

良かったことは、韓国だと「当たり前」と言われてしまうことが、日本では「がんばっているから大丈夫だよ」と褒められることです。日本に住んで一番良かったことは、このように勇気づけられることです。

外国人 雇用労働者

No. 13

韓国 女性 50歳代 翻訳

【来日時期と来日目的】

韓国で現在の夫と結婚し、1988年4月に上の娘が1歳の時に夫の勉強のために来日しました。

【現在の仕事】

韓国では、電子機器会社の経理部に勤めていたのですが、結婚を機に退職しました。今は、翻訳や夫の会社の手伝いをするほか、週1日、非常勤で外国人の相談業務をしています。相談の中には、難しい内容のものがあります。例えば、日本に初めて来てどうすれば良いかわから

ないのですべてやってほしい、と要望されることもあります。このような要望に応じることはできませんが、困っていることはわかるので、どうしたらいいか悩みます。勤務時間は午前10時から午後5時で、同僚は同じ曜日に出勤する日本人の相談員です。

ほかに、一時、知り合いに頼まれて旅行会社に勤務したことがあります。今の仕事も所属する団体から紹介されて就きました。それ以外はあまり仕事をしていないので、日本で仕事を探す苦労をしたことはありません。韓国とは違う文化の国で働くということについては、日本で長く生活してから就職したので、日本についての一定の知識があり、特に困りませんでした。

【日本で生活するなかで感じること】

最初は東京の下町に住んでいて、始めから私は韓国人ですということをはっきり言いました。その当時の周りの人たちはとても親切で、周りの人たちのほうがいろいろ気づいて教えてくれたので、言葉以外はあまり困ったことはありませんでした。子どもも同じです。当時は外国人が少なく、幼稚園には外国人は私の子どもしかいなかったのですが、友だちもたくさんでき、お互いの家に行ったり来たりして楽しく遊んでいました。子どもは日本人の名前ではなかったので、みんなと違うねと言われたことはありましたが、いじめなどはありませんでした。

その後、引っ越しをしてそれまでの友人とはなかなか会えなくなったこと、教会が生活の中心になりそこで知り合った韓国人と行動することが多くなったこと、娘が韓国の学校に行くようになって子どもを通じて日本人の親と知り合う機会もなくなったことなどから、日本人とのつき合いは減ってしまいました。もし、教会に行っていなかったら日本人とつながっていたかもしれないとも感じます。同じ教会に通う韓国人が同じマンションに住んでいることもあって、近所に住む日本人とのつき合いもないです。きっかけがあれば、日本人とつき合いたいと思います。

【子どもの言語】

娘は、小学校6年生の時に韓国の学校に入りました。当時、韓国語がうまく話せなかったのので、日本語を使っているグループとしか遊ばせませんでした。そのうち日本人と韓国人の両方のグループと仲良くできるようになり、今は、両方の文化を知って両方に対応できるバイリンガルな子どもになりました。

文化の違いとしては、私は、日本人の考えや気持ちを表に出さない部分になじめず、少し寂しい思いをしています。この点は韓国人と違うところです。でも韓国に比べて日本は静かで、私には暮らしやすいです。

【多文化共生のまちづくりについて】

新宿区が取り組んでいる多文化共生施策はとても良いと思います。でも、知らない人が多いので、多くの人に知ってほしいし、もっとPRしてほしいと思います。

No. 14

イタリア 男性 20歳代 日本語学校勤務

【来日時期と来日目的】

子どもの頃から日本の映画やアニメ、武道などが好きでした。ヨーロッパとは違う日本の建物や風景にも魅了され、いつか日本語を勉強したいと思っていました。しかし、なかなか実現しないまま、大学を卒業してイタリアで就職し、音楽業界で働いていました。しばらく経ってから、年をとる前に子どもの頃の夢を実現しようと思い立ち、半年間の長期休暇を取り、日本語の勉強をしに来日しました。

【現在の仕事】

来日当初は半年間だけのつもりでしたが、在留期間を2回も延長しました。すごく良い学校に入ったこともあり、できるだけ日本語の勉強を続けたいと思うようになりました。毎日勉強

すること、新しいことを覚えることは、懐かしい学生生活がよみがえったようでした。

卒業が近づいた頃、通っていた学校でデジタル教材を導入する話が持ち上がりました。イタリアの大学でマルチメディアコミュニケーションを専攻していたため、そのプロジェクトに関わることになり、卒業後、常勤職員として採用されました。

現在は、全生徒にタブレット端末を貸し出して、教材をデジタル化するラーニングシステムの開発と、企画広報を担当しています。また、元は学生なので、学生と教員との橋渡しをする役目も担っています。勤務時間は、常勤職員なので日本人職員同様、1日8時間です。学校には約15名の常勤職員がいます。外国人職員は、私のほかに日本在住歴が長いアメリカ人が1名います。

【日本で仕事をする事】

日本は会議が多いと思います。今勤めている日本語学校は、他の日本の会社より会議は少ないのですが、それでも外国人職員から見ると多いと感じます。日本人にとっては、会議を重ねることが重要かもしれませんが、外国人職員から見ると無駄だと思ふときもあります。仕事を進めるスピードも違います。日本の仕事の仕方の特徴かもしれませんが、すぐやっつけてしまえばいいものも回り道をするというか、余計な手間がかかっていると感じるときがあります。

日本で仕事をしているので、基本的には日本のやり方に合わせるようにしています。自分でやり方を決められるときは、日本とイタリアのやり方を比べ、それぞれのメリットとデメリットを考え、良いと思うほうを選んでやっています。無駄だと感じたときや、やり方に問題があると感じたときは、遠慮せずはっきりと伝えます。外国人の職員だからこそできることかもしれません。でも、その際に納得がいく説明を受けたら、自分が合わせます。

【交友関係】

半年前まで学生だったので、職場である日本語学校内に友人が多くいます。いろいろな国のことを知りたいと思っていたので、学生として通っていた頃から、イタリア人だけで固まるようなことは避けてきました。日本、ヨーロッパ、アジア、アメリカと、友人関係は国際的です。出かけるときには、友人同士で「この言葉を知っている？どんな意味？知らないから調べよう」などと日本語の話をし、勉強になっています。

以前、大久保地域に住んでいた頃は、家の近所の店の人たちと朝夕のあいさつを交わしていて、「いってらっしゃい」、「今日は早いね」などと声をかけてもらっていました。最近、仕事で地方に出張するようになり、東京の人と地方の人は言葉や習慣がまるで違うことを知り、驚きました。異なる文化や人との出会いが、一番おもしろいと思っています。

No. 15

ネパール 男性 30歳代 会社勤務

【来日時期と来日目的】

2005年に留学のために日本に来ました。福岡県の日本語学校で日本語を1年半学んだあと、福岡県の専門学校でコンピュータの勉強をしました。その後、埼玉県の大学で情報ビジネスを2年間学び、別の大学の大学院で地域開発について研究しました。ネパールの大学で教育を学んだこともあり、ICTなどの新しい技術をネパールの田舎の子どもたちに対する教育にどう生かすかを研究しました。

【来日前の仕事】

ネパールは朝の大学、昼の大学があります。私は、田舎から遠く離れたポカラという都会にある朝の大学に通いつつ、新聞記事を書く仕事をするという生活をしていました。

【現在の仕事】

フェイスブックがきっかけで、ネパール人が経営している会社に就職しました。社長がフェ

イスブックの私の書き込みを読んで声をかけてくれ、大学院を卒業してすぐに入社しました。就職活動として、日本の会社の面接も2、3か所受けていましたが、現在の会社への入社が決まったため辞退しました。就職活動という習慣はネパールにはないので、ネパールから来る学生は在学中に何もせず、卒業する時に進路が決まっていなかったことがあります。最近外国人を雇用する企業が増えているので、事前にしっかり準備しておかないといけないですね。

【異なる言語・文化のなかで仕事をしてみて】

困ったことは、曖昧な言葉です。日本は曖昧な言葉がたくさんあります。例えば、「ちょっと」と言うと、80%だめという意味です。ネパールから来たばかりの人は、『「ちょっと」と言っているから、OKかもしれない』と受け取る人が多くいます。今はニュアンスを推測できるようになりましたが、日本語に慣れないとこのような曖昧な言葉は理解しにくいです。

また、学校では、「行きますか？」のように、後ろに「か」がついた場合は質問だと教えられました。しかし、買い物に行った時に「これ買うの？」と「の」がつきました。「の」というのは英語の『No』のことかなどと考えてしまいました。学校で習ったことと日常会話の違いに苦労しました。

日本の良いところは『あいさつをする』という文化です。笑顔で心の温かさをお互いにシェアするあいさつはとても良いことだと感じています。あとは言葉の数です。日本語には、ネパール語にはない、さまざまな状況に合わせた言葉があり、そのときどきにふさわしい言葉を使うととても気持ちが伝わります。今はネパール語で「ダンネパール（ありがとう）」と言われるよりも、「ありがとうね」という言葉のほうが気持ち良く感じます。日本語には、「どうも」や「ありがとうございます」などさまざまな言葉があることが良いことだと感じています。

【将来の展望】

この仕事を将来も続けていこうと思っています。ネパールは、まだ発展途上なので、設備など、日本に比べて整備されていない面があります。日本の生活に慣れたので、これからも日本に住みたいと思っています。

【交友関係】

会社に入るまでは居酒屋などのアルバイトで知り合った日本人の友人が多く、一緒に飲みに行ったり遊びに行ったりしました。大学時代の友人も大事で、今でもいろいろなつながりがあります。

会社に入ってからネパール人の友人が増えました。日本人の友人は、ネパール人と結婚していたりネパールへ行ったことがあったりなど、何らかの形でネパールと関係のある人が主です。

また、子どもを日本の学校へ行かせていますので、その関係で日本人の知り合いが増えました。子どもを連れて歩くと、子どもの友だちに話しかけられたりプールや公園で声をかけられたりして、日本人の知り合いが増えています。

【日本で生活するなかで感じること】

東京で部屋を探していたとき、不動産会社で「外国人に貸す部屋はない」と言われ、とても苦労しました。大学が始まらないと書類がもらえない、書類がもらえないとビザの更新ができない、ビザの更新ができないと仕事に就けない、仕事に就けないと部屋が決まらないという状況でした。約1か月部屋を探し回り、外国人は不動産会社から差別されているのではないかと感じました。

日本で嫌だと感じたことはありません。出来事をどのように見るかは、自分の考え方次第です。日本には、もちろん良いところもあれば悪いところもあります。私は、物事の良いところを見るようにしているので、嫌だと感じたことはありません。

一番良かったことは、日本からたくさん学べたことです。例えば、東日本大震災の時、日本人は、スーパーの売り場の食べ物を自分の分しか買わず、余分に買うことはしませんでした。

日本は、ほかの人のことを考えて行動する人が多くいます。このようなことを学べたので、日本に来て良かったと感じています。

No. 16

タイ 女性 30歳代 タイ語講師

【来日時期と来日目的】

2009年に旅行目的で来日しました。その後、タイにいた時から交際していた現在の日本人の夫と結婚しました。

【現在の仕事】

日本に来る前は、タイで貿易関係の仕事をしていました。今はタイ語講師の仕事をしていません。所属している語学学校から会社に出張して教えています。例えば、タイに工場がある日本の会社の従業員が営業や転勤でタイに行く前に、その会社でタイ語を教えています。今は5か所ぐらいの場所で教えています。このため、ときには1日に2か所でタイ語を教えることがあります。

きっかけは、ハローワークでタイ語を教える仕事を紹介されたことです。タイ語の先生はやりたかったし、私にとっても一番簡単で、何も大変なことはありませんでした。

来日して最初の1年半ほどは、テレビ局で料理番組の準備など、アシスタントの仕事をしていました。半年後にタイ語教師も始め、1年間は両方の仕事をしていました。しかし、疲れがたまりふたつの仕事を続けることが難しくなったので、好きなタイ語の先生を続けることにして、テレビ局での仕事はやめました。

【交友関係】

日本人の友人は、語学学校のタイ語クラスの生徒が多いです。タイ人の友人は少ないですね。最近、日本人の友人からタイ人を紹介してもらいました。その人は、日本人と結婚している女性で、結婚したのは多分私と同じぐらいの時期だと思います。また、レストランのオーナーをしている友人がいて、その人は顔が広く、今後はこの友人を通じていろいろな人と知り合う機会が増えると思います。日本の文化を知ったり、いろいろと勉強したいと思っています。

【日本で生活するなかで感じること】

病院で医者の特長な言葉がわからなくてとても困っています。病院で使われる言葉は学校では勉強しなかったし、病気の名前はたくさん買った日本語の本にも載っていないので、わかりません。医者にいろいろ相談したくても、1～2分しか時間がないのでとても困っています。

また、日本の会社は、採用を日本人に限定しているところが多く、外国人は最初から採用対象に入っていないようなので、外国人が仕事を探すときに困っていると思います。

【将来の展望】

将来のことももちろん考えています。今個人的に日本語を教えてもらっています。日本語検定の1級を取ることができたら、大学院で勉強し、日本で暮らすタイ人のために日本語の先生になりたいと思っています。日本語はとても難しいので、タイ人が勉強するのは大変です。私は1日10時間、毎日勉強しました。学校は4時間なので、自分で6時間勉強しました。タイ人がこのような生活をするのは大変です。

日本には、これからもずっと住み続けると思います。とても便利ですし、夫の両親も同じまちに住んでいます。

韓国 女性 20歳代 衣料品小売りチェーン店勤務

【来日時期と来日目的】

大学を1年間休学し、ワーキングホリデーを利用して2015年5月に来日しました。日本語の会話力を上げることが目的です。日本語サークルで日本語の勉強をしています。

【現在の仕事】

日本でも有名なブランドの衣料品小売りチェーン店にアルバイトとして勤務しています。ここで働けば、日本語で話す機会がたくさんあるため日本語の会話力が身につくと思いましたが、今は掃除や品出しなどのオープニング準備の業務をしていて、店頭に出ることはありませんが、いずれは話す仕事をしたいです。

勤務日と時間は、週4日で2時間半から3時間の勤務です。同僚は日本人、台湾人、インドネシア人など10人くらいいます。

【日本で仕事をすること】

それほど困ることはありませんが、よくわからない言葉や表現があったとき、ちゃんと返事ができないことがあります。日常生活では、インターネットで調べることができるし、韓国語表記もたくさんあるので大丈夫です。

【日本で生活するなかで感じること】

韓国では、買い物や食事は誰かと一緒にするのが普通ですが、日本では1人でも大丈夫なので、自由で良いと思います。

【交友関係】

普段つき合っているのは、バイトの同僚や友だちの紹介で知り合った人です。日本人、台湾人、韓国人、シンガポール人がいて、全部で5、6人くらいいます。また、私はシェアハウスに住んでいて、そこには30人くらいの同居人がいますが、私と友だちの韓国人以外はすべて日本人です。シェアハウス内ではあいさつをする程度でつき合いはありません。日本人とも友だちになりたいとは思っているのですが、なかなかきっかけがつかめません。

【将来の展望】

ワーキングホリデーの後は韓国に戻って大学を卒業し、将来は日本でも韓国でもいので旅行会社で観光の仕事をしたいです。

【多文化共生のまちづくりについて】

東京では、新宿が一番外国人の多いまちだと思います。それは新宿区に来る前から知っていました。新宿生活スタートブックや生活情報紙も区役所でもらいよく読んでいます。災害についても新宿区のホームページで防災に関する制度を調べました。新宿区は外国人が多く住んでいるほか、韓国語の看板や案内、ガイドも多くあり、大変便利です。新宿区に住み続けたいと思っています

韓国 女性 20歳代 飲食店勤務

【来日時期と来日目的】

2014年12月に旅行で1回来て、2015年4月にワーキングホリデーを利用して再来日しました。韓国で大学を卒業した後、音楽教室で働いていましたが、人にものを教える仕事は自分に向いていないと感じていました。そこで、自分の好きなことをしてみようと考え、以前から興味

のあった日本へ来ることにしました。

日本の食べ物やテレビ番組が好きなので、日本語を勉強して、日本のことをもっとよく知りたいと思っています。

【日本で生活するなかで感じたこと】

日本語サークルに入ったのでそこで出会った日本人と週末に食事にでかけます。平日はお互い仕事があるため会うことはできません。わからないことがあるときも教えてもらっています。

日本語教室や交流会の情報を見つけてやっと友人をつくれたので、外国人は情報がないうちは人と知り合うのがとても難しいと思います。

日本に来て驚いたことは、日本人は道で人にぶつかるとすぐ謝ることです。韓国ではあまり気にしない、仕方ないという感覚なので、その習慣はありません。今までは習慣がなくてぶつかってもすぐに言葉が出ないのですが、謝るほうが良いと思うので、これから習慣化していきたいと思っています。

韓国では小さなことをあまり気にしないところがありますが、日本人は小さなことでも大切にす、小さなことでもみんなでがんばろうと結束するところが好きです。

【現在の仕事】

最初はコーヒーショップのアルバイトを探していましたが、人気があつてなかなか面接の機会を得ることができず、それならば日本の雰囲気を感じられるところで働こうと、まずラーメン店を選びました。日本のラーメン文化は韓国でも有名です。

日本人店員5名でやっている小さい店で、食券で注文をとる形式になっていたの、言葉も決まった言葉だけ覚えればよく、慣れるまでそれほど時間はかかりませんでした。ただ、お昼時はとても混むため、わからないことがあつても、忙しくしている他の店員に質問することができず、大変でした。また、私の日本語を聞き取れなかったときに、親切に聞き返してくれるお客様もいましたが、そうでないお客様もいて落ち込むことが多くなったため、そのラーメン店をやめました。

その後、念願のコーヒーショップに採用され、朝から昼まで働いています。

【日本で仕事をする事】

来日したばかりの頃は、わくわくした気持ちでいっぱい、日本で働きながら、できたら学校にも通いたいと考えていました。しかし、最初に勤めたラーメン店での辛い経験から、韓国に帰りたいとしばらくは思っていました。

新しく始めた仕事で大変な思いをするのは、韓国人だから、外国人だからではなく、日本人も同じだろうし、環境にもよります。ワーキングホリデーを利用すれば、すぐに日本語が話せるようになると思っていましたが、実際は自分が努力しない限り、そう簡単にはできないことだとわかりました。今は新しい職場に変わったので、もう一度がんばりたいと思っています。

No. 19

中国 女性 30歳代 販売店勤務

【来日時期と来日目的】

中国の大学で日本語を勉強した後、日本で日本語を学びたいと思い、2001年4月に留学目的で来日しました。日本語学校に1年間通い、卒業後は大学で地球環境法という法律を学びました。大学在学中に日本語学校で一緒だった中国人と結婚し、大学は1年で中退しました。

【現在の仕事】

大学中退後、2003年に今の会社にアルバイトで入り、2005年に正社員になりました。就職のきっかけは、通訳募集に応募したことです。留学生が多い地域なので、事業所で通訳が必要だったのです。私は朝鮮民族の中国人なので、日本語と中国語のほかに韓国語も話せます。

勤務は6時間ですが、9時半には会社に着いて10時のオープンに備え、夕方の5時まで働いています。子どもがまだ小さいので、労働時間は6時間に抑えています。

社員はアルバイトを含めて約100人です。私が働く事業所は全部で12人で、日本人が4～5人、中国人が3人、韓国人が2人、ほかにベトナム語を話せるアルバイトの学生がいます。

【将来の展望】

2001年に来日したので、中国を離れて14年ぐらいになりました。私は今30代で、もうすぐ40代になります。今から中国に帰っても、中国の社会に慣れることができるか自信がありません。日本にこれだけ長く暮らすと、日本の社会から離れるのは難しいです。

【交友関係】

同じ国の人とは仲良くしています。ほかに、近所の日本人のママ友とは、週末に一緒にお出かけするなど仲良くしています。仕事をしていると近所づき合いをしている時間もないので、ママ友以外は、あまり友人と呼べる人はいません。できればいろいろな国の人と知り合いたいです。

【日本で生活するなかで感じること】

差別されているということではないのですが、日本人との間に壁のようなものを感じることがあります。この点、中国にはたくさんの民族がいるので、民族の間に壁はありません。国籍に関係なく、みんな仲良くなれると良いと思います。

このことを除けば、日本はとても暮らしやすい国だと思います。困っているときには近所の人から声をかけてくれますし、わからないことは親切に教えてくれます。また、日本はチャンスが多いと思います。中国では学生が自分で稼ぐのはなかなか難しいので、両親に仕送りしてもらっていました。日本では、学生もアルバイトができます。働けば働いただけお金になります。日本では自分の体を動かせばご飯を食べていけることが、とても良いと思います。

【多文化共生のまちづくりについて】

新宿はいろいろな国の人がいるまちだと思います。今までは韓国人がとても多かったのですが、最近はベトナム人がとても増えたように感じます。

外国人は、日本の食べ物や着物に興味を持っている人がたくさんいます。いろいろな国の料理講座や民族衣装の体験講座などでいろいろな国の人と交流できたら、お互いに理解を深めることにつながるし、その先にみんなが仲良くできる社会があると思います。いろいろな国の人と交流できる講座が大切だと思います。

No. 20

中国 女性 30歳代 販売店勤務

【来日時期と来日目的】

2000年に日本語の勉強のために中国から留学してきました。その後、日本で就職・結婚しました。現在は仕事をしながら、来月で2歳になる子どもの子育てもしています。

【現在の仕事】

新宿区内の携帯電話ショップでアルバイトとして働いています。勤務時間は1日8時間が基本で、残業があると10時間ぐらいになります。日本人、中国人、韓国人、ベトナム人の計12名のスタッフがいる多国籍な職場です。

お客様も中国、韓国、ベトナムのほか、ネパール、タイなどいろいろな国の方がいらっしゃいます。私は中国でも北朝鮮に近い所の出身なので、中国語と韓国語での対応をしていますが、その他の国のお客様が来た際には、いろいろな国の言語に翻訳された資料を使ったり、英語が話せるスタッフが中心となりコミュニケーションをとっています。

日本人はすごく優しく仕事を教えてくれるので助かっています。これまでに仕事で困ったことはほとんどありません。職場の同僚とは仕事の後に食事に行ったりもしています。

【災害に関する意識】

東日本大震災が起きた時は、コンビニでアルバイトをしていましたが、怖くて体が動きませんでした。中国では地震のない地域に住んでいたため、あれほどの大きな揺れは初めての経験でした。日本人の同僚がとっさにドアを開けたりする姿を見て、日本人は地震に備えた訓練をしているから、このような知識や動作が身につけているのかなと思いました。

現在、マンションの自治会には入っていますが、日中は仕事をしているため防災訓練には参加できていません。今後は子どものためにも参加しなければいけないと思っています。

【日本で生活するなかで感じること】

来日して家を探すときに、日本人でないとだめだと言われたり、保証人の話が出たりと、大変苦労しました。私自身の日本語が上達したからか、日本に外国人が増えたからなのかはわかりませんが、今は特に困ることはありません。

子どもが生まれてから感じたのは、電車などで席を譲ってくれる人がほとんどいないことです。中国ではみんなが譲ってくれます。日本人は親切ではありますが、そのような優しさは足りないと思います。

今心配しているのは、子どもが幼稚園に入園した時に、日本人の保護者とのコミュニケーションをうまくとれるかということです。

【多文化共生のまちづくりについて】

新宿区の多文化共生の取組みは、率直に素晴らしいと感じました。学んできたことや文化が違う人たちが一緒に暮らすためには、お互いのことを理解しようとするのが最も大切だと思います。

日本人はとても親切でマナーを大切にします。まだまだ日本人と同じようにはできませんが、日本で暮らす多くの外国人も日本のルール・マナーを守ろうと努力をしています。もちろん悪いことをする外国人もいますが、それはごく一部であって、そのひとつだけを見て悪いイメージを持たないでもらえたらうれしいです。

No. 21

フランス 男性 30歳代 水道関係企業勤務

【来日時期と来日目的】

学生の時に水処理関係の技術を勉強していたので、水道関係の企業に就職しました。フランスでは、6年間同じ会社で働くと1年間の休みを取ることができます。日本に支社のある企業だったことと、私自身フランスと日本の文化の違いなどに興味があったため、休暇を利用して2010年10月に来日しました。日本語の勉強は来日してから始めました。

【現在の仕事】

現在マネージャーをしています。技術部に配属されていて、部下はいません。勤務時間は午前9時から午後5時45分です。東京支社に300人ぐらいいる従業員のうち、フランス人は15人ぐらいで、中国人も若干名います。勤務中は日本語とたまに英語を利用しています。

日本で仕事をする際に感じるのは、言葉が難しいことです。敬語など、相手によって使い分ける必要があって難しいですが、楽しい面もあります。

日本で仕事をしてみて良かったことは、フランスと違って、会議の開始時間が正確であることです。逆に困ったことは、ビジネス関係のルールやマナーが厳しいことです。

【地域での活動】

町会については聞いたことがある程度ですが、四谷地域では勉強会や祭りに参加し、日本人とも交流しています。日本語を話したいので、日本人とつき合うほうが良いと思っています。四谷大好き祭りの時には、子どもたちに簡単なフランス語を教えたりしています。

【災害に関する意識】

東日本大震災があった時は、京都にいました。大きい地震は経験したことはなく、地域で避難訓練などを行っていることも知りませんが、東京都から配布された「東京防災」という本を見て、これから備蓄を考えているところです。

【将来の展望】

今も日本語を勉強していて、もっともっと上手になりたいと思っています。税金も払っていますし、仕事もうまく続けられれば、あと5年は日本に住みたいと思います。また、趣味で合気道をやっていて、本部道場が区内にあるので、新宿区に住み続けたいと思っています。

【多文化共生のまちづくりについて】

新宿は海外でも有名で、ガイドブックに必ず載っていますが、地域が広いと思います。生まれ故郷のパリに似ていて、区内のいろいろな所に行くと、文化的におもしろいことを見つけられそうです。

東京に来る前に住んでいた滋賀や京都に比べると外国人は多いと思います。新宿区は日本語教室もあり、以前住んでいた区と比べて、区役所には外国語が通じる人がいますし、資料も充実しているのですばらしいと思います。今やっていることを続けていってほしいです。外国人に「ようこそ」という気持ちでやっていると思うので、いろいろな国から人が来て、楽しいまちになるでしょう。

また、日本の文化や生活習慣を外国人に伝えていくことも大切だと思います。

No. 22

アメリカ 男性 30歳代 外国大学日本校職員/教員

【来日時期と来日目的】

2004年にアメリカの大学の留学生として初めて来日しました。その時は3か月の滞在だったのですが、大学卒業前に日本に戻りたいと思い、日本のホテルに入社しました。2007年から、現在の大学に勤務しています。現在は妻と2人の子供と暮らしています。

【現在の仕事】

私が勤務している大学は、1、2年生の間は日本校で勉強し、3年生からアメリカの本校に編入します。私はインターナショナルプログラムのディレクターとして、その留学生の部を担当し、アメリカの本校と日本校の間をとりもつ役割を担っています。また、大学院の先生の資格も持っているので、1学期に1科目だけですが授業もしています。

勤務時間は平日の9時から18時です。しかし、外出や大学のイベントなどがあると、土曜、日曜の出勤もありますし、日中は学生のために時間を割いているので、自分の仕事を進めるために遅くまで残業する日も多いです。

ホテルに勤務していた時に、今の大学の校長先生から連絡がありました。日本のほか、韓国やドイツにも留学に行った経験を生かして、留学生の部を担当してくれというスカウトでした。ビジネス業界にも興味はありましたが、留学の機会をつくる仕事に魅力を感じ、大学で働くことを決めました。

【職場環境】

学生は約330人で、スタッフは、事務局、先生を合わせて約30人です。先生は約90%がアメリカ人で、そのほかオーストラリア人、イギリス人など英語を母国語としている人です。日本人の先生も1人いて、留学生に日本語の授業を担当しています。事務局は8人で、私自身も事務局のスタッフとみられることがあります。外国人は私（アメリカ人）のほか、韓国人が1人いて、それ以外は日本人です。

日本人が多いことで困ることもありますが、基本的には素晴らしい職場だと思っています。日本人のスタッフは99%ぐらいはアメリカへの留学経験を持った、幅広く物事を考える人たちです。前職のホテルでは100%日本のやりかたが求められていましたが、今は、私が日本にいなから仕事をしているアメリカ人であることを理解してもらえていると思います。

【日本で仕事をする事】

日本とアメリカの教育方法は大きく違い、アメリカでは授業中にディスカッションが重要になります。アメリカの大学のスタイルで先生が学生にどう思うかを聞くと、教室がシーンとなってしまふことがあります。私たちも最初にそうなることはわかっている、このような授業スタイルの違いを乗り越え、こうやらないといけない、という話を学生にします。学生もそれに慣れることで、アメリカの大学についていけるようになっていけると思っています。

また、日本の会社は、さまざまなサポートをしてくれます。日本の学生は3年生でアメリカに行って、再び自分の国に戻り就職したいという人が多く、日本の会社も、日本の学生と留学生を、インターンシップとして受け入れ、サポートしてくれます。

【将来の展望】

妻も日本人ですし、しばらくは日本にいる予定です。3年前にアメリカに帰国して勉強していましたが、私自身も日本に戻りたいという気持ちが強かったですね。

【災害に関する意識】

私の家では、絆創膏やガーゼをはじめ、薬、飲料水、非常食、電池などを備蓄しています。また、家族では一緒に避難する場所を決め、その避難所まで行けなかったらどこに行くかとか、どこに連絡をするかを決めています。また、東日本大震災では携帯が使えなかったのも、Wi-Fiやインターネットを使用したテレビ電話などの連絡方法も考えており、私か妻のどちらかが子どもと一緒にいた場合には、子どもを優先に考えて、親が2人そろわなくても先に避難することも決めています。

【多文化共生のまちづくりについて】

イベントに参加して、いろいろ経験したり、いろいろな人と出会って話すことはよくしていましたが、子どもが生まれてからは少なくなりました。私自身は、何かチラシや宣伝を見て、おもしろそうだと思うことが多いと思います。

日本人はとても親切だと思いますし、心配や不安は一切ありません。道に迷っても、日本人に聞けば絶対に親切に教えてくれます。どこの国よりもうまくやっていると思います。

外国人 留学生

No. 23

フランス 男性 40歳代 日本語学校生

【来日時期と来日目的】

2015年1月に来日しました。フランスではコンピューターソフトのエンジニアをやっていますが、1年間の休暇を取って日本に来ました。

来日目的は、日本語の勉強です。子どもの頃、日本からたくさんのおもしろいものが輸入されていて、その時から日本に興味を持ち、日本に行きたいと思っていました。

【日本の文化について】

日本の文化で好きなものは、和食などの食べ物や、祭り、花火、和服です。先週、日本人の友だちと調布の花火に和服を着て一緒に行きました。ほかには、漫画、ゲーム、黒沢監督や小津監督の映画など、サブカルチャーも大好きです。フランスは漫画を世界で一番多く輸入している国です。

日本に来る前から知っていたことですが、毎日夜の8時に帰り、休みもない日本のサラリーマンの生活は、本当に大変だと思います。

【日本で生活するなかで感じること】

平日は1日3時間半ほど日本語の勉強をしています。フランスで貯金をしていたので、問題はありません。今は、日本語学校で勉強する以外に、ときどきフランス語を教えています。

日本で生活する中で、日本人はとても親切だと思いました。道を間違えて迷った時に、日本人に聞いたら、きちんと丁寧に教えてくれました。

日本はとても住みやすいです。交通が便利ですし、世界で一番安全でまちがきれいだと思います。世界中でどうして日本だけがこれほどきれいなのかはわかりませんが。

【交友関係】

私のルームメイトは日本人ですが、忙しくてあまり会いません。学校のクラスメイトには、中国や韓国、フランス、ネパール、東南アジアの人がいて、ときどき食事に行きます。

現在交際している日本人の彼女には、困ったときにいろいろと相談ができます。箸の使い方も教えてもらっています。週末は彼女とできるだけ会うようにしています。ほかに仲の良い友だちはあまりいませんが、もっとたくさん日本人と知り合いたいと思っています。

【将来の展望】

12月に帰国する予定ですが、日本人の彼女ができたので悩んでいます。1年間日本語を勉強して上達し、日本で仕事ができるようになればフランスの仕事をやめて日本で生活したいです。でも、多分1年間の勉強では全然足りないと思います。

【多文化共生のまちづくりについて】

外国人のために何かしてほしいという希望はありません。今のままでも、日本の生活はとても快適であり、私はとても幸せです。

No. 24

ベトナム 女性 20歳代 日本語学校生

【来日時期と来日目的】

日本の大学に進学したいと思い、2014年4月に来日しました。現在はそのための日本語を学ぶために日本語学校に通っています。大学では観光ビジネスを学びたいです。

【新宿のまちの印象】

にぎやかで、遊ぶ所がたくさんある楽しいまちだと思います。新宿駅や歌舞伎町では外国人はそれほど多いとは感じませんが、大久保地域だけは外国人が多いと思います。

【日本で生活するなかで感じること】

日本へ来たばかりのときは道がとてもきれいだと思いましたが、いろいろな所へ行って、今は、きれいな所があればきれいでない所もあると思うようになりました。また、日本では、電

車でどこにでも行けてとても便利です。

日本の生活で嫌な思いをしたことは特にありませんが、ベトナム人が、家族や周りの人のことを考えるのに比べて、日本人は自分のことばかり考えているように感じます。

【交友関係】

日本語学校に通学しているため日本人の学生はいませんが、いろいろな国の人と友人になりました。一番仲が良いのはロシア人で、韓国人や台湾人ともよく遊びに行きます。友人とは日本語で話しますが、相手が自分の話した言葉を知らないときは説明するのが難しいです。今後も、いろいろな国の人と友人になりたいです。

現在はイタリア料理店でアルバイトをしています。従業員は皆日本人で、主婦や会社員など年上の人です。一緒に食事や遊びに行くことはありませんが、日本語や日本の生活のことなどをいろいろと教えてくれます。SNSで連絡を取ったり、旅行の話聞かせてくれることもあります。皆が優しく、困ったことはありません。

【日本人とのつき合い】

生活費は両親からの仕送りとアルバイトで工面しています。普通に暮らせていますが、困ったときは仕送りの額を増やしてもらうこともあります。

アパートに住んでいますが、隣にどのような人が住んでいるかはわかりませんし、近くに日本人の知り合いもいません。自炊のために近くのスーパーや商店街で買い物をしていますが、店員と知り合いになることはありません。もっと日本人と知り合いになりたいと思っていますが、なかなか機会がありません。町会には入っていませんが、地元でお祭りがあることは知っています。この間は阿波踊りが行われていました。ベトナムではそのようなコミュニティに入っていましたし、日本でも機会があれば入ってみたいと思います。

【多文化共生のまちづくりについて】

ベトナムにはごみの分別がありません。日本ではごみの分別があり、日本に来たばかりの頃は、ごみ出しのルールが日本語だけで書かれていたのでわかりませんでした。あとで日本人から教えてもらいました。日本で暮らす外国人は、日本語をよく勉強することが大事だと思います。日本語がわかれば、日本でももっと暮らしやすくなると思います。

No. 25

イギリス 男性 20歳代 大学院生

【来日時期と来日目的】

高校卒業後、日本語を勉強するために3か月ほど日本に来たことがありました。そのときに日本が好きになったこともあり、大学を卒業した後、2010年8月にアジアの経済について勉強するために来日しました。今は大学院で環境の視点からアジアの経済について学んでいます。

【新宿のまちの印象】

私の出身地はウェールズ地方の田舎ですが、外国人が多く住んでいます。国別ではインド人と中国人が多いです。新宿のほうが外国人の人数が多く、たくさんの国の人がいる印象を受けます。大久保には韓国人も多いですね。私の出身地では韓国人にはあまり会うことがありませんので、そこがおもしろいと感じます。

【日本人とのつき合い】

住んでいるマンションでは隣に住んでいる人にも会ったことはなく、買い物に行くスーパーなども含めてつき合いのある日本人はいません。行きつけのカフェのスタッフとあいさつするくらいです。日本語に自信がなく、きっかけもないので、日本人と知り合う機会がありません。

仲の良い友だちは、以前勤めていたアルバイト先や大学で知り合った人たちです。アルバイ

トで知り合った友だちとは、食事に行ったり、週末に散歩に行ったり、渋谷で買い物をしたりします。日本人の友だちの家に行ったこともあります。

友だちが増えれば、さらに日本の文化を勉強できるのだろうと思います。せっかく日本に住んでいるので、もっと日本人の知り合いや友だちがほしいです。

【日本で生活するなかで感じること】

困ることは、家の契約書などで難しい言葉が出てきたときです。また、大学のシステムがイギリスと違うので、困ることがあります。イギリスでは、だいたいみんな寮に住むので友だちがつくりやすく、お互いに近い関係になります。

良いことは、住みやすいことです。日本はイギリスと比べてコンビニエンスストアがたくさんあり、電車やバスなどの交通機関も発達しているので、日常生活が便利です。

ウェールズでは地震にあったことがなかったので、東日本大震災の時は怖かったです。あの地震の後、水と少しの食べ物を入れたバッグを用意しました。区の防災に関する情報紙は知っていますが、詳しくは読んでいません。

【将来の展望】

大学院を卒業したら、できれば日本で働きたいです。他の町のことはあまりわかりませんが、今住んでいる所は静かで交通も便利なので、住み続けたいです。

【多文化共生のまちづくりについて】

言葉ができないと交流の障害になるので、一番大切なことは、外国人が日本語を使えるようになることだと思います。また、外国人と日本人が交流する機会がたくさんあれば良いと思います。たとえば、日本人と一緒に語学を勉強する機会があれば参加してみたいです。また、私はサッカーが好きなのでスポーツのイベントがあればいいですね。新宿はいろいろな国の人が住んでいるので、日本人と外国人だけでなく、外国人同士の交流もできれば良いと思います。

No. 26

中国 女性 20歳代 専門学校生

【来日時期と来日目的】

2012年10月に来日しました。留学の目的は、ウェディングプランナーの勉強として、日本のマナーやサービス提供の能力を身につけたかったからです。日本のマナーやサービスは、お客さんをリラックスさせるためであり、とてもきめ細やかで種類も多く素晴らしいです。

【新宿のまちの印象】

にぎやかで、いろいろなお店がたくさんあって繁華なまちだと思います。私の家の近くには居酒屋が多く、夜にアルバイトが終わって家に帰る途中に、お酒に酔った人の吐しゃ物が多いのが汚くて嫌ですね。

【日本で生活するなかで感じること】

日本には良いところがたくさんあります。交通はとても便利で、コンビニエンスストアも多いので、本当に生活しやすいです。また、風景がとてもきれいで、食品が安全で、料理もおいしいです。それと、やはり日本の方は本当に優しいと思っています。いろいろと助けてもらって、本当にありがたいと思っています。

日本で生活するなかで一度だけ傷ついた経験があります。スーパーでのアルバイト中に、お客様の日本語をうまく聞き取れずにいたら、名札を見られ「日本人じゃないのか」と言われました。しかしその後で、別の日本人がフォローしてくれたり、代わりに謝ったりしてくれたので、その優しさに感動しました。私は来日前から日本に来た夢を見ていて、日本には縁を感じます。

【交友関係】

専門学校のクラスメイトは30人いますが、ほとんどが日本人で、私以外には中国語ができるマレーシア人が1人います。普通のクラスメイトとしてのつき合いをしています。アルバイト先の同僚は5, 6人で、みんな日本人で仲が良いです。

また、日本に来る前の大学時代にインターネットで中国語を教えていた日本人がいます。相手は神戸に住んでいてまだ会ったことはありませんが、今でもスカイプなどでやり取りをしています。

【将来の展望】

日本でウェディングプランナーをやりたいのですが、この仕事のための在留資格を取るには時間がかかってしまいます。私はすぐにでもこの仕事をしたいので、かなわないなら、中国に帰ってこの仕事をするようになるかもしれません。

【災害に関する意識】

日本語学校に通っていた時、防災館で震度7の地震体験をしたことがあります。地震への備えとして、缶詰を用意しています。家具の転倒防止器具のことなどは知っていましたが、区が無料で取り付けてくれるということは知りませんでした。

【多文化共生のまちづくりについて】

新宿区からの留学生に対する奨学金には本当に感謝しています。日本は物価が高いため、がんばってアルバイトをしています。いつもひっ迫しているのでできるだけ節約しています。勉強のために大切にに使わせていただいています。

No. 27

ロシア 女性 20歳代 専門学校生

【来日時期と留学の専攻】

2013年7月に来日しました。学校では、インテリア学科で製図など建築関係のことを学んでいます。

【新宿のまちの印象】

ロシアに比べると、日本のほうがまちの中にごみが落ちておらずきれいで、また安全です。あと、電車がスケジュール表の時間のおりに来ることに驚きました。

新宿は外国人が多いです。まちなかを歩いていてそう感じます。ロシア語もよく聞こえます。また西新宿と東新宿はまったく違うイメージがあります。西新宿は静かで、オフィスビルばかりですが、東新宿は、危ないとよく言われているため夜はあまり行かないようにしています。

【異なる言語・文化の中で勉強をして】

同じクラスの学生は、半分くらいが外国人で、中国、台湾、香港などアジアの学生が多いです。授業中は、日本人は静かにしていますが、外国人はわいわい話をしていて、授業を休むことも多いです。よく一緒に遊ぶのは、クラスメイトの日本人です。特に理由はありませんが、最初から仲が良く、宿題を一緒にやっています。遊びに行くときも、カフェに行ったり公園に散歩に行ったり、あとはウィンドウショッピングなどを一緒にしています。

今後は、英語圏の人がクラスメイトにいないので、英語ができる人とのつき合いもしてみたいと思っています。

【日本で生活するなかで感じること】

日本人はとても親切だと思います。観光で最初に日本に来た時、スマートフォンもなく紙の地図しか持っておらず、道に迷ってしまったのですが、日本人に道を聞いたら、すぐにその場

所まで連れて行ってもらえました。

困ったことはやはり言葉の問題ですね。最近は英語を使う機会があまりないのですが、日本語よりも英語で書いてある文章のほうがわかりやすいです。まちなかでわからない日本語があったとしても、英語の翻訳がされていれば理解できます。

そのほかに困ったことは特に思い出せません。学校の勉強で、言葉の意味がわからないことがあっても、クラスメイトが助けてくれます。

【将来の展望】

ロシアに帰るつもりはありません。卒業したら日本で就職してみたいです。私はウラジオストク出身ですが、東京はウラジオストクよりいろいろなチャンスがあると思います。私にとってすごく良い経験になると思っています。

【多文化共生のまちづくりについて】

ごみを出す日や分別方法が、最初は難しくてあまりわかりませんでした。今はマンションに住んでいるのでごみはいつでも出せます。以前は台東区に住んでいましたが、生ごみは週に3回くらいしか出せなかったもので、少し困っていました。

新宿区は、外国人にとって、とても便利なまちだと思います。ここから歩いてどこにでも行けるし、いろいろなおもしろいところにも行けます。

No. 28

チリ 男性 20歳代 日本語学校生

【来日時期と留学の専攻】

子どもの頃から日本の技術や伝統文化に興味があり、東京という大都会に憧れがありました。母国で勉強していた日本語を日本で磨いて、日本でITの専門学校に進学しようと考え、2015年3月に来日しました。

【日本で生活するなかで感じること】

現在は、チリにいる両親が仕送りをしてくれるので、アルバイトはせず、勉強に集中しています。東京は物価が高いと聞いていましたが、チリは南米の中でもブラジルと同様に物価が高い国ですし、私にとっては東京が初めての海外生活で他の国と比較することができないため、あまり高いと感じませんでした。

日本語学校では上級クラスで敬語や漢字を勉強しています。日本では、話す相手によって敬語を使うなど、状況に応じた言葉の使い分けが大切なので、練習しているところです。漢字も早く覚えて、日本の新聞を読めるようになりたいです。

【日本人の印象】

日本人はとても親切で、困ったときいつも誰かが助けてくれます。そして生活するのに便利な国です。電車が時刻表どおりに来るし、駅や道の表示が英語で表記されていてわかりやすいほか、コンビニエンスストアや古本屋がたくさんあって暮らしやすいと感じています。

しかし、日本は島国だから外国人に慣れていないのかなと思うときがあります。例えば日本人に「すみません。この住所を探しているのですが、教えていただけますか」と日本語で道を尋ねると、私の顔をじっと見て、尋ねた内容は聞こえていないというときがあります。外国人は日本語を話さないと思われているのか、ときどきこのようなことがあって困っています。

【交友関係】

学校では、中国人、韓国人やイタリア人と親しくなったので、学校帰りや休みの日は一緒にカラオケや居酒屋に出かけています。

シェアハウスに暮らしていて、そこには日本人含めいろいろな国の人が住んでいますが、忙

しい人が多いのか顔を合わせる機会が少なく、ゆっくり話をしたことがありません。趣味のスケートボードをしに行く近所の公園には、同じくスケートボードをしに来る常連の日本人がいて、顔見知りです。また、通っている空手道場が、敬老の日に町会のイベントで実演をすることになり、その時初めて町会という組織があることを知りました。しかしこの先、加入の誘いがあったとしても、外国人会員はいないでしょうし、活動に関わる時間がないので加入しないかもしれません。

日本にいるので日本人と友だちになりたいと思っています。日本人がどんな日常生活を送っているのか、どのようなことを感じているのか、関心があります。

【多文化共生のまちづくりについて】

私の場合は、日本語がわかるので問題ありませんが、日本語がわからない外国人にとっては役所での手続きが大変です。生活のうえでは、英語表記を見て何とかなっていたとしても、書類を日本語で書くことはとても難しいことなので、窓口の対応言語を多くする必要があると思います。

No. 29

アメリカ 男性 20歳代 日本語学校

【来日時期と来日目的】

2015年の1月に日本語の勉強のために来日しました。今回が2回目の来日で、前回は3年前にアメリカの大学の交換留学で3か月間滞在していました。

現在は新宿区内の日本語学校に通っています。日本語の勉強は、アメリカで大学に入学してから始めたので、もう4、5年になります。今は文法や漢字も勉強していますが、主に会話の上達に向けた勉強をしています。

【日本で生活するなかで感じること】

日本とアメリカの学校生活にそれほど違いはありません。日本では先生が残業しますが、アメリカでは先生はあまり残業しません。大きな違いはそれぐらいだと思います。

学校の授業でわからないことがあっても学生同士で教え合っているので困ることもありません。実は最近まで日本語学校では親しい友人はできなかったのですが、日本語が上達し、日本語で自分の考えを伝えたり、コミュニケーションがとれるようになってから友だちができました。せっかく日本語を勉強しに来ているので日本語で会話をすることを大事にしています。

【現在の仕事】

アメリカで働いていた時の貯金で生活してきましたが、現在は英語教師のアルバイトをしています。そのアルバイト先の学校は学生だけでなく社会人もいて、かなり英語が話せる人がいます。

また、実は今、日本の政府と関係があるアメリカでの仕事にエントリーしており、今年の12月に学校が終わったら帰国して面接を受ける予定です。これがうまくいけば、アメリカで就職します。

【交友関係】

遊んだり、ご飯を食べに行ったりする友だちはいます。そのほとんどは、3年前に留学した時の友人や、私のアメリカの大学に留学生として来た日本人の友人です。もうみんな社会人になっているので、平日はなかなか仕事で会えません。

【多文化共生のまちづくりについて】

新宿はほかのまちと比べて国際的な印象を持っています。新宿区が外国人に多言語で情報提供したり、困ったときの相談窓口を用意していることはとても良いことだと思います。やはり、

外国人にとっては何かトラブルが起きたときに、日本語の情報や日本語の窓口だけでは困ってしまいます。また、日本文化に関心がある外国人も多いので、お祭りやイベントなどのお知らせがもっと多言語で用意されていれば良いと思います。日本語のウェブサイトはたくさん見つかりますが、英語やほかの国の言語のウェブサイトは少なく、情報が得られない外国人がたくさんいるはずです。

2020年にはオリンピック・パラリンピックが、2019年にはラグビーのワールドカップが開催されるため、日本はもっと国際化していくと思います。多言語での案内など、外国人向けのサービスがさらに大切になっていくと思います。

外国人 外国にルーツを持つ青年

No. 30

日本／オーストラリア 男性 20歳代 大学生

【来日時期と来日目的】

父がオーストラリア人で母が日本人です。生まれはオーストラリアですが、父の仕事の拠点が日本だったので生まれてすぐに来日しました。父の意向で、小学校4年生から語学留学で2年間オーストラリアへ行って、小学校6年生の2学期にまた日本に戻りました。

【日常の言語】

母とは日本語、父とは英語で話しています。母語は、母親に日本語で育てられたので日本語です。高校は日本の学校でしたが、インターナショナルコースで授業はすべて英語で行われていました。自分はそのほかにイタリア語も話せます。

通常の会話は日本語ですが、ものをじっくり考えて話すときは英語になります。書くときも、英語で考えたことを日本語に訳して書くという作業をしています。勉強は、日本語で困ったことはありませんが、英語では今まで普通に話していたことを文法から勉強するのが大変でした。

【日本で生活するなかで感じること】

オーストラリアは、クリエイティブさや自立性を重視していて、勉強したい人は個人でがんばりなさいという風潮があります。日本は、調和を重視していて反対意見を言うことに抵抗があり、オーストラリアとのギャップを感じました。勉強したい人の環境としては、先生が放課後も質問に答えてくれる日本のほうが良かったと思います。

【文化や習慣の違い】

自分自身はアイデンティティが座っていないところがあり、環境適応力が高いと思っていました。しかし、就職活動の時に自分を深掘りしてみると、個人より組織の中のほうが能力を発揮できるタイプの人間だと感じ、日本人らしいと思いました。

日本の良いところは、時間にルーズでないところと、全体の調和を重視するところです。ヨーロッパではよくストライキで電車が止まりますが、日本では、最終的には全体のことを考えるので、電車が止まるということは少なく、非常に良いと思います。

仕事に対する意識もスタンスが違っていて、学生の採用活動で、日系企業は学生に社会貢献度の高さをアピールするので、学生に引かれてしまうと思います。対して、ヨーロッパやオーストラリアの企業は、純粋に給与をアピールしています。将来は日系企業で働きたいと思っています。

【交友関係】

大学では、自分は知的好奇心が強いので、外国人との付き合いが多いです。今後は、中東の

人とも知り合いたいです。かつてチュニジアに行ったことがあります、中東は知らないことも多く興味があります。友人は、生まれは日本だが海外で多くの時間を過ごしてきたという人が多いです。自分と同じ境遇にいる人たちのほうが、やはり同じ感覚、同じ目線で話ができます。

【多文化共生のまちづくりについて】

看板などの英語の文字が小さくて読みにくい。また、タクシーなど公共の乗り物で、アナウンスは英語なのに、運転手に英語で質問するとまったく通じず、驚かれました。そのほかには、海外からだ日本不動産の情報が探せない、シェアハウスなどをまとめたウェブサイトがあればいいと思います。

No. 31

ミャンマー 男性 20歳代 フリーランスカメラマン兼デザイナー

【来日時期と来日のきっかけ】

両親が日本で難民認定を受け、呼び寄せという形で2008年2月に兄と一緒に来日しました。

【日本語の勉強と高校受験】

来日時点ですでに就学年齢を超えていたので、その年の4月から夜間中学2年に入りました。通い始めた頃は、日本語がまったくわからなかった、電車通学するときに急行と各駅停車を乗り間違えたり、学校に行くこと自体が大変でした。

日本語は、夜間中学の担任の先生が英語やボディランゲージを使って教えてくれましたが、「あいうえお」から始める必要があったので、一旦学校を休学し、難民支援機関で半年間勉強し、その後、夜間中学3年に編入しました。

高校は、入試に英語の傾斜点がある都立高校に入学しました。日本人の友だちが多くできたことで会話から日本語が上達し、2年生の頃には結構話せるようになりました。高校は、外国人生徒が多く、先生もみんな優しくかったです。

【日本の学校生活】

中学生の時、文化の違いを感じる印象的なことがありました。ミャンマーでは先生の前で腕を組むのが礼儀ですが、それを体育の先生の前でやったら、失礼な態度だということで怒られたのです。その後、先生に説明し、お互い誤解があったことがわかりました。

勉強する環境という点で、文化の違いが良かったこともあります。それは日本の学校はクラスの人数が少ないことです。ミャンマーでは1クラスに60名くらいいますが、日本の学校では1クラスに多くて40名。生徒の人数が少ないから、先生が生徒一人ひとりをよく見ることができて、生徒は1人にひとつずつ机があるなかで勉強できるので、すごく良いなと思いました。

【交友関係】

親しい友人は日本人が多く、特に高校生の時の友だちとは今でも仲良くしています。今住んでいる高田馬場は、ミャンマーの飲食店や雑貨店等がたくさんあり、日本に来て15年経つ父親の知り合いが多くいます。

近所の日本人とのつき合いはありませんが、知り合いはいます。日本人にしてみれば、「近くにたくさんいるけど、ミャンマー人ってどういう人なんだろう」と感じていると思うので、そのようなところに出て行って、自分がミャンマーの代表というわけではないけれど、ミャンマー人はこのような人だよというのを見せたいです。

日本人はみんな、親しい間柄でも「ありがとう」と感謝したり、「おはよう」とあいさつします。ミャンマーでは、あまりそのような文化がないので、日本の習慣がすごく好きです。前回ミャンマーに帰った時、ミャンマー語であいさつやお礼を言ってみたら、友だちに「えっ」という反応をされてしまいました。たぶん、ミャンマーにも昔はそのような文化があったと思うのですが、時代が変わったというか、使わなくなったのだと思います。

【行政に望むこと】

区役所からのお知らせがたまにわからないときがあります。ミャンマー語や、もう少しわかりやすい日本語で書いてあったらいいと感じています。

つい最近知ったことなのですが、特別出張所で住民票が取れるのはすごく便利だと思います。区役所に行くのを待たないといけません、特別出張所だとそれほど待たずに取れるということは、多くの外国人は多分知らないと思います。

【将来の展望】

将来は、ミャンマーと日本を行き来したいと思っています。ミャンマーはここ数年、発展してきていて、日本企業のビジネスマンが出張で来ていますし、日本のテレビ番組でもミャンマーの観光地が紹介されるのを見かけます。今後は、観光地だけではなく、日常的なミャンマーをもっと知ってほしいです。インド、中国、タイはよく知られているのに、その中間にあるミャンマーは知られていないため、文化の架け橋となれるようなことをしたいと思っています。

No. 32

ミャンマー 女性 20歳代 大学生

【来日時期と来日のきっかけ】

13年前、父が先にミャンマーから日本に来て、難民申請をしていました。父が難民認定され、呼び寄せという形で母と弟と来日しました。父を待つ間は、母と弟と3人でタイやラオスに住んでいました。

【来日当時のこと】

父とはミャンマー語、母とは英語を使っており、来日した時は日本語がまったくわからない状態でした。まず3か月間、日本語学校に通ってひらがなとカタカナの文字を勉強し、中学2年生の終わりに入学しました。英語教師だった母に、学校で先生が黒板に書いたことをノートにとってくるよう言われ、とにかくノートをとることから始めました。最初は自分が何を書いているかもわからず、ほとんど書き取れませんでした。徐々に速く書けるようになって、最終的には先生と同じ速度で書けるようになりました。あわせて、区の子ども向け日本語教室に週3回通って日本語と授業の予習をして、3年生の頃には友だちの助けも借りながら、授業についていけるようになりました。

【日本の学校生活】

学校に入った当初は周りとはまったくコミュニケーションがとれない状態だったので苦労しました。両親から笑顔でいたらうまくいと言われていたのですが、ニコニコするように心がけていましたが、ずっと笑顔でいたことで誤解されてしまったこともありました。両親は、日本語がわからない私や弟が出歩くことを心配していて、門限を早くしていました。そのため、せっかくのクラスメイトからの誘いも断らなければいけないことが多く、日本語で理由を説明することができなかったので、友だちがなかなかできませんでした。しかしそのような中でも、給食の時間に箸を使い慣れない私のために給食室までスプーンを取りにいってくれたり、体育の経験がなくて走れない私を応援してくれたり、先生もクラスメイトも優しくしてくれました。ようやく日本語でみんなと話せるようになりましたが、友だちができた頃には、卒業の時期でした。

日本人の友だちづき合いには、ミャンマーやタイとの違いを感じます。ミャンマーやタイでは友だちになったら毎日話をして学校にも一緒に行きます。でも日本の場合は、どんなに親しく話して盛り上がっても、翌日になるとまた一定の距離ができてしまう。これは中学校時代だけでなく、高校時代でも経験して、私だけではなく日本人同士でもそのような距離感が普通のようにでした。

【多文化共生のまちづくりについて】

地域のコミュニケーションは日本語です。日本語が話せないと誤解が生まれて、嫌な思いをすることがあります。日本語を学ぶ機会を、なるべく多くつくってほしいです。また、同年代の人が日本人、外国人も一緒に集まって、気軽に話せる場も欲しいです。国が違くと文化や習慣が違うので、よく話してお互いわかりあう努力が必要だと思っています。

行政からのお知らせには必ずルビをふるようにすると、日本語ができない外国人はとても助かります。両親は日本語が読めないので、代わりに私が読むのですが、日本で高校を出た私でもルビがないと難しくて読めないことがあるからです。

父の難民認定を待つ間、国から国へ移動してきたため、このように家族そろって同じ場所で暮らすのは日本が初めてです。このまま新宿で暮らしながら、将来は日本の学校で英語を教える教師になりたいと思っています。

No. 33

中国 男性 20歳代 大学生

【来日時期と来日のきっかけ】

日本で料理人として働いていた父に呼び寄せられ、2007年12月に母と中国から来ました。

【来日当時のこと】

来日してすぐの1月に、中学2年生の第3学期に入学しました。最初に困ったことは、日本語です。新宿区が、学校に日本語支援の先生を派遣してくれて、計2か月くらい勉強しました。並行して、日本語学校にも3か月くらい通いました。

中学校時代のクラスメイトはみんなとても優しく、最初から私を受け入れてくれました。うまく溶け込めるのかなと不安に思っていたのですが、入ってみるとみんな気軽に話してくれ、いろいろと助けてもらいました。

来日当初は、日本の文化や習慣になじめないところが、多々ありました。人前で裸になる銭湯や温泉の文化にも驚きましたし、食べ物の食べ方も、フォークを使った経験がなかったので、来日してしばらくは何を食べるときもお箸を使っていました。

【新宿のまちの印象】

良いところは、国際的なところですね。新宿区にいれば、世界各国の人たちに出会えて、世界各国の料理が食べられます。いろいろな国の料理を食べることは楽しみのひとつです。

地域によっては、まちが汚いのが気になります。あと、人を無理やりお店に連れて行ったという話があったり、夜の歌舞伎町は未だに治安が悪い印象があります。

【交友関係】

高校時代にバンドを組んで、今年の春まで活動してきました。そのメンバーとは今でも親しくつき合っています。また、日本語支援でお世話になった先生方には、今でも連絡をとらせてもらっています。

私は、中国にいた頃は口数の少ないタイプでしたが、日本に来て変わりました。今はむしろ人と話さないと寂しいくらいです。もし日本に来ることができなかつたら、これほど友だちはたくさんできていなかったと思うし、自分がやりたいこともできなくて、目標に向かってがんばることもできなかったかもしれません。日本語の勉強にもなるし、日本文化を学ぶうえで大事なことですので、もっと日本人とふれ合うチャンスがあれば良いと思っています。

【将来の展望】

今後はいろいろな国の人と話したいと思っています。中国から来た私を、中学校のクラスメイトが温かく受け入れてくれたように、違う国の人たちをいかに受け入れるかというのは、と

でも大事なことです。国が違くと文化や習慣ががらりと変わります。心が受け入れることができないと、一緒にやっていけません。

日本語については、文法や語彙はもう少し勉強が必要です。日本人の話す日本語とは差があるというか、まだまだ手が届いていないと思っています。

将来は日本で就職したいです。ピアノが好きなので、楽器関連の業界への就職をめざしています。日本人は創造性豊かで、潜在的な可能性があります。クオリティーの高い日本製品を世界各国に広めるのが目標です。

No. 34

タイ 20歳代 女性 大学生

【来日時期と来日のきっかけ】

母の再婚相手が日本人であったため、2009年3月、中学2年生になる年に来日しました。

【来日当時のこと】

来日前にタイで、ひらがなとカタカナの文字を勉強しましたが、単語として理解していなかったもので、学校に入った当初は周りとはまったくコミュニケーションがとれない状態でした。私のために、継父が日本語教室を探してくれましたが大人向けの教室しか見つけられず、校長先生に相談し、先生の紹介で区の子ども向け日本語教室に入りました。その教室には外国から来た私と同じような境遇の子どもがたくさんいたので、一緒にがんばる仲間ができたと感じました。

日本語の勉強はもちろんのこと、学校生活になじむのにも時間がかかりました。はじめは日本語がまったくわからなかったので話しかけることができず、連絡事項や明日の持ち物を教えてくれるクラスメイトもいましたが、相手に負担だと思われるのではないかと感じることもありました。いじめはなかったけれど、楽しく話したり、一緒にどこかに出かけたりする友だちがいないことが悲しかったです。また、タイではケンカといえば殴り合ったりするような暴力的なものを指しますが、日本では無視する、避けるなどの陰湿なものもあると知って、文化の違いを感じました。

しかし、継父も先生方もよく気にかけて心配してくれ、日本語がだんだんわかるようになると友だちもでき、不安は解けていきました。

【日本語の勉強】

子ども向け日本語教室のほか、学校にタイ語で日本語を教えてくれる先生が来て、授業時間に別の教室で、その先生と2人で勉強しました。授業を抜けて日本語を勉強していても、テストはみんなと同じものを受けなければならないことは大変でしたが、その先生は私の話をよく聞いてくれて、校長先生や担任の先生に私の状況を伝えてくれたので助かりました。「わからないことがあったらいつでも言ってね」と言ってくれて、今でもお世話になっています。

日本語はだいぶ上達したと感じていますが、いまだにサ行とタ行を聞き分けることができません。どうしても聞き取れないときは、文字なら区別できるので書いてもらっています。大学で言語学を学んでいますが、それによると、母語にない音を聞いたり、発音したりすることは難しいそうです。日本人が英語のLとRの区別に苦労するのと同じというのわかりやすいでしょうか。

【文化の違いを感じる事】

文化の違いを大きく感じるのは、人との距離感です。家族関係でいうと、タイは祖父や祖母も含めて大家族で住んでいて関係性が濃厚なのですが、日本では核家族が多くて干渉も強くありません。友人関係を見ても、グループ行動が好きだけれども、お互いを頼ったりはしません。これには違和感があります。しかし逆に、時間に正確なところや何に対しても計画的であるところは、文化の違いでも好ましいところではあります。

【将来の展望】

大学では言語学を専攻しているので友人の中には外国人や帰国子女がいて、刺激があります。将来は、タイに支社がある日本の会社に就職して、日本とタイを行き来する生活がしたいです。今住んでいる地域にはタイ料理店があつて、マンションでは住民同士が日本人、外国人関係なく、気軽に声をかけ合う明るい雰囲気気に入っています。このまちに住み続けたいと思っています。

外国人 自営業

No. 35

イギリス 男性 50歳代 カフェ経営

【来日時期と来日目的】

日本人の妻と二人で日本に住むために来日しました。来日後、5年半ほど経ちました。

【現在の商売】

イギリスでは、印刷会社のマネージャーでした。最初はハローワークで仕事を探したのですが、日本語が話せないと英語教師など英語を使う仕事しかありませんでした。そこで、妻がやりたいと思っていたカフェと一緒にやることにしました。飲食業は、二人とも初めてでした。働いている時間は、だいたい10時から11時間くらいです。

この場所を選んだのは、住まいから徒歩圏だったことと家賃が安かったことが大きな理由です。お客さんは日本人が多く、85%くらいは日本人です。

商店会には入っていませんが、去年、近くのお店の方から誘われて地域のイベントに参加しました。そのイベントは、参加店がそれぞれ「内藤とうがらし」（※江戸時代の内藤新宿の名産品）を使った料理を提供するというものでした。もともとうちの料理は、唐辛子を使うものがなく、その時だけ結構無理やり唐辛子を使った料理を作りました。無理やりだったこともあり、お客さんはあまり来ませんでした。今年も誘われたのですが参加しませんでした。地域とはつながりたいと思っています。今後、うちのお店に合うイベントがあれば、ぜひ参加したいです。

【日本で商売をするなかで感じる事】

文化の違いという面では、日本のお客さんは礼儀正しくて常連になってくれる点が、イギリスとは違うと感じます。日本の文化は静かなのに対して、イギリスはよりアグレッシブな印象です。

このお店は、楽しい人と会えるしやっついて楽しいので続けていきたいと思っていますが、お店の休みが週1日しかなく自分の時間もなかなか取れないので、少し疲れてきたなと感じています。どこの国でも同じだと思いますが、飲食業を続けていくのは大変です。勤めていた時のほうがずっと楽でした。でも、お金もないので、簡単にお店をやめることはできません。お客さんが入らなくなって、このまま続けていても赤字になるだけだ、ということになればお店をやめます。

私は、「外国人ウェイブ」とでもいうような感情の波を感じています。「この国にいて幸せだ

な」と感じる最高に幸せな瞬間と「すぐにでも自分の国に帰りたい」と感じる最悪な瞬間の間で、気持ちが揺れ動くのです。この波は、朝は最高だったけど夜は最悪になるなど一日の中で起こることもあれば、一週間の中で、あるいはもっと長期の期間で起こるものもあります。日本に来て最初の10年間は、みんなこの感情の波を感じ続けるのではないのでしょうか。

イギリスは物価も税金も高すぎることもあり、今は、イギリスに帰ることは考えていません。

【近所に住む日本人とのつき合い】

近所の人とは、あいさつをするくらいです。一日のほとんどの時間はこの店にいて、家には寝に帰るくらいであることもあり、友だちと言える人はいません。

【新宿区に望むこと】

新宿区が開催している日本語教室に申し込みましたが、すでに満員で入れませんでした。有料でしたが、とても安い教室でした。外国人がたくさんいるし、中にはお金がない人もいますので、もっと数を増やしたほうが良いと思います。また、私たちは税金を払っているのですから、選挙権があるべきだと思います。

No. 36

ミャンマー 女性 40歳代 飲食店経営

【来日時期と来日目的】

先に来日していた夫と一緒に住むために、1999年9月に日本に来ました。

【現在の商売】

ミャンマーでは高校の教師をしていました。日本語学校で1年間日本語を勉強し、卒業後にミャンマー料理のレストランを始めました。ミャンマー料理のレストランは日本にあまりなかったため、日本人に紹介したいと思ったからです。現在はオープンから13年以上たっています。

従業員はミャンマー人2人です。基本的に日本語を話せる人を雇っています。また、1週間に1回程度ですが、あまり日本語を話せないミャンマー人の奥さんたちをアルバイトで雇うことがあります。「いらっしゃいませ」「ありがとうございます」「お待たせしました」などの言葉を少しでも覚え、働いた経験があると、アルバイトを探すことができます。

オープン当初はミャンマーの人が多く日本人は少しでしたが、ここ5～6年は日本人が増えました。今では、ミャンマーのことを知りたいお客さんがこの店を探して来てくれます。ミャンマーに仕事や旅行で行く前に個人やグループで来たりするほか、帰国した後に食事をしながらミャンマーのことを語り合う場所にもなっています。

料理は基本的にミャンマーの味付けですが、塩と油を減らして、日本人の口に合うようにしています。

困るのは、年1回の確定申告の時です。日本の友だちにボランティアで助けてもらい、みんなで一緒に計算しています。商店街の集まりには入っていません。

【日本で生活するなかで感じること】

日本とミャンマーの文化は近く、困ったことはあまりありませんが、ミャンマーの人のほうが明るいと感じます。ミャンマーでは、2人で会ったらすぐ友人になりますが、日本人は1年以上たってもなかなか友だちにはならない。顔は知っているけれど、紹介する人がいなかったら友だちにはならないですね。

ミャンマーと文化が違うことで良かったと思うことはたくさんあります。真面目で自分の文化を守っていることはすばらしいことですし、そのことを知ることができて良かったと思っています。若い人が、初詣や花火見物、花見などの時に着物を着たりして、自分の国の着物を大事にして楽しんでいるのがとても良いと思います。

今、日本生まれのミャンマーの子どもたちにミャンマー語を教える教室を開いています。私

の生徒は30人ほどですが、その子どもたちは毎日日本の学校に通っています。町会というものがあることは知りませんでした。もし誘われたら入りたいと思います。

【新宿のまちの印象】

店の近くには外国人が多いです。今住んでいる場所は、中国人やインド人が多いです。それらの国の言葉で話しているのがよく聞こえます。

今まで、高田馬場の地域でミャンマーについてのイベントはありませんでしたので、自分たちミャンマーのバザーやお祭りなどのイベントをやりたいと思っています。

No. 37

日本（台湾出身） 男性 60歳代 飲食店経営

【来日時期と来日目的】

40年前（1975年）に、仕事のために台湾から来日しました。台湾では調理の見習いをやっていて、調理人として一人前になったタイミングで雇われて日本に来ました。現在は帰化して日本国籍です。

【現在の商売】

台湾料理店を経営し、従業員は11人います。内訳は家族4人、台湾人4人、日本人2人、中国人1人です。来日後、15年前に店を継いで独立しました。

もともと日本人向けの店でしたので、客層は日本人が80%、外国人が20%ぐらいです。外国人の内訳としては、台湾人が多いのですが最近多いのは中国人です。

【地域とのつながり】

商店会は、地元の商店街振興組合に入っています。

ここは、台湾料理店として長くやっていて有名なので、台湾の人が日本に来て、わからないことや何かあったとき、区役所で言葉やわからないことがあると、ほとんどの人がうちに来ます。

【日本で商売をするなかで感じること】

一番困ったのは言葉です。来日から3、4年経っても日本語を話すことについては大変苦労しました。働くために日本に来て、次の日からはもうこの店で働いていたので、日本語学校にも行っていません。日本語は店の日本人と話して覚えました。

また、私は職人なので、自分の作った料理が説明できなければいけません。当時はレシピ本なんてなかったので、同僚に自分の料理をうまく説明できなくて困りました。台湾の味付けと日本の味付けは違うため、日本人が好むアレンジをする必要もありますので。また、日本の習慣や日本人の考え方にも慣れないといけないと思い、一生懸命に勉強しました。

楽しかったこと、大変なこともありましたが、日本人の先輩はみんな優しく、いろいろ教えてもらいました。がまんして仕事を続けることで独立することもできました。今まで日本に長く住んで、良かったと思っています。つき合ってみると、日本人は台湾のことを好きだということがわかりました。

【将来の展望】

近隣にホテルができ、欧米系のお客さんも最近は来るので、外国語のメニューも必要だと思っていますが、メニューの説明を何の言語で、どのように記載すればいいのか困っています。また、この商売を今後もずっと続けていきたいのですが、後継ぎがいない状況です。できるだけ若い人を採用したいが、なかなか入ってこないのが、それが一番困っています。

【多文化共生のまちづくりについて】

日本人は他人、特に外国人に対して距離感を持ちすぎています。台湾の場合は、友だちではなくても、一度会った人なら平気で一緒に食事に行きますが、日本人はそうではありません。人口が少なくなり、外国人を受け入れないといけないですし、お互いに共存しないといけません。新宿にいる日本人と外国人が仲良く暮らすため、もう少し心を開き仲良くすることが一番大事です。

No. 38

韓国 男性 60歳代 貿易業

【来日時期と来日目的】

韓国の大学院生だった1985年に、研究資料収集のために初めて来日し、翌1986年から日本の省庁の外郭団体で客員研究員として勤務し、その後ずっと日本で生活しています。

【現在の商売】

スーパーマーケットと飲食店を中心とした会社を経営しています。社員180名のうち約8割は韓国人で、日本人も韓国人の配偶者や韓国文化が好きな人など、韓国に何らかの縁がある人です。

来日した1980年代は、為替レート安定化のためのプラザ合意やウルグアイラウンドの通商交渉があり、日本の貿易業界がわいている時代でした。日本経済は、アメリカを抜けば世界1位というほど勢いづいていましたが、私自身は、ヨーロッパがEUという地域連帯の構想を議論しているなか、歴史的な問題を抱えるアジアの連帯は希薄すぎるので、将来、アジアはアメリカやヨーロッパに物を供給する工場になってしまうのではないかと危機感を抱いていました。国同士が親しくつき合うにはどうすればいいかを考えるうちに、韓国人がおいしいと感じる食べ物を日本人にもおいしいと感じてもらう機会をつくって、相互理解のきっかけになりたいと思うようになり、食品を扱う会社を立ち上げました。その後、食品だけでなく生活文化全般に対象を広げ、現在は、書籍、化粧品、音楽CD、伝統工芸品、語学教室などさまざまな分野の商品やサービスを提供しています。

【日本で商売をするなかで感じること】

日本で商売をすることについて、困ったことはほとんどありません。商売を始める前に、日本で働いていたので、ある程度、日本社会に関する自分なりの受けとめ方や理解があったからかもしれません。初めて店を持った時、地元の商店会の会長の所に伺って商店会に入会しました。それ以外にも、町内会の活動、避難所運営管理協議会、小学校の評議員など地域の一員として自分にできることは何でも積極的に関わってきたことも良かったと思っています。

現在は売上高の5割、お客様の8割が日本人で、そのほかこの限界で営業する韓国、中国やインド系飲食店が業務用食材を購入していただきます。店舗の接客は日本語が基本ですが、中国語や韓国語を話せるスタッフを常駐させています。創業以来、日本と韓国が仲良くなれるよというテーマはずっと変わっていません。今、日本の生活文化を韓国に紹介するビジネスを企画中です。

【多文化共生のまちづくりについて】

多文化共生は言うなれば多様性に関する対応ですが、外国人の定住化がこれだけ進むなか、それに見合う施策がまだ整っていないように感じます。100以上の国から外国人が集まるこの新宿でも「日本人」と「外国人」つまり1対100と捉えがちですが、実際は「日本人」と「〇〇人」つまり1対1が100通り以上あり、「外国人」とひとくくりには語れません。

また、人と人のつながり方も変容してきて、顔を合わせて一緒に何かをしていた昔の形態とは異なり、スマートフォンなどを介して人がつながる現代は、コミュニティに入るのも出るの

も簡単で、実態がなく、そこには国境もありません。情報提供の手法についても、多言語でチラシを印刷すれば「やった感」がありますが、紙媒体を手にする外国人が何人いるでしょうか。

社会が変わっていく状況下では、外国人支援や外国人との協力関係の構築にも、新しい方法、新しいアプローチが求められると思います。

No. 39

ネパール 男性 30歳代 ネパール料理店経営

【来日時期と来日目的】

2008年に来日しました。ネパールでは、日本は平和で所得の高い国として有名で、日本に行くことは誇らしいこととされています。私も豊かな生活をしたいと思い、日本に来ました。最初からワーキングビザで滞在していて、更新して今に至っています。

【現在の商売】

ネパールでは、料理の仕事に従事していました。来日しても料理の仕事の続け、2014年に自分の店を出し、今は経営者をしています。勤務時間は1日約10時間で、現在3人のネパール人従業員がいます。日本人を雇わないのは、ネパール人の従業員は日本語が話せないし、お客さんはネパール人が多いので、言葉が通じないとわからなくなってしまいますからです。

ネパールの店はここ1年で急激に増え、今後もまだまだ増えると思っています。新宿区が創業に際して融資などを行っていることは知りませんでした。

【日本人とのつき合い】

お店には近所に住んでいる常連の日本人が来ます。そのお客さまとは、相談したり、遊びに行ったりもします。日本人は仲良くなると良い人だということがわかります。

商店会には現在入っていませんが、落ち着いたら入ろうと考えています。会費を払わなくてはいけないこともあります。そろそろ入りたいと思います。

交友関係としては、日本人にもネパール人にも親しい人がいます。隣のマンションの女性居住者が良い人で、いろいろなことを教えてくれ、やってはいけないことなども教えてくれます。他区にも住んだことがあります。隣近所との関係性はありませんでした。大久保は実家のよういろいろな人と会話ができるから良い所だと思っています。

【日本で生活するなかで感じること】

家を借りるときに外国人だと家を借りられない、子どもがいると借りられないなど苦労しました。今は、保育所のことで言葉がわからないため苦労しています。普通の会話はできますが、区役所で使われる言葉はわからないし、書類を持ってきてと言われてもわかりません。また、病院も通訳がないので苦労します。

日本は地震が起きる国ですが、地震があっても国が守ってくれるという信頼感があるので、地震などの災害への備えはしていません。

【将来の展望】

日本人のお客様はやさしいので、仕事しやすいです。将来も日本で商売を続けていきたいと思っています。お客様が良いということもありますが、それ以外にも、インドやネパールと同じ業態の人が近くに店を出したら、文句を言われケンカになるかもしれないからです。日本ではそのようなことはありません。

【多文化共生のまちづくりについて】

区からのお知らせのネパール語版を作ってほしいです。大事なお知らせと書いてあっても、何が大事なかわからないからです。日本人の友人にお願いしても迷惑になると思います。また、病院には通訳が欲しいです。

【来日時期と来日目的】

韓国の証券会社に勤めており、1996年に転勤で来日しました。その後、日本でホテル関係や貿易関係の会社に就職し、6年前に宅地建物取引士の資格を取って独立しました。現在は、不動産業やホテル業を営んでいます。

不動産業を始めたきっかけは、以前の会社で競売や不動産の売買を経験したからです。50歳代前に独立を考え、良い理解者との出会いもあり、自分で計画的に勉強して今に至っています。

【現在のお客様】

お客様にはいろいろな国の人が出て、韓国が約7割、中国が約2割、残りの約1割がベトナム、ネパール、ミャンマーの人です。事業を知ってもらうために、印刷物を作成して配布したり、この6年間の蓄積で、知り合いを紹介してもらったりしています。韓国語以外で言葉が全然通じないときもありますが、お客様が日本語のわかる人を連れてきたりすると、話は進みます。

不動産業で管理しているのは約60～70部屋です。居住者は、最近、韓国人が若干減ってきていて約5割、ベトナム人が増えて約3割です。その他、中国人、ネパール人がいます。年齢層は留学生が多く20歳代だと思います。留学生なので、居住年数は1年から2年がほとんどです。

【外国人の入居】

契約の段階で、オーナーが外国人を断わるケースがあります。大久保、新大久保、新宿、東新宿では約6割は認めてもらえますが、それ以外の地域では3割もいきません。

また、連帯保証人と保証会社への加入を求められることが多く、約7割は保証会社が必要とされますし、日本人の連帯保証人が求められます。韓国から判事や検事など社会的な地位が確立している人が来ても断られたケースがあり、強く交渉したこともありました。

このため来日した外国人は、外国人所有の建物や、外国人が運営する寄宿舎をインターネットで調べて入ったりもしています。

もし改善するならば、保証会社の審査が厳しすぎないようになると良いと思います。あまり厳しくすると、行くところがなくなり、それも社会問題になるのではと思います。

また、契約書は全部日本語で、契約書のタイトルもほとんど一緒です。基本的なところは多言語化が必要だと思います。

なお、何かトラブルがあったときの相談先に、司法書士や弁護士がいますが、思ったよりはトラブルは少なく、どちらかというと偏見や先入観の面が強いと思います。

【オーナーが住まいを貸出しやすくするために】

オーナーからみても保証制度が変われば良いと思います。例えば、日本語学校は、学生の母国の生活水準などを調査すると思いますので、日本語学校が連帯保証人となるシステムができると良いと思います。日本語学校が一番学生と接触しているので、母国と連絡をとることもでき、オーナーから見ても安心だという気がします。

【外国人入居者のトラブル】

私自身は日本語学校に、日本語を教えることも重要だけど、日本の文化も教えてほしいと伝えています。ごみを勝手に捨てるのはだめだとか、友だちを連れて遊ぶのは何時以降は控えるとか、そのような文化を教えなくてはいけないと思っており、日本語学校で、お互いに共生で

きるよう教育するのが効率的だと思います。入居後にごみの問題などでトラブルがでてきますが、2、3回教育をすれば改善されます。

オーナーからすると、家賃をきちんと払ってもらえるかという心配がありますが、心配するほど不払いの件数は多くありません。自分たちでアルバイトもしているので、滞納を理由に、契約した人を追い出したことは一度もありません。

【日本で仕事をするなかで感じたこと】

日本で仕事をしていて嫌だと感じることはありません。この地域で、私はいろんな組織の中に入って、私たちの主張だけでなく、共生、共栄のことをいつも話しています。

ただ、この地域の中では外国人を好きな人もいますが、偏見を持っている人もいて、いくら話しても通じない人がいます。それは若干寂しい感じがするし、困ったと思うことでもあります。

【地域とのつながり】

在日韓国人連合会と地元の商店会にも加盟しています。地元の商店会に加盟しているのは、地域で住みながら地域に何らかの形で貢献したいからです。

毎日朝6時に掃除をし、まちを一回りするのを楽しみます。それがきっかけでホテルを紹介してもらったり、飲食店のオーナーが建物を任せたいと言ってくれるなど、いい縁にも恵まれ、年配の人たちとあいさつをしながらいろいろな話も聞けます。

【将来の展望】

日本で骨を埋めるつもりでいます。二世帯、三世帯という形で事業を継ぐことを見越して、税務関係なども正確を期し、地域にも関心を持って消防訓練に参加したりしています。

また、将来的には、新宿で事業の基盤ができて落ち着いたら、都内へ少しずつ事業を広げていきたいという気持ちもあります。

【外国人住民や観光客が増えるなかで心配なこと】

オリンピック、パラリンピックを控え、観光客のほか、留学生も増えている状況ですが、歓楽街で遊ぶ人がだまされるケースがあり心配しています。

言葉の問題があると交番でも解決できません。お客様には、この地域は行かないで、あるいは気をつけてくださいと説明することがあります。新宿警察署も対策をとっていますが、パンフレットを増やしたり、ホテルに配ったりしたらいいと思います。

また、ある集まりで「東京防災」を確認したら、あまり読まれていませんでした。安全のために韓国語版をつくり、在日本韓国人連合会の中で、万が一の準備をしなければならないと説明し、緊急時の連絡体制を整えようと考えています。日本に住むほかの国の人でも、何らかの説明会や連絡体制の確立が必要だと思います。新宿区に住んでいる、多くの国籍の人たちの非常時連絡組織をつくるのが理想ではないかという気がします。

さらに、日本語学校の役割も重要で、区役所のいろいろなパンフレットを、日本語学校に配るのも良いと思います。

【多文化共生のまちづくりについて】

新宿区は多文化共生でいろいろな資料をつくり、外国人に配慮しているので、本当にありがたいと思っています。多文化共生がもう少し目立つ形になれば良いと思います。また、チラシなどは、日本語学校などの機関を活用すれば、すべての人ではないものの、見るのではないかと思います。見てもらえないと意味がないので、組織を活用すべきです。

第2章 日本人住民調査

第2章 日本人住民調査

I 要約（再掲）

1 暮らしの実感

- 地域に暮らす外国人が多いことが当たり前になってきたため、まち中やお店に外国人がいても驚かなくなったという意見が多くあげられた。
- 地域に暮らす外国人の国籍が、以前にも増して多様化していると感じるという意見があった。
- 外国人住民だけでなく、外国人観光客の姿が多く見られるようになり、案内板などの多言語対応の必要性を感じるという意見があった。

2 日常生活

- 外国人に日本の生活ルールをしっかりと理解してもらう必要性が多く指摘されたものの、区に住む外国人の流動性が高いため、周知徹底が困難な状況にあるとの意見が多くあげられた。
- お祭りや防災訓練など、地域の情報を的確に伝達するために、町会への参加を望む意見があった。
- 外国人が近くに暮らしていることを知りつつも、言葉を交わさない、あるいはあいさつ程度に終始し、近所つき合いには発展していないとの発言が多くあった。しかし、商店主同士や子育て中の親同士のような関係においては交流をもっているとの回答があった。
- 留学生の多くは、日本が好きで来日しているため、友好的な方が多いという意見があった。

3 偏見・差別

- 文化や習慣の違いからくる偏見や差別を解消するには、日本人と外国人がコミュニケーションをとり、交流を続ける必要があるとの意見があった。
- 故意ではなく、日本の生活ルールを知らなかったことによる外国人の行動が日本人を不快にさせ、「外国人は皆、生活ルールを守らない」という偏見につながるケースが多いと指摘された。
- 日本人は、国と国の関係性やメディアの情報にとらわれて偏見をもっているのではないかとの指摘があった。

4 災害に備えて

- 災害には日本人、外国人は関係がなく、すべての住民が備えなければならない共通テーマであるとの指摘があった。
- 地域の防災訓練への参加が、地域社会への関わりのきっかけになり得るとの意見が多くあげられた。

5 子育て・教育をする環境について

- さまざまな文化背景を持つ子どもと一緒に育児や教育を受ける環境において、子どもの国際感覚の醸成や、語学に興味を持つことを期待するという意見が多くあげられた。
- 外国人が多く暮らす地域であることを活かし、子どもが外国文化を体験できる場を設けてほしいとの要望があった。

6 多文化共生のまちづくり

- 区からの通知などは、日本語での生活に支障がない外国人にとってもなじみのない言葉が多く、読むのが難しいことが考えられるため、わかりやすい日本語への対応や、多言語対応が必要との意見があげられた。
- 外国人とのコミュニケーションを円滑にするために、日本人もいろいろな言語を学ぶ機会が欲しいとの要望があった。
- 子どもの言語習得や外国人保護者の子育てのためにも、就学前の子どもを対象とした支援が必要との意見があった。

Ⅱ 調査結果

日本人 町会役員

No. 1

男性 70歳代 四谷地域

【新宿のまちの印象】

変わりゆくまちという印象です。

外国人が多いというのは、歩道を歩いている時にいちばん感じます。あと、量販店や、商店街、小さな通りでもかなり多いと感じます。

【外国人とのつきあい】

この辺りはそもそも外国人があまり住んでいないので、つき合いは特にありません。ここは商業地だから、商売としてつき合うということはあるかもしれませんが、町会レベルでのつき合いはありません。

【地域の変化】

新宿三丁目界限は商業地であるので、外国人はあまり住んでいないし、居住地域としての変化はあまり感じていません。

【地域が抱える課題】

商業的にはいろいろあるかもしれませんが、住居がある地域ではないので、住んでいることでの日本人と外国人とのトラブル等はありません。

【町会への外国人の加入等】

外資系の会社にビルを貸した場合、オーナーが肩代わりする形で町会費を払い、借りた会社が商店会費を払うようないろいろな方法があります。外国には商店会費とか町会費というものがないので、まずは町会等を理解してもらわないといけません。

町会加入は任意なので、日本独自の町会システムを理解してもらわなければなりません。「郷に入れば郷に従え」ということわざもあります。宅建業界と区が一緒になって説明し、安全と安心のまちづくりを行っていくことが必要だと思います。

【多文化共生のまちづくりについて】

外国人が来てくださることは良いことです。外国人が入国してくる際、最初に、日本のシステムを理解してもらうことが必要です。

留学生等には、勉強や仕事よりも日本の文化や生活をまず理解してもらうことが先だと思います。

また、学校の運動会や地域のいろいろな催し物と一緒に参加し合えば、コミュニケーションを深めることができると思います。

【最後に】

外国とは生活様式が違うので、日本の国を理解してもらうのと、私たちも外国を理解すること、お互いに理解し合うことが一番大切です。いろいろな宗教等があるけれど、人間みんな同じなのだから、お互いにみんなが胸襟を開けば戦争は起きないと思います。

小さい頃から外国を敵視するような歴史教育をするのは良くないことです。「三つ子の魂百までも」ということわざもありますように、小さい頃から偏見をなくすような交流をしていくこ

とが大事だと思います。人間一人ひとりがみんな同じということの原点にしないと、平和は来ないと思っています。

No. 2

男性 70歳代 大久保地域

【新宿のまちの印象】

昔から外国人が多い所です。北新宿に国際学友会があることが、外国人が多くなった発端と思います。20年くらい前から店舗が多くなり、特に多いと感じたのはサッカーワールドカップ日韓大会の時です。

【外国人とのつき合い】

部屋を貸しているので、毎月家賃を持ってくる時に、愛想良くあいさつをされます。

盆踊りの時には外国人が店を出し、彼らも喜んで自分たちの店を宣伝しました。また以前、お祭りの寄付をお願いしたとき、普通なら数千円のところ、数万円を寄付してくれたこともありました。仲間に入りたいという気持ちがあったようです。

【地域の変化】

商店街では外国人の店が増えました。20年くらい前は、商店会に150人くらいの組合員がいましたが、今は80数名です。親の代からの店は10軒もないかもしれません。この大きな原因はビルを建てたことです。銀行借入れがあると、利益を上げるために人に貸すことになります。それで、景気の良い外国人が借りるようになったと思います。

【地域が抱える課題】

外国人は一生懸命働いていますが、生活に余裕がなく、ごみや防災などまちのルールに関心はないと思います。

東日本大震災の時、住人ならば日本人も外国人も関係なく一緒に復興作業をするのが普通だと思いますが、地域の外国人は本国に帰ってしまいました。愛着心がないのかなと思いました。防災には日本人も外国人も関係ないはずですが。

一番困っているのは学校だと思います。子どもたちは日本語もすぐに上達しますが、保護者はなかなか上達しません。観光客ならまだしも、その国で住民になるならば、それぞれの国も、ただ日本に送り出せばいいのではなく、それなりの責任を持ってほしいとも思います。

【町会への外国人の加入】

マンションに住んでいる外国人は、マンション棟ごと町会に入っています。しかし、火の用心や交通安全週間の当番には参加していませんので、直接的に町会で活動する外国人はいません。

一方で、町会側の受け入れ体制も必要です。例えば、外国人部のような体制をつくらなければいけないと思います。日本人の中に入り活動しろと言っても、相手も大変だと思います。また、外国人が参加できるように、外国料理の食べ比べなどのイベントがあっても良いと思います。

【多文化共生のまちづくりについて】

行政には、出張所に外国人相談室をつかって、通訳を置いてほしいです。しんじゅく多文化共生プラザの相談コーナーはありますが、近場にもあれば良いのではないのでしょうか。

一部に外国人を毛嫌いするきらいがありますが、外国人が全部いなくなったら、まちはどうなるか考えてほしいです。もっと外国人と仲良くしないといけないと思います。

まず、外国人と接する機会をつくる必要があります。防災訓練のように一緒にやれることがいいと思います。年1回でなくて、学期ごとに年3回もやれば、少しは顔なじみになると思います。

【新宿のまちの印象】

この地区は、昔から外国人住民は少なく、まちを歩いている人はほとんど他の地域から来た人です。静かで、隣近所の結びつきがしっかりしていて、住民同士の情報交換も密で、本当にいろいろな場面で町会・自治会に協力してくれます。

【外国人とつき合い】

近くのマンションに韓国人と欧米系の住民が住んでいて、お祭りには神輿を担いだり、子どもの福引きの手伝いや山車を引っ張ったりして参加してくれています。家のすぐ横の細い抜け道が生活道路になっていて、近辺の方はお互いにあいさつをして通るので、皆さん顔見知りになっています。12月に夜警を当番で始めますが、子どもの当番の日に、韓国人のお子さんに皆の前で自己紹介をしてもらいました。これがきっかけで顔見知りになり、あいさつもします。そのような機会を設けています。

外国人はマンション住まいで、ごみもマンションでまとめて出し、個々に出さないで、トラブルも少ないのです。トラブルとして多いのはごみ出しと夜中の騒音だと思いますが、ここではそのようなトラブルはありません。

【町会への外国人の加入】

同じ町内の住民として日頃から顔の見える関係をつくるために、積極的に声かけをしています。ごみの出し方が悪かったらごみの出し方の絵が書いてあるものを使って教え、こちらから声をかけ、あいさつをしたいです。同じ町会の住民という気持ちがお互いに持てるようになると良いと思います。町内に住んでいる人は外国人も日本人も、分け隔てなく同じ町会員だという気持ちでいます。同じ町会に住む者同士が、気持ちよく声をかけ、笑顔を交わしていれば、町会加入につながらなくても、何かのときにお互いに助け合うことができると思います。

日ごろのコミュニケーションのなかで、災害時にはここが避難所ですと知らせることは必要です。避難所の中で、外国人と日本人という区別はないので、町会ごとに部屋の中でつながることも重要と思います。困ったときはお互い様だから、そのような気持ちをみんなが持ってほしいです。

【多文化共生のまちづくりについて】

いろいろと情報を提供していただいていますますが、いかに相手が受け取ってくれるかもありますし、私たちも、自分に必要な情報しか受け入れない傾向もあるので、これという要望はありません。やはり、言語で不自由するのが一番困るので、そこはしっかりしてほしいです。

また、一般的に一番気をつけなければならないことは、ごみ出しだと思います。公共でほかの人に不快感を与えてしまうもの、影響するものについては、きちんとしていただくことが必要です。あとは、お互いが理解し合うことです。これからはもう国際社会ですから、お互いに理解し合って生活することが必要だと思います。国が違うということではなく、日本に住んでいるのなら、日本人と同じ、町会の人と同じ、隣人という気持ちでみんなが接してほしいと思います。

【新宿のまちの印象】

まちの様相としては、年々変わってきましたが、大きく変わったのは、昭和48年の第一次オイルショックの頃です。まず映画館がなくなり、キャバレーもだんだんなくなって、静かにな

りました。その後、第二次オイルショック、バブル崩壊、リーマンショック、東日本大震災が大きなところではあります。

外国人については、ここには日仏学院や、イギリスの教育機関の建物がある関係もあって、フランス人、イギリス人、それからイタリア人が年々多くなってきました。そのような国のレストランも増えてきました。特にこの10年、観光客が増えています。

【外国人とのつき合い】

日仏学院の職員の住まいを世話しています。かつては日仏学院の院長が保証人になったものや、フランス大使館職員の住まいの契約もしました。リセ・フランコ・ジャポネ・ド・東京（フランス人学校）に通う子どもの両親も多くこの辺りに住んでいました。

この商店街の商店会には全員が入っているわけではありませんが、外国人の店でも、契約の時に商店会と町会には加入して必ず会費を払うことにしています。そのため、お祭りのときにはワインなどいろいろな寄付をしてくれまますし、地域と仲良くしていこうという意思は十分強いのです。けれども、国民性の違いで、やはり日本の法律と合わないところも結構あります。しかし、外国人が増えてきたという状況の中で、悪いことはないです。

物件を世話した外国人が仕事を頼みに来たり、こちらも新しい店に顔を出したりして、こまめに声をかけています。

【地域の変化】

外国人や外国人の店が多いことで良い点は、新宿区の中でも特にこのエリアには、イギリス、イタリア、それ以外にもモナコなどのいろいろな国、特に欧米系の飲食店が、町の印象を良くしていると思います。今は観光客がととも増えてきました。それは、ここに来ると外国人、欧米人がいるというの、ひとつの要因になっていると思います。

困っていることはまったくありません。ケンカもあまり見たことがないです。

【町会への外国人の加入】

店がここにあっても、住んでいる所は少し離れている方が多いのですが、外国人も町会に入ってくれます。しかし、外国人はなかなか町会というものについて理解がありません。お祭りとか、防災訓練とか、いろいろと生活に関わることが多いし、その情報を的確に伝達するには、町会に入ってもらいたいと思っています。

なぜ入らなければいけないのかと言う人と、入れてくださいと言う人がいます。しかし、強制ではないけれど、地域自治のためにちゃんと自治会に入会するという事は、契約書にも書いていて、それはしっかり説明しています。

No. 5

男性 60歳代 落合第一地域

【新宿のまちの印象】

やはり中国人が多いです。特に目立って増えてきたのはこの6年くらいだと思います。近くに中国系の日本語学校もあって、道に中国の若い留学生たちが集まっていて、通行の邪魔になっていることがあります。

住んでいる人も中国人が一番多いと思いますが、ミャンマー人もかなり多く、中東の人もいます。あと、欧米人も少しいて、小学校に子どもたちが通っています。

【地域が抱える課題】

一番困っているのはごみで、これはどこも同じかなと思います。集積場に曜日に関係なくごみを置いていくので、清掃局と相談して、4か国語で書いた張り紙を貼っても指定日以外に置いていきます。集積所を撤去してもごみを置いていくので、花を植えたら置かなくなりました。ごみのルールを守らない人の中には日本人もいるので、外国人だけの問題ではないと思います。

2020年にはオリンピックが開催されるので、まち自体としても、ごみ問題だけでなく警備も考えなければいけないと思います。

【町会への外国人の加入】

町会で餅つきやコンサートなどのイベントを開催した時には、参加したり、見学に来たりしていますが、まちの人たちとつき合いをしているという話はあまり聞きません。

今は外国人の会員はいませんが、外国人でも町会活動をやりたいのであれば、町会としてはいくらでも受け入れます。ただ、2、3年で国に帰ってしまう人が多く、そのような日本の地域の枠組みに入って何かやるとかボランティア活動をやるという外国人は、まだいないと思います。

外国人が加入するためには、まず日本語ができる必要があります。こちらの意思が通じないし、向こうの意見が聞けない。言葉が通じないとお互いの意思疎通ができません。

個人情報の問題はあると思いますが、町会には、どこの国の人がどこに住んでいるという情報がありません。そのような情報があれば町会も気をつけていくし、町会の活動をやってもらえないかという声かけもできます。

【多文化共生のまちづくりについて】

町会には掲示板が40か所以上あって、いろいろなイベントの案内や、区からのお知らせなどを掲示していますが、日本人は読めても、やはり外国人は読めない人も多いです。そのようなところで、多言語での表示があるといいと思います。

家の近くの中華料理店は、店主がとても日本語に堪能なこともあって利用しているのですが、その店は町会の行事にもよく協力してくれます。そのようなコミュニケーションをとれるところもあります。それはお互い言葉が通じるからだと思います。

町会側から、町会への加入や町会活動への参加を依頼するためには、言葉が通じないとコミュニケーションをとること自体が難しいと思います。学校に子どもが通い、お祭りなどに参加し、次第に打ち解けていくまではいいのですが、町会をわかっていないから加入は難しいと思います。人間関係のあり方や文化の違いが大きいのではないのでしょうか。

No. 6

女性 60歳代 落合第二地域

【新宿のまちの印象】

平成元年から3年間ほどタイに住みましたが、それ以外は昭和50年からここに住んでいます。今住んでいる西落合は準工業地帯で、外国人を2人雇っている工場もあります。

この地域は、都営大江戸線の駅ができて交通の便が良くなったことに伴って日本人も外国人も増えてきて、外国人は3年くらい前から多くなってきたように感じます。年齢は、20歳代から中年くらいです。子どもは本当に少ないです。聞こえてくる言葉は、中国語や韓国語、タイ語などいろいろです。町内には、ネパールカレーの店ができました。

【町会への外国人の加入】

盆踊りなどの案内をすると、来てくださる方もいます。ご夫婦のどちらかが日本人という世帯だと、町会に入ってくれることが多く、町会の旅行などにもよく参加されています。ご夫婦のどちらかが日本人だと、日本語のまちの情報が入りやすいからだと思います。日本人と結婚している外国人以外は、今のところ町会には入っていません。外国人で文化があまりに違うと、町会として受け止めるのが大変なこともあります。

引っ越してきた戸建ての方や、家族で住んでいる方は町会に入ってくださいます。

【地域が抱える課題】

知り合いの若い女性が、外国人に毎日追いかけていたことがありました。たまたまその外国人の雇い主を知っていたので、注意してもらったことがあります。その外国人はただ友だちになりたいくて近づいてきたのか、そうでなかったのかは、その人と話をしなかったのかわかりません。このようなことは、コミュニケーションがとれないとわかりません。

また、ガードレールに掛け布団や敷き布団を干している外国人がいたことがあります。危ないと注意したら、「自分の家は日光が当たらず布団を干せない」と言って、布団にひもをかけるなどして、なかなかやめませんでした。日本のルールを理解し、守ってもらうことの大変さを感じます。

デパートの入口の階段に外国人が集団で座っていることがあります。今後外国人が増えてくると、このような日本のルールを守らない振る舞いが増えることが心配です。

【多文化共生のまちづくりについて】

トラブルをなくすためには、あいさつが大事だと思います。顔を合わせたときに、「おはよう」、「こんにちは」とあいさつをしていれば、自然に顔見知りになり、ごみ出しのルールなどわからないことも聞くことができます。

外国人が、多少なりとも謙虚な気持ちで地域に入り、日本の文化や習慣、マナーをわかって住んでくれたら、トラブルも減ると思います。外国人が住民登録したときに、新宿生活スタートブックを渡しているということですが、ごみ出しなど生活するうえでの最低限のルールを、もっと外国人に教えてほしいと思います。

No. 7

男性 70歳代 戸塚地域

【新宿のまちの印象】

この町会のあたり、早稲田通りには、外国人が経営している店が多いです。また、この辺りには日本語学校があるからか、10年くらい前から特に外国人が多くなりました。

【外国人とのつき合い】

近所に住む外国人とのつき合いはありません。ひっそりと暮らしているのではと思います。しかし、せっかくのご縁だし、一緒に汗を流してこのまちをもっと良いまちにしていきたいと思っています。そのような話ができる場や機会は、見つけようと思って見つけないといけないと思います。

防災面では、これからは、外国人はお客さんではなくて地域の方だ、と考えないとうまくいきません。一緒に助け合う関係だ、と考えるべきであると思います。最近外国人が、お祭りや盆踊りにたくさん来ているので、そのような機会を利用し、その次の段階に向けて、いろいろ知恵を働かせていかなければいけないと思っています。地域の行事に外国人がたくさん参加することに、特別な違和感はなくなってきました。その意味で、外国人を自然と受け入れてきているのかなと思います。

【地域が抱える課題】

外国人との間でのトラブルはそれほどないと思います。対等につき合うことができるようになってきたのではないのでしょうか。

あとは、最初に行政が日本の国のことや暮らしのことを知らせ、次にごみ出しなどの生活ルールを浸透させていくべきでしょう。ごみ出しがうまくいっていないのは周知不足です。粘り強く周知していくことが大事だと思います。ルールを知らないからそうなるのであっても、われわれももう一言話すことはやっていない。その点はやっていかななくてはいけないと思います。

同じ住民として協力し合うまちをめざすなら、行政が言うのではなく、そこに住んでいる人が気づかないと、なかなか進まないと思います。

【町会への外国人の加入】

外国人を、町会や地域にうまく引き入れるための工夫はなかなかないので、これからみんなと相談してやっていかないとはいけません。垣根を低くして、お互いに出たり入ったりすることになれば、例えば町内の旅行に参加する人がかなり出てくるはずです。そうなれば町会に加入してもらえる可能性が高くなると思います。

【多文化共生のまちづくりについて】

外国人が地域で暮らし始めるとき、最初に行政から「日常生活で何か困ったことがあったら、町会や自治会に相談しなさい。何か良いアイデアがあるはずですよ」と言っただけであれば良いと思っています。地域とのつながりの架け橋をつくるのが行政の役割でしょう。

外国人に「あなたたちはお客さんではないのですよ、一緒に汗を流しましょう」という気持ちを持つこと、それが共生だと思います。

No. 8

男性 70歳代 若松地域

【外国人とのつき合い】

外国人が増えたという感じではなく、もともと、ある程度の外国人がいたので増減はあまりないように思います。地域には韓国学校があって、韓国人が多いです。

地域センターでは新年などに、区立小学校と韓国学校の子どもたちが、年に2回ぐらい、歌ったり踊ったりする国際コンサートという交流があります。子ども同士の交流ですが、一緒に保護者が来るので、それなりの交流の成果があると思っています。

町内のコミュニティの集いを開催した際には、新聞販売店で働いている中国・韓国・アフリカ系の若者がテントの設営や撤収をやってくれ、餅つきなども楽しんでくれました。その新聞販売店は町会に入っていて、やはり地域に貢献しないといけないということで協力してくれましたが、それで私たちとのつながりができて大いに助かっています。

【地域が抱える課題】

困っているのは、一般的にはごみの問題です。このことはどの地区の町会でも出ています。最近になってから起こっているのではなく、定住していないため、入れ替わりが多いために発生している問題だと思います。いくら今住んでいる方に言っても、入れ替わったらまたゼロになってしまいます。

新聞販売店の寮のように外国人が集団で住んでいる場合は、地域の行事に出てくれたりして良い面が見えてきますが、ひとりで住んでいる場合は、やはり言葉が通じないということが壁になっているのか、表に出てくるのが少なく、コミュニケーションがとれていない感じがします。

大声で騒ぐなど、何か問題を起こせば別ですが、普通の生活をしていれば特に問題はありません。ごみ出しの問題だけです。

【外国人の町会への加入】

地域は戸建てが多く、戸建てに外国人が入ってくることはほとんどないため、町会員に外国人はいません。アパートの住民は個々では入ってこないため、原則として大家さんに一括して入ってもらう形をとっています。そのため、大家さんとは接点があっても、個々の世帯とは接点がありません。

大家さんが常にアパートにいて、そこの住人と接触できていれば良いのですが、大体は管理者に任せきりになっています。大家さんが、うまくそこのところをまとめてくださると、何か接点ができるのですが、なかなか難しいです。

【多文化共生のまちづくりについて】

大々的にではなく、4、5人くらい集めて、地域センターなどで、日本語教室をやって、そのお返しに英語を教えてもらうということを民間のボランティアでやれば、お互いに知り合うこともできて良いのではないのでしょうか。

今後、外国人が増えることは間違いないので、それに対する考え方や方針をしっかりと立てて、外国から来た方たちにすべきことをしっかりと準備することが必要だと思います。

No. 9

男性 60歳代 柏木地域

【新宿のまちの印象】

まちを歩いていると中国人と韓国人が目立ち、十数年前に比べ、はるかに多くなった印象があります。

役員をやっている小学校や自分も通っていた保育園の式典に出ると、半数以上、カタカナの名で呼ばれるので特に実感します。あれ、という感じで増えていると実感します。

【外国人とのつき合い】

町会で、盆踊りや餅つき大会をやった時に、外国人の子どもたちが餅をもらいに来ていますが、具体的なつき合いというレベルではありません。防災訓練にも、町内で60人から70人くらいの方が参加しますが、外国人参加者はほとんどゼロか、または、いるかないかというところですが、ただ、韓国人が1人だけ町会に入っており、もう3年目になります。盆踊りを見に来て、町会に入れるかと問い合わせが来たのです。そこで町会に入会の案内をしている冊子を渡し、回覧も回ってきますと説明しました。

お祭りや盆踊り、餅つき大会とか防災訓練などの行事のお知らせは、町会の回覧板だけでなく、20か所ぐらいの掲示板にも出していますが、関係があると思わないのか、外国人は来ません。特に防災訓練などは、日本人の友だちができて、誘われれば来られると思いますが、誰も知らないなかで出ていくのは難しいと思います。そのためまだまだこれからだと思います。

われわれ町会の役員のところには、外国人が住んでいてこういうことに困っているとか、対処してくれという報告や相談は、今のところ特にありません。

【町会への外国人の加入】

町会としては、外国人も参加して協力したいのであれば、町会に入会してもらいたいと思っています。日本語が不得手で回覧が読めない人のために、いろいろな外国語のお知らせなども準備はしていますが、それをさらに広める、PRする努力をしないとイケません。ただ待っているだけでは難しく、やはり行政も含めて、こちら側から言っていないとイケないと思っています。外国人が区民の10%を超えている時代だから、みんなで何らかの知恵を出していかねばイケませんが、今はまだそのような方向が打ち出されていません。

学校で、各町会が集まる防災訓練をやっていますので、子どもたちを通じて保護者が出てきてくれれば良いと思っています。

【多文化共生のまちづくりについて】

ボランティアが小学校に入って、日本語ができない子どもたちに、日本語指導をやっているのは良いことだと思います。

町内のいろいろな行事に参加して、なじんでいくという方法もあると思います。そうすることで日本の文化がわかってきます。全部はわからなくても一部はわかるだろうし、そのようなことを通じて、外国人同士のつながりも深まるだろうし、日本人グループに入ってきてくれたら良いと思います。

【新宿のまちの印象】

街並みの変化としては、浄水場、4号地グラウンド、ガスタンクがなくなり、その跡に高層ビルが一本ずつ建っていき、西新宿辺りが一番変わってきました。

外国人については、歌舞伎町で韓国語、中国語といろいろな言葉が飛び交っていて、多くなったと感じます。また、小学校の入学式や幼稚園の入園式に出席すると、国際的だと感じます。

【外国人との付き合い】

住宅の管理などをしているので、中国人がテナントとして借りるときの賃貸契約など、最初の時の接点はあるけれども、日常的な付き合いというのはなかなかありません。以前働いていた中国人が結婚し、すでに帰化した例があります。その人は町会行事に参加しているので付き合いがあります。

【地域が抱える課題】

7階か8階の高い階に住んでいる人が、ごみをそのままポンと外に投げてしまうことがありました。袋の中から日本語ではないものが出てきて、捨てた人がわかったので注意しました。最初の頃にそのようなことがあっても、ルールなどをしっかり伝えれば、理解してくれて、その後は改善されていくことがよくあります。

大家さんの中には、外国人はお断りだと、厳しくしている人もいますが、家賃の滞納などのトラブルも意外と少ないものです。

【町会への外国人の加入】

ご夫婦どちらも外国人で町会に入っているケースはまれです。防災訓練は、声をかければ参加するかもしれません。今後、防災についてはもっと意識を高めなければいけないと思います。

町会に入りたいという人は増えていますが、外国人に対して、町会への加入で特別なことは、今は考えていません。入会を拒否するつもりはまったくなく、ごく自然にということです。

日本は少子化でどんどん人も少なくなっていて、雇用できる生産年齢の人も少ないので、それをカバーする意味でも、外国人が来て当然だと思うし、今後も増えてくると思います。そのときに最初はギャップがあるでしょうが、お互いに話し合っていけば、修正できると思います。それは自然の成り行きだと思います。だから、積極的に入りませんかという活動は、日本人に対しても特別していないし、拒否するつもりもまったくありません。

毎朝、公園でジョギングをしている外国の方がいて、目が合ったら「グッド・モーニング」と言うと、向こうも「おはようございます」と返してくれる。それが一種のコミュニケーションだと思っています。

町会にすでに加入されている方々の反応は自然な感じで、受け入れ態勢は良いと思います。拒否的な反応はまったくありません。

【多文化共生のまちづくりについて】

道路案内には、英語、韓国語、中国語があるし、ホテルなどにも外国語の案内があります。サービスはそのような感じで当然だと思います。今後は外国人観光客が間違いなく増えると思うので、ガイドや注意事項の多言語化は、行政としてもしていくと良いと思っています。

【新宿のまちの印象】

最初は、新宿区と聞いた時は歌舞伎町などの怖いイメージがありました。しかし今は、大学の近くは下町っぽさがあり、自分の地元に近い印象があります。

特に外国人は多いとは感じていません。大学では中国や韓国の人が多いので、見た目ではあまりわかりません。所属している委員会のすぐ隣に留学生交流会の部室があり、そこからいろいろな言語が聞こえてきたり、学内を移動する際に違う言語の話が聞こえてきたりして、そのようなときに外国人が多いと感じる程度です。まちの中よりも学校生活で感じる人が多いです。

【外国人とのつき合い】

実家の近くの幼なじみに、ニュージーランドと日本のハーフの人がいます。昔はよく遊んでいましたし、今も交流はありますが、お互い忙しいので遊ぶことは少なくなりました。近所でつき合いがあるのは、その友人だけです。

学内での外国人とのつき合いはほとんどありません。自分の所属しているサークルに外国人はいませんし、外国人がどういうサークルに入っているのか、あるいは、サークル自体に入っているのかもわかりません。

私が高校生の頃からアルバイトとして勤めている地元のスーパーでは、最初の1、2か月だけですが2人の中国人と一緒に働いたことがあります。その2人とは交流はありませんでしたが、日本語も英語も上手だった印象があります。

【将来の展望】

地方公務員を志望しています。また、ロシア語を勉強してみようと思い、大学の授業にはなかったので独学で勉強を始めました。始めた当初は、語学力を仕事に生かせたらと思っていましたが、今は公務員試験の勉強もあるためなかなか進められずにいます。

【多文化共生のまちづくりについて】

多文化共生という言葉はあまり聞いたことがありませんでした。多文化共生という言葉自体をもっと広めたほうが良いと思います。外国人への支援は多いように感じますが、日本人にも情報を発信し、取組みを知ってもらったほうが良いと思います。日本人の理解もなければ共生はできないと思います。

また、互いの文化を知る機会があったほうが良いです。外国人が先生となって、料理などの自分の国の文化を紹介したり、外国のお祭りを日本で開いてもらったり、逆に「染の小道」に外国人を呼んだりするなど、いろいろな交流が必要だと思います。お互いを知らないとならば多文化共生は進みませんし、「聞く」よりは「見る」ほうが早いでしょう。

授業で習ったことですが、日本は経済大国にはなっていますが外国人の割合は先進国の中では低いとのこと。もっと外国人が日本に来やすいように、日本の文化を外国人に知ってもらうだけでなく、日本人も、外国人のことや文化などを、少しだけでもいいので知ろうとするべきだと思います。

【新宿のまちの印象】

大学入学後2年間は、区内に住んでいました。それまで、新宿区は歌舞伎町などの盛り場のイメージしかなかったのですが、住んでみると、静かな住宅地がある住みやすい素敵な場所だと思うようになりました。地域コミュニティの活動にも参加しているのですが、そのような活動でふれ合う人や住んでいる人たちも優しいので、家賃の折り合いがつけばまた住みたいです。

外国人の数は、新大久保駅や大久保駅では電車から降りる人たちを見て外国人が多いと感じますが、そのほかの地域ではそれほど多いとは感じません。

【外国人とのつき合い】

大学2年の時、友人と一緒に、留学生との交流を目的としたサークルを立ち上げました。サークル活動をするなかで一番に印象に残ったのは、外国人は、意見があるときははっきり言う、話しかけるときは自分からどんどん話しかけるといった積極性を持っていたことです。このことはとても勉強になりました。自分が自信を持って言わなければ、相手には伝わらないということを知り、自分も変わったと思います。

また、時間を守らない留学生もいて、背景に文化の違いがあるように感じました。ただ、日本は時間に縛られすぎる発想のせいで、逆に仕事などに支障が出ることもあるのではないかと感じ、それほど厳しく時間を守らないというあり方にも良い面があるのではないかと感じます。

住まいの近くでの外国人とのつき合いはありませんが、いろいろな人と関わりあって自分自身を高めていきたいと思っています。区などでよくイベントをしているので、飛び込んでいけたらいいですね。

【将来の展望】

将来は、国際的な業務に就いていろいろな国の人と仕事をしたいです。外国人と仕事することで、自分が知らない何かを見つけたり、逆に相手も私から何かを見つけて刺激を受けたりするということがあると思います。当たり前だと思っていたことが、ほかの人と話してみたら実は当たり前ではなかったとわかる時、固定概念が変わるときが楽しいです。いずれは海外での仕事も経験してみたいです。

【多文化共生のまちづくりについて】

日本語学校で日本語教師をしている姉から、日本語を教える人数が足りない聞いたことがあるので、日本語教師を増やしていくことが重要だと思います。

また、実際に地域での交流の場を増やすことが大切だと思います。その際は、外国人に参加のメリットを伝えたり、交流の場を外国人と一緒につくったりすると良いと思います。また、外国人と企業がふれ合う機会はなかなかないと思うので、外国人と企業が交流する場をつくることも良いと思います。これにより、企業は外国人を雇う際の課題などがわかるし、外国人は日本の企業で働くことについて学ぶことができます。

多文化共生に大切なことは、自分の固定概念で相手を見ないこと、外国人を〇〇国の人といったグループで見ないでひとりの人として接することだと思います。外国人も日本人と同じく、十人十色、いろいろな人がいます。個人を見て、その人は何をどうしたいのか、何が好きなのかなど、一人ひとりとコミュニケーションをとることが一番大切だと思います。

女性 20歳代 大学生

【新宿のまちの印象】

新宿というと、新宿駅周辺の高層ビルや商業施設が立ち並ぶ、きらびやかなまちというイメージが強いです。一方で、同じ区内でも私が通う大学のある中井、落合地域になると、そこで生活する地域の住民の方と関わるが多く、優しい方が多く住んでいる地域という印象があります。

【外国人とのつき合い】

大学では、同じゼミに韓国人の友人が1人います。生まれたのは韓国ですが、日本で育ったので、日本人の友人と同じように日本語で話しています。韓国語も日常会話程度であれば問題なく話せるようです。

アルバイト先はカフェで、従業員に外国人はいませんが、お客様のなかにはもちろん日本語が通じない外国の方もいます。英語圏内のお客様であれば多少の英単語を組み合わせてコミュニケーションをとりますが、それ以外の場合は、メニューを指さしたり指の本数で個数を確認したりと、コミュニケーションをとるための工夫をしています。

【染の小道の活動を通じて】

大学では、大学の近くで染物を伝承していこうということで、「染の小道サークル」というサークル活動をしています。しんじゅく多文化共生プラザでも外国人向けに紹介していますが、個人的には、外国人に紹介するのも良いのですが、まだまだ日本人の間でも認知度が低いので、地域以外の人にも積極的に伝えていきたいと思っています。

【将来の展望】

今のところ、金融系の仕事に就きたいと思っています。英語などの外国語が苦手なので、国際的な業務や、海外での仕事は今のところ考えていません。

【多文化共生のまちづくりについて】

一番大事だと思うのは、思いやりの気持ちだと思います。見知らぬ土地に来て、何もわからない状況だと不安になるのは当然です。その中で周りの人が、少し気づかって声をかけてあげることが大事だと思います。

また、日本人と外国人の間に差別があるということは、お互いの理解が足りないのだと思います。例えば、最近ではニュースで中国や韓国との政治的な摩擦が報道されています。しかし、中国や韓国からの留学生は、日本のことをよく知ったうえで、日本を好きになってくれて日本にきています。このような留学生を理解しようとせず、メディアからの情報のみに捉われて偏見を持ってしまうようなことがあるのではないのでしょうか。私自身も、外国人のことをあまり理解していない、知る機会がないということもあるので、交流して互いを理解するような場があれば良いと思います。

多文化共生という言葉は聞いたことがなかったのですが、その考え方には賛成します。外国人も日本人も一緒になって住み良い形になるのが最も良いと思います。個人レベルだけでなく、企業や社会全体もグローバルになっていくからです。

男性 20歳代 大学生

【外国で育った子ども時代】

両親とも日本人で、私は台湾で生まれました。生まれてすぐに日本に帰ってきましたが、2歳からはずっと中国で暮らし、大学入学時に日本に戻ってきました。

中国で暮らしていた頃は、家で日本語を使って、学校はインターナショナルスクールだったため英語で授業を受けていました。そのほか、学校の友人は韓国人が多かったため、毎日一緒に過ごしながらか国語を少しずつ覚え、大学の授業で改めて勉強しました。

今、話せる言語は、日本語、英語、中国語、そして韓国語です。言語的に恵まれた環境で育ててもらい、親に感謝しています。

【日本で生活するなかで感じること】

自分の中でのアイデンティティは日本です。両親が日本人というのもあり、16年間外国に住んでいたからといってもやはり日本人という自覚がありました。大学、サークルやアルバイトなどの日本人学生の暮らし、そういった日本の学生生活というものを経験してみたいと思い、2011年8月に大学進学のため日本に戻りました。

日本語は家庭内で使っており、入学した学部の講義は基本的に英語で進められるので、来日後に言葉で困ることはありませんでした。

日本は、何もかもがきちんとしているので、暮らしの面では中国よりも暮らしやすいのですが、逆にあまりにもきちんとしていて、学生としては、自由さというか刺激がないと感じています。

【交友関係】

入学後、まず学生寮に入りました。そこには、外国人も日本人もいるのですが、やはり寮に入りたての頃は、日本人とは遊びの感覚というか、楽しみ方があまり合わず、一緒にいて楽しかったのは外国人学生でした。その後、サークルやアルバイトを経験し、少しずつ感じ方が変わってきました。

今つき合っている仲の良い友人は、同じ学部の仲間です。一番多いのは韓国人と日本人で、中国人の友だちはあまりいません。学内にはインド人など今まで知り合ったことがない国籍の人がいると思うので、そのような人たちとつき合ってみたいと思っています。

【将来の展望】

将来は日本で働きたいというより、日本企業に入って外国で働きたいと思っています。日本のさまざまな技術を発展途上国に紹介し、その国のまちづくりの一翼を担いたいです。

最初の勤務地はおそらく東京になると思うので、しばらくは日本にいるつもりです。とても便利なので新宿から移るつもりはありません。

【多文化共生のまちづくりについて】

最近ニュースで、外国人がすごく強引な客引きをしているという報道を見かけます。そのような面を考えると、危険とまでは言いませんが、まちのあり方としてどうかなと思います。外国人が増えるのは良いことだと思いますが、文化や考え方が違うので、まちの安全のために考慮したほうが良いと思います。

No. 15

男性 50歳代 大学院生/会社役員

【新宿のまちの印象】

区内在住歴は11年間ですが、学部の時も現在の大学に通学していましたので、通算すると20年以上新宿のまちを見てきました。やはり大久保地域には昔から外国人が多かったと思います。最近では、住んでいるマンションも含めていろいろな地域にも外国人が増えたと感じています。

【外国人とのつき合い】

マンションの住民の1～2割は外国人です。引っ越して来た際に、あいさつに来てくれた方とは、すれ違えば言葉を交わしたり、簡単な話をする程度のつき合いをしていました。一方で

あいさつに来なかった方は、同じマンションの住民とはつき合うつもりはないというある意味での意思表示と思い、こちらからもつき合いは遠慮していました。また、マンションに住む日本人は高齢の方が多く、外国人の方に対して少し距離を置く傾向があったように思います。

【現在の仕事】

職場の社長がオーストラリア人であることや、スペインの会社と合弁会社をつくっている関係から、スペイン人の社員がいます。社員数は少ないのですが、3分の1くらいは外国人という環境です。社内では日本語と英語を織り交ぜてコミュニケーションをとっています。会社は専門商社で、メイン事業のひとつがコーヒーの輸入事業です。今は南米のコーヒーを輸入していますが、ゆくゆくはアジアのコーヒーを輸入しようかという話もあります。今後の事業展開を考えると、さまざまな国籍の人が同じ職場で働いているという今の環境は強みになりますね。

【学生に求められる英語能力】

私は現在大学院の博士課程に在学しています。専攻は政策科学、研究室は都市政策、具体的に研究しているのは多文化共生や移民政策です。私が通う大学は留学生の数が多く、私がいる研究室でも約3分の1は外国人です。学生同士の会話は日本語がベースですが、授業の多くは英語でも行われるため、学生は英語にふれる機会が非常に多い状況です。

【多文化共生のまちづくりについて】

新宿区の多文化共生施策はとても先進的です。研究するなかでほかの自治体の施策をいろいろと見てきましたが、関東では川崎、大泉などと並んでトップを走っている状況ではないでしょうか。

特に「新宿区多文化共生まちづくり会議」という外国人が直接区政に参画する仕組みをつくったことは、非常に興味深く感じています。このような会議体はほかの自治体でも設置しているのですが、日本人と外国人がともにメンバーに入り、公の場で協議をしたうえで現実的な提言や要望を出している点で素晴らしいと思っています。首長や職員が替わっても変わらずに取り組んでほしいと思います。

【最後に】

現在、日本にはたくさんの隣国の方がいます。語弊があるかもしれませんが、国の位置は変えられず、嫌でもずっと隣人としてつき合っていかなければならないわけですから、なるべく仲良くやっていきたいですね。そのために、やはり顔を合わせる機会をなるべく多くつくることが必要だと思います。互いの違いを認識し、認め合い、そして少しずつ尊重していけば、より良い関係が築けるのではないのでしょうか。

No. 16

男性 30歳代 大学院生／会社役員

【新宿のまちの印象】

新宿は日本の縮図のようなところですよ。西新宿のような経済の中心もあれば、歌舞伎町のような歓楽街もあり、落合のような住宅街もあり、狭い地域に多様な顔を持つまちだと思います。

外国人が多く、駅や道では中国語や韓国語が聞こえてきます。高田馬場には、ミャンマー人が集中していて、そのほかの言語も聞く機会があります。

【外国で生活するなかで感じたこと】

イギリスに留学していた時は、孤独を感じる時もありましたが、すごくささいな言葉でも、店員や近所の人にひと言かけてもらったりすると、ものすごく安心感を得られて、そういうときはとてもうれしかったです。外国人として扱うのではなく、やはり一人の人間として声をかけてくれるときはさらにうれしく感じました。

イギリスへ留学した後、フランスに寄って、半年ほどフランス語の語学学校に通いました。そこで感じたのは、イギリス人の外国人に対する態度は英国紳士的な態度、保護してあげるといふ感じの優しい接し方なのですが、フランス人は、例え相手が外国人であっても平等に接してくるので、すごく冷たく感じるときもありました。ただ、ほかの国に比べてフランスは、東アジア系、中国人やベトナム人や日本人に対しての差別が非常に少ないと思います。

【日本で生活するなかで感じること】

まだ日本人は外国人に対して慣れていないと思います。それと、良い意味でも悪い意味でも無関心なところがあります。私の妻はフランス人ですが、日本に来て一番嫌なのは、見られることだと言っています。すれ違いざまにずっと見られたり、振り返って見られたりして、それがストレスになるようです。私たちの子どももよく見られます。

外国人から日本人に対する差別については、案外少ないような気がします。日本に来てみて、母国で教えられたことと実際の違いに気づく人も多いと聞きます。ただ、なかには日本のことを野蛮視する人もいます。人権問題への取組みが遅れているとか、鯨を食べるとか、裏表があるなど言っているようです。

【多文化共生のまちづくりについて】

完全な共生というのは非常に難しく、外国人の文化や外国人コミュニティもなくなるものではないので、日本人と同化する状態にはならないと思います。

ごみ出しのルールを外国人が守らないという問題がありますが、それぞれの国はそれぞれの国でいろいろと合理的な理由があつてそうしている場合があります。そのような情報を、まずは日本人に知ってもらって、外国人に対しても、日本ではこのような理由でこうしているということを知ってもらう。外国人からすると、なぜ日本人はあんなに生真面目に無駄なことをやるのだろうかと感じているかもしれません。お互いの文化について知り合う必要があります。

留学して初めて自分がマイノリティの立場になり、日本に来てからは妻が外国人でマイノリティであるため、人権に興味を持つようになり、活動に参加しています。新宿には、LGBTのようなマイノリティの人が多く暮らしています。これは、外国人と表裏一体の問題だと思うので、こういう問題をぜひ区でとりあげてほしいと思います。

No. 17

男性 20歳代 大学院生

【新宿のまちの印象】

以前に住んでいた国分寺市と比べると、やはり雑踏というか、人が多いという印象を持ちました。治安も特別悪くなく、家の近くに戸山公園があつてみどりが多いことから、住環境は良いと感じています

あとは、やはり外国の方が多いという印象です。店に入ると外国の方が働いていたり、明治通り沿いでスーツケースを引いている外国人観光客をよく見かけたりします。

【外国人とのつき合い】

アルバイトは、塾講師とレコード店の店員のふたつを掛け持ちしています。塾では、帰国子女が来るが多かったのですが、外国籍を持っていたり、身体的な特徴で外国人とわかる生徒と接する機会はありませんでした。一方、レコード店のアルバイトでは、外国の方と接する機会が多いです。日本は中古レコードの市場が世界一なので、外国から日本に洋盤のレコードを買いに来る方が多く、アルバイトを始めた時真っ先に「君、英語はしゃべれる？」と確認されました。

学校にも多くの留学生がいます。授業を一緒に受けている留学生だけで30人ぐらいでしょうか。ただし、その中で日常的にコミュニケーションをとるのは7、8名ぐらいですね。欧米出身の留学生はほとんどおらず、アジアやアフリカ出身がほとんどです。

【相手を理解しようとするコミュニケーション】

日本人と外国人の間に偏見や差別意識は存在すると思います。それは、日本人と外国人の間には少なからず差異があるからです。それを解消するためには絶えずコミュニケーションをとる必要があると思います。

コミュニケーション論の中で、自分と相手が互いのことを100%理解した状態でつながることがコミュニケーションであるという考え方と、互いのことを100%理解することは不可能だが、理解しようと思ってつながることがコミュニケーションであるというふたつの考え方があります。私は後者の方が良い考え方だと思っています、絶えず相手のことを知ろうという姿勢をとらなければ、相手のことは理解できません。日本人と外国人の間の差異を知り、それを認めようとするコミュニケーションを続けていかなければ、いつまでたっても偏見差別の解消にはつながらないでしょう。

【多文化共生のまちづくりについて】

多文化共生という言葉自体は聞いたことがあります。ひとつの国や、ひとつの地域にいろいろな人がいる中で、その間で生じるあつれきをなくしていこうという考え方だとイメージしています。「共生」という言葉は、ぱっと見ると「みんなで仲良く暮らしましょう」というイメージがすごく強いのですが、「さまざまな文化の違いを乗り越えてどのように人々を結びつけるか」という課題提起の意味も内包されているのだらうと感じました。

私は、それぞれの異なる文化を尊重しつつ、生活するうえでの障壁をなくすことが制度上実現可能なのかという疑問を持っています。まずは、地域で生活する一人ひとりが互いの文化の差異を認めることから始める必要があると思います。

日本人 子育て中の方

No. 18

女性 40歳代 子ども(17歳・14歳)

【新宿のまちの印象】

日本人、外国人に関わらず、いろいろな地域から人が集まっているまちだと思います。新宿区は場所がとても良い所だと思いますし、特に西落合あたりは公園などもあって子どもを育てやすい環境です。

外国人は多いと思います。子どものクラスにも、両親のうちどちらかが外国の方の子どもがいますし、夜中にコンビニエンスストアに行った帰り道、仕事の帰りが遅くなったときに、すれ違いざまに日本語ではない言葉を聞くことが多くあります。

【外国人とのつき合い】

私は現在地域センターで英語を習っています。英語を勉強するようになったのは、子どもを連れて行った病院でたまたま隣にいた外国の方と話をしたところ、その方が英語教室をやろうとしていることを聞いて、私も参加してみようと思ったのがきっかけです。その方とは、今はお友だちとしてもおつき合いしています。

また、上の子が近所で仲良くしていた子で、父親が日本人、母親が韓国人という家庭がありました。私自身もその母親とは仲良くしていて、今は遠くに引っ越してしまったため電話で話す程度ですが、連絡はとり合っています。彼女は、年数を重ねていくなかで日本語がみるみる上達していきましたが、以前はやはり言葉で困っていました。言葉がちゃんとわからないうちは、どうしてもニュアンスの違いがうまく伝えられずに苦労したことがあったのではないかと、と思います。

【さまざまな言語・文化的背景を持つ子どもと一緒に育児・教育を受ける環境について】

私が子どもの頃は、まだ外国人がそれほど多くない時期だったので、クラスメイトに外国人はいませんでした。今は、これだけ外国人が増えるなかで、身近なクラスメイトとしてそのような友だちができるのは良いことだと思います。将来的には、せめて英語はある程度話せるようになり、いろいろな国の人とコミュニケーションをとってあげれば良いと思います。あとは、とにかく差別なく、いろいろな人と握手ができる子どもになってほしいです。

【子育てしやすい環境づくり】

外国の方が区の子育てサービスを受けようとした場合、障害になるのはやはり言葉だと思います。役所などの公的機関の書類は、日本人でも日頃使わない言葉が多く難解です。日本語を勉強している外国の方がそれを見てもわからないため、そのようなものは、可能な限りわかりやすい言葉を使ってあげてほしいと思います。

また、手紙やチラシではなく、訪問や電話で自分の国の言葉でサービスの案内が聞ければ、安心してそれらのサービスを受けようと思うのではないのでしょうか。

あとは、子どもの具合が悪くなったときなどに、自分の国の言葉で症状を相談できるような窓口があればいいと思います。

【多文化共生のまちづくりについて】

地域でお互い安定した生活を送るためには、お互いに理解し合って、仲良く暮らしていきましようという考え方が続くことが大事ですね。そのためには、やはり話し合い、対話で一つひとつ解決していくしかないと思います。

No. 19

女性 30歳代 子ども(7歳・5歳)

【新宿のまちの印象】

大学進学をきっかけに上京し、新宿に住んで15年になります。留学生がたくさんいる大学に通っていたので、彼らから大いに刺激を受けました。外国人が多いことはもちろん、その国籍が多様であることが、新宿の特徴であると感じています。

【外国人とのつき合い】

子どもを持つ外国人のお母さんたちとは、国や言語が違っても、お互いに子育て中ということで通じるものがあり、情報交換したり、悩みを相談し合ったりしています。特に、子どもの習い事をきっかけに知り合ったロシアの方とは、お互いの家を行き来して親しくしています。子どもたち同士は、言葉は不要なようで、体でコミュニケーションをとりながら、仲良く遊んでいます。もう帰国されましたが、以前は子どもを持つ韓国の方ともつき合いがありました。

【さまざまな言語・文化的背景を持つ子どもと一緒に育児・教育を受ける環境について】

英語についてはどの保護者も教育熱心ですが、自分の子どもと外国人の子どもが学校で一緒になることを心配する人がいると聞きます。しかし、この先もっとグローバル化していけば、将来、自分の子どもが留学したり、海外で子育てをしたりすることになるかもしれません。いろいろな国籍の人と共に生きることは、他人事ではなく自分や身内にも起こりうることと捉えてみんなで考えることができたらと思います。

自宅に留学生が遊びに来ることがあり、子どもたちは、留学生たちに何か教えてほしい、わからないことを聞いてみたいという気持ちがあるようです。国旗にも興味を示しています。これだけ地域にたくさんの外国人がいて、いろいろな文化を知ることができる環境であるにもかかわらず、子どもが身をもって体験する場が少ないのが残念です。小さい子どもも参加できるような、日本も含めお互いの国の文化を紹介し合うワークショップやイベントなどがあれば、子どもをぜひ連れて行きたいです。

【子どもの言語習得】

夫も私も言語教育に携わっているため、子どもの言語習得についてよく話をします。言語を使って考えることが大切で、外国語も英語だけに固執することはないというのが共通認識です。

外国人の子育てに関して考えると、やはり一番の悩みは子どもの言語習得ではないでしょうか。両親ともに外国人で、学校のみで日本語を使う子ども、片方の親が外国人で家庭内では外国語、学校では日本語と使い分ける子ども、片方の親が外国人だけれど家庭内も学校も日本語を使う子どもと家庭によってさまざまです。どちらの言語も中途半端になってしまい、おしゃべりはできるけれど、抽象概念がわからない子どももいます。せめてどちらかの言語だけでも、ものを考える、発言することが十分にできるよう、支援する体制が必要であると思います。

【子育て情報の伝え方】

妊娠、出産、初めての子育てを新宿区で経験した私にとって、母子手帳と一緒にいただいた区の「はっぴー子育てガイド」は、ありがたいものでした。子育ては仕事とはまったく違う世界なので、自分から情報を探さないといけません。子育てに関する情報が網羅されている冊子なので、掲載されている情報を頼りに、子どもを連れてよく出かけました。出かけた先で同じように子育て中の友人ができて、不安だった気持ちがずいぶん楽になったことを覚えています。ぜひたくさんの人に知ってもらいたいです。保健センターは、赤ちゃんがいる親が必ず行く所なので、そういった施設を中心に周知をすることが有効でしょう。

No. 20

女性 30歳代 子ども(2歳)

【新宿のまちの印象】

結婚を機に引っ越してくるまでは、都心ですし住みにくいまちだと想像していたのですが、今住んでいる落合地域は、ごく普通の生活感があるまちで、意外に庶民的だなと感じています。

【同じ子育て中の親として】

夫が外国にルーツを持つ子どもの学習支援や親子日本語教室のボランティアをしていたことから、多文化共生について考えるようになりました。妊娠・出産を通して知り合い、親しくなった友人の中には、外国人もたくさんいますが、みんなとてもバイタリティがあり、学ぶところが多いです。もちろん、ただでさえ大変な子育てを異文化環境でするので、こちらが簡単には理解できないような葛藤を抱えているのだろうと感じることも多々あります。

例えば、日本語ができないために、保健師に子育ての相談をしたくてもできなかったり、連絡帳が書けず保育園・幼稚園の先生と深いコミュニケーションがとれなくて歯がゆい思いをしている人がたくさんいます。また、外国にルーツを持つ子どもの支援に関わる方たちによると、学習支援等を通じて子どもとのつながりは持てても、仕事などで多忙な母親とはつながりがなかなか持てないということでした。そこで、まずは親同士が子育てを通じて友だちになれる場づくりができないだろうかと考え、NPO活動を始めました。「この地域で子育てをしている保護者は、日本語ができる人や日本文化の中で育ってきた人だけではない。いろいろな言語を話す人、いろいろな文化の人がいて当然なのだ」という意識が少しずつでも広がっていくと良いなと思っています。

【多様性を受け入れること】

乳幼児サークルで知り合った友人と親しくつき合っていますが、初めて声をかけた時、彼女から、外国人と友だちになりたいなんて珍しいと言われました。社交的で、日本語もできて、日本生活も長い彼女ですらそう感じる何かが日本社会にはあるのだと感じました。

言語や文化の差異にこだわらず、相手を一人の人間として尊重する積極的な寛容の心を、どのように地域社会に広げていくか。それこそが多文化共生施策を考えるうえで、もっとも力を

入れなければならないことだと思っています。自分の子どもには、国籍や文化にかかわらず、人間対人間として、世界中の人たちとつき合ってほしいので、家庭教育の中でも多様性の価値を伝えていきたいと思っています。

【多文化共生のまちづくりについて】

区の支援体制は、全国的に見て水準が高いと思いますが、小学生以上を対象としたものが多く、就学前の親子の支援は十分とは言えません。言語習得の面からすると、「ことば」の発達は就学前が最重要期と言われていいますから、就学前の親子を支えることは、外国ルーツの子どもたちの進学・就職のサポートにもつながります。現状では、外国人支援に携わっている人たちと子育てで支援に携わっている人たちの接点がほとんどないので、NPOの活動としては、両者が連携・協働するきっかけを生み出せるようなコーディネートに力を入れているところです。

No. 21

女性 40歳代 子ども(12歳)

【新宿のまちの印象】

出身は新宿区です。結婚を機に一時離れましたが、子どもが幼稚園に入る時に戻ってきました。新宿の印象は、治安が心配なものの、私が小さな頃のほうが怖かったという感じがあるので、昔に比べて治安は良くなったと思います。

外国人は多いと思います。子どもの頃は、韓国人、中国人はいましたが、帰化していたり、明らかに来日したばかりの人がそれほどいる印象はありませんでした。20年ぐらい前から環境が変わってきたなと思います。

【外国人とのつき合い】

子育てをしている外国人の保護者とのつき合いは、PTAを通してはありますが、個人としてはありません。また、PTAの役員に外国籍の方はいません。受付などの簡単な手伝いはお願いするとやってもらえますが、言葉はわかってもらっても中心的に動いてもらうのは難しいです。

PTAとはどのようなものを理解してもらうことが難しいし、学校は子どもを預けっぱなしにすると考えている人も多く、PTAに協力してもらうのは大変なのです。

【さまざまな言語・文化的背景を持つ子どもと一緒に育児・教育を受ける環境について】

小学生でも6年生になると日本文化にだいたいなじみ、差別的なことはありません。ネパールやインド系の子が少しからかわれたと聞いたことはありますが、子どもが通っている小学校には、そのようなことでいじめたりする子はいません。両親のどちらかが外国にルーツを持つ子どもも多いようです。子どもも1年生の頃は、名前の違いに驚いていましたが現在は慣れていきます。

子どもを今の小学校に通わせるのに際して、外国人が多くてもいじめがないと聞いていたし、いろいろな国の人がいることは子どもにとってメリットだと思いました。絶対に将来はアジア圏の人と一緒に仕事をするだろうから、子どもの経験になると思います。子どもには、いろいろな国の人を差別せず、理解し合いながら暮らしていけるようになってほしいですね。

【子育てしやすい環境づくり】

区の子育て施策については、同じ国の人同士、あるいは通訳が入り、国別で対応しないと難しいのかなと思います。子どもは日本語を理解していますが、外国人保護者は十分には理解できず、学校からのプリントにはフリガナが全部ふってありますが、なかなか理解しきれないようです。

一方で、外国人の方もその国に合わせる必要があります。例えば、プリントや書類をわかりやすく説明すると、やってもらえるものだと思われています。その国に来ている以上は自分でも努力してほしいと思います。

【多文化共生のまちづくりについて】

先日、マンション経営をしている方と話をしたら、ワンフロアに大人数が住んでいて、香辛料のおいぎきつかったと聞きました。部屋を貸す側にとっては、トラブルが起きないか心配だと思います。お金もうけのために何でもする人たちの中にはいるので、ある程度の規制がないと怖いです。同じ地域のアパートの近くでも、ごみの出し方や屋外でのキムチづくりが問題になっています。

子どもたちは、学校でも共生してやっているので、将来的な心配はなくなっていくと思います。しかし、大久保地域は新宿区の中でも特に注意して見てもらいたいエリアです。

大久保通りに日本の店が減ってきているので、日本の店も戻って来て、バランスのとれたまちになればいいと思っています。

No. 22

女性 40歳代 子ども(8歳)

【新宿のまちの印象】

国籍や言語などさまざまな文化的背景を持つ人が一緒に暮らすまちで活気があります。大学や日本語学校が多い地域なので、まちを歩いても外国語が飛び交っていて、スーパーやコンビニに入ると外国人店員をよく見かけます。2、3年前までは、まちなかで韓国語がよく聞こえていましたが、最近は中国語が多いと感じます。

【さまざまな言語・文化的背景を持つ子どもと一緒に育児・教育を受ける環境について】

子どもが通う学校には、日本語がまったく話せない外国人の子どもが転入学してくることがあります。先生方は一生懸命にそのような子どもの面倒をみていて、子どもたちも身振り手振りでコミュニケーションをとっているようです。同じクラスの外国人の子どもと公園で一緒になれば、仲良く遊んでいます。大人は外国人に対して、どうつき合えば失礼ないだろうかという身構えてしまいますが、子どもが何の違和感もなく「○○ちゃんがね」と家で話す様子を見ると、文化の違いを自然に超える力に感心します。

世界にはいろいろな国と言葉があって、いろいろな文化を持つ人々がいることを、理屈ではなく肌で感じられる環境は、子どもにとって良い経験になっていると思います。

【子育て情報の伝え方】

自分が外国で子育てすることを想像すると、やはり言葉の壁が大きいので、つい同国人に頼ってしまうでしょう。夫の赴任に同行し、南米で子育てをした経験のある友人によると、赴任直後は現地の事情がまったくわからないので、日本人コミュニティをベースに動くしかなかったと聞きました。また、万が一子どもの具合が悪くなったらと医療事情が一番気がかりで、真っ先に日本人医師を探したそうです。

子育てに関する施設やイベントのチラシがあったとして、それが多言語で書いてあったとしても、いざそこに出かけるかというときまだハードルが高い感じがします。日本人であっても、そこへ行ったことがある日本人の友人に誘われて、というパターンが多いのではないのでしょうか。子育て中の親は子どもを守ろうという気持ちがあって慎重なので、信頼できる情報であり、十分な安全が確保されていなければ、行動に移さないうちだと思います。

そのような親へは、直接説明することが有効ではないのでしょうか。区の職員が、保育園や幼稚園の保護者会に出向いて行って、その場でチラシを配って説明してくれたら、安心できるし、日本語に堪能な外国人保護者からそれぞれの国のコミュニティに口コミで伝わる可能性もあります。

【多文化共生のまちづくりについて】

外国人の子どもと同じ学校に通って、同じ給食を食べて過ごすなかで、子どもは、なぜ外国語を勉強しなければならないか、親が説明しなくてもわかってきています。外国語は習得が目的なのではなく、コミュニケーションの手段であることを日々の生活から感じているからでしょう。このまま、外国人に対する心の壁をつくらずに育ってくれたらと願っています。

また、他者理解だけでなく、自己理解という視点でいうと、子どもに日本文化をもっと経験させたいと考えています。外国人が日本の魅力を感じてくれているお茶や生け花や和食などを学ぶことで、日本の良さに改めて気付くことができると思います。

No. 23

女性 40歳代 子ども(7歳・5歳)

【新宿のまちの印象】

結婚を機に新宿区に引っ越してきました。新宿に暮らして8年になります。住むまでは「新宿」といえばビル街のイメージでしたが、今住んでいる所は学生街ということもあって、とても住みやすい所です。

外国人も多く、日常生活の中でも外国語がよく聞こえてきます。子どもの通う学校にも数名の外国人児童がいます。

【外国人とのつき合い】

住んでいるマンションでは外国人を見かけることはありません。子どもを水泳教室に連れていくと、外国人の保護者がいるので、たまに話をします。

子どものクラスメイトに外国人の児童が2名います。子ども同士は、日本語で会話し、外国人だからということもなく、日本人の友だちと接するのと同じように仲良くしています。その外国人児童の保護者は日本語に堪能なので、支障なくほかの保護者と交流しています。

家では、ニュースで出てきた話題を中心に、外国の話をしています。夫が英語を勉強していて、以前は、子どもたちの耳を鍛えようと英会話教室に通わせていました。子どもたちはまだ英語を話しません、英語が好きようです。現在は、上の子は学習教室で、下の子は幼稚園で英語を勉強しています。

【子育てしやすい環境づくり】

慣れない外国生活の中で子育てをすることを想像すると、言葉や文化の違いなどから大変な苦勞をするだろうと思います。

両親学級で一緒になった外国人夫婦は、御主人が外国人で奥様が日本人という国際結婚だったので、特に問題はなさそうでしたが、両親ともに外国人で日本語がわからない場合もあります。日常生活に支障がないレベルの日本語を話すことができる外国人にとっても、子育ての場面では難しい言葉がたくさん出てくるので、両親学級などに通訳がいると安心して参加できると思います。

また、行政機関が発行する子育てに関する情報紙などは、わざわざ足を運ばなければならない施設に置いてあるだけでは、目にとまらない可能性が高いので、健診のために行く病院など、保護者が必ず行く場所で提供することが必要だと思います。健診のときなどは待ち時間が長いので、その場で読む時間がとれます。

【多文化共生のまちづくりについて】

日本人と外国人の常識の違いや、日本で生活するにあたってのルールやマナーを知らない外国人が多く見受けられます。そもそも、そういったことを教えてもらえる場所がないので、最初に入国した段階で、日本のルールやマナーを知ることができる冊子があれば良いと思います。

日本人は、声に出してはっきり伝えるのが苦手なので、ルールやマナー違反を相手に注意しないまま、外国人はマナーが悪いという評価が決まってしまうことが多くあります。それでは

交流することもできません。

日本人は外国人を思いやること、外国人は日本のルールやマナーを守ろうと努めること、この両方の姿勢をつくっていかれたらと思います。

No. 24

女性 30歳代 子ども(7歳・0歳)

【新宿のまちの印象】

住みやすいまちだと思います。私が住んでいる高田馬場周辺の地域は、少し歩けばスーパーやドラッグストアなど必要なお店は全部そろっていますし、電車などの路線も多いのでとても便利です。周りの雰囲気も良く、近所にも良い人が多いです。住みやすいのでなかなか引っ越せません。特に子どもが生まれてからそう思うことが多くなりました。

外国人は多いと感じます。同じマンション内にも結構住んでいますし、学校にもたくさんいます。小学校は1クラス23人くらいですが、4、5人くらいはいると思います。外国人というよりハーフの子が多いですね。

【外国人とのつき合い】

息子が仲良くしているハーフの子は、学校の行き帰りにたまにうちに遊びに来ますが、家族ぐるみの密なつき合いはありません。もっとつき合いがあれば、楽しいですいろいろなことが学べると思います。母国に帰った息子の友だちに、息子は手紙を書いて交流しています。また、母国に親戚がいて、母国に里帰りしていた友だちからその国の話を聞くこともあり、息子はそのような話に興味を持っています。地球儀を一生懸命見ながら国の場所を調べていることもあります。

息子のクラスメイトのお母さんとは、連絡事項を伝えるくらいのつき合いで、遊んだりすることはありません。今は下の子がまだ小さいため外出することもそれほどありませんが、もし生まれていなかったら交流があったかもしれません。

【子育てしやすい環境づくり】

外国人の保護者と電話で話すときに言葉の問題を感じます。会って話すときは顔が見えるため、意思疎通ができますが、電話では難しいです。そのため、学校のPTAなどの係をするのも難しいかもしれません。区で発行している冊子などはいろいろな言語で書かれているので、すごく良いと思います。そのほかに、学校や地域で行われている読み聞かせや料理教室、交流会などの行事にもっと外国人が参加できるようになればいいと思います。息子の学校でも、外国人のお母さんが英語で読み聞かせをしてくれることがあり、子どもにとって楽しいですし勉強にもなると思います。また私も、韓国人のお母さんに料理教室を開いてもらいたいです。

【さまざまな言語・文化的背景を持つ子どもと一緒に育児・教育を受ける環境について】

同じ日本人の中でもいろいろな文化があればいろいろな考え方もあるので、そのような環境で育っていくことはとても良いことだと思います。

子どもには、将来は海外で活躍するグローバルな人材になってもらいたいので、良い環境にいると思います。

【多文化共生のまちづくりについて】

差別とまではいきませんが、外国人がルールを守らないことがあると、日本人が「外国人だからルールを守れない」という考えに至ってしまうことは多少あるように感じます。日本人と外国人が地域の中でうまくつき合っていくためには、ルールを守れたらいいと思います。外国人は、ごみの出し方が違ったり、子どもをより遠くまで遊びに行かせたりするので、その問題をうまく解決できればいいのですが、なかなか難しいです。

No. 25

女性 60歳代 障害者支援

【新宿のまちの印象】

外国人は20年くらい前から、目に見えて増えてきています。昔は、ホテル街に立つ風俗関係と思われる外国人女性を見かけましたが、10年前から韓国料理の飲食店ができ始めて、そこで働く韓国人や買い物に来る観光客が急増しました。まちのあまりの変わりようにとても驚きました。今はさらに、飲食店も小売店も多国籍化が進んでいる印象です。

【ボランティア活動と支援のなかで感じること】

夫が障害を負ったことをきっかけに、同じ境遇の方たちのお手伝いをしようとボランティアを始めました。活動の内容は、障害の方の介助と、障害者向けの文化講座の手伝いです。無理に手伝いを申し出たり、勝手にやったりせず、障害者ご本人がやる気になったときに、ご本人が希望する範囲を手伝うよう心がけています。障害のため、言葉がはっきり発せない方もいます。時間はいくらかかっても構わないので、隣に寄り添って待ち、何を望んでいるのか根気よく聞くことが大切です。皆さんがニコニコと通所してくださるのが、やりがいになっています。ボランティアをしている障害者支援施設には今のところ外国人がいません。

外国人との関わりでいえば、以前、区立小学校で約10年間アルバイトをしていた頃、外国にルーツを持つ子どもたちが多く、対応に苦労した経験があります。

日本語が話せないために自分の気持ちを表現できず不安定になって暴れてしまう子どもや、ご両親が仕送りのために働きづめで、一日三食食べさせてもらえず、給食だけが一日の食事という子どもがいました。そのような子どもたちは、4月に一斉に入学してくるのではなく、学期の途中に一人、また一人と入ってくるので、担任の先生は大変です。日本語を教えながら、学校をあげて支援するのですが、この子はいつまで日本にいられるのだろう、日本の生活に慣れて、日本語がわかるようになって、親の都合で母国なり外国に移ることになったらまた不安定になってしまうのではないかと、心配だったことを覚えています。

【地域の抱える課題】

私の住む集合住宅には、中国人や韓国人、ミャンマー人住民がいます。当番制で自治会員を務める決まりになっていて、自治会員は共用部分の掃除など、集合住宅全体として必要な仕事を担います。外国人住民にも、ごみの分別や、共用部分の掃除など、最初は完璧でなくてもいいし、見よう見まねで構わないからやってほしいと呼びかけています。協力してくれる外国人住民もいますが、なかには日本語がわからないことを理由に、協力してくれない人もいます。せめて、家庭のなかに一人でも日本語がわかる人がいてくれたらいいのですが、多言語で貼り紙をする工夫をしたものの、効果はありませんでした。辛抱強い呼びかけが必要だと感じています。

No. 26

女性 70歳代 障害者支援

【ボランティア活動】

週1回、障害者の方たちに染物を教えるボランティアをしています。染物を趣味としてやっていたところ、社会福祉協議会にボランティアとして教えてみないかと声をかけてもらいました。小さい頃から夢見た職業に就いて、定年まで勤めさせてもらい、これからは世の中に恩返ししたいと考えていたところだったので、ぜひお手伝いしたいと思って始めました。

絞り染めは、完成するまで出来栄がわからないので、毎回驚きがあり、それがおもしろいところです。障害者の方たちに好評をいただいているので、私も支援施設に通うのを楽しみにしています。染めた作品は、地域のバザーなどに出品しています。

支援施設では、視察や実習を受け入れていて、この前は中国人が来ました。

【外国人とのつき合い】

地域のお祭りに、外国人が参加しています。神輿を担ぐのを楽しみにしてくれているようです。お祭りの最後に、子どもたちにお菓子を配りますが、人手が足りないときは、参加している外国人に手伝いを頼むことがあり、ふたつ返事で快く引き受けてくれます。お祭りのたびに、もっと話をしてみたいと思いますが、町会の役員として関わっているため忙しく、声をかけられずにいます。

【地域の抱える課題】

今住んでいるマンションには外国人がいますが、ごみの出し方をなかなか守ってもらえません。区が発行している外国語のごみの分け方・出し方のチラシを貼り出しています。その他、大きな家具を置きっぱなしにして引っ越していく、禁止されているペットを飼う、夜にベランダで騒ぐなど、ルールが守られないことが多々あります。マンションのルールは、入居時に不動産屋からしっかり説明すべきではないでしょうか。不動産屋は賃料を払ってくれたらあとは現場任せという印象です。管理人や実際に一緒に暮らす住民は、対応に苦慮しています。

もしマンション中の壁が注意文だらけになってしまったら、気分の良いものではありません。日本人外国人ともに気持ち良く暮らせるよう、最初のルール説明はしっかりする必要があると思います。

No. 27

女性 50歳代 地域活動・子育て支援

【新宿のまちの印象】

出身の府中市には外国人がほとんどいません。歌舞伎町などにいる観光客のほか、四谷地域は、国立競技場の関係でスポーツ選手の宿泊が多いですが、大久保地域に比べれば少ないです。

【ボランティア活動と支援のなかで感じること】

子どもが生まれ、幼稚園長と話して、地域に乳幼児サークルをつくったことが最初のボランティア活動です。その後、町会と関わるようにもなりました。

小学校の統廃合の話が持ち上がった時、小学校が閉校になっても避難所機能は残したいということから、地域のことは地域でやらなくてはいけないのだと感じました。その後、校庭での芝生づくりなどを経て、町会長さんたちと四谷ひろばのオープンにつなげていきました。

現在は、四谷ひろばの事務局長のほか、乳幼児の支援、中高大学生支援、青少年育成委員会やお祭りなどの地域行事を通して多方面で活動しています。

ボランティア活動には責任が必要だと思っています。ボランティアの中には、良いことをしているから手伝ってくれて当たり前だろうとか、助成金をもらって当たり前だろうとか思っている人もいます。しかし、周りの人に賛同してもらえなければ広がることもできないし、理解してもらうこともできません。自己満足にならないことを肝に銘じています。

四谷ひろばには、たくさんのボランティアがいますが、調整する役というか隙間を埋める役が必要になってきます。関わる人たちがチラシを配る、問合せを受ける、掃除をしなければいけないなど、いろいろな役割を担う必要があり、そのようなことの調整役を心掛けています。

ボランティア活動で育った子どもたちが今、四谷ひろばのスタッフになっています。好循環だと思います。日頃の活動を通して、支援された人が次は支援できる人たちになっていってほしいですね。

【外国人とのつき合い】

地域行事に参加するフランス人がいて、四谷大好き祭りの中でフランス語講座を開いてくれます。四谷ひろば内にある東京おもちゃ美術館、C C Aアートプラザでは作品交流もしています。

四谷ひろばは貸し室業もしていて、トルコ語やチェコ語などの教室を行う団体が借りています。

【多文化共生のまちづくりについて】

おもちゃ美術館に外国人が多く来館しますが、外国人向けの掲示が少なく、休館日に迷子になっていたりします。避難経路についての外国語版は作らなければならないと思っています。

外国人向けの掲示の話は、四谷青少年育成委員会でも出ているし、四谷大好き祭りでも外国人向けの企画を考えています。また、四谷ひろばの部屋を活用して地域の商店街の方々と英語の勉強会をしたり、日本語教室の生徒と交流できたりすればいいなという話もあり、オリンピックもあるので、まち全体で盛り上げていこうと思っています。

P T Aなどにも外国人が増えたので、どうしたらいいかという話が青少年育成委員会でも出ました。四谷地域の保護者は、大使館に勤めている人や積極的に関わろうとする人の割合が高いので、特段問題はないだろうと受け止められていましたが、P T Aの手紙など、ひな型があるらしいという話もあったので、活用するのは良いことだと思います。

No. 28

女性 60歳代 地域活動・子育て支援

【ボランティア活動】

ボランティア活動は、自分が区外出身であったことから、地域を知りたい、交流したいという気持ちで始めました。子どもと本が好きなので、児童館や図書館で本の読み聞かせ、東京おもちゃ美術館での来館者対応をしています。

ボランティアの活動は自主性に委ねられるものが多く、ボランティア同士は会社のような組織と違って上下関係にありません。また、お互い十分にコミュニケーションがとれる時間が持てない場合もあるので、情報共有が難しいときもあります。そのため、伝わっているか、認識にずれがないかよく確認することを心がけ、伝え方も工夫しています。

ボランティアの中には外国人の方もいます。明るく、私たち日本人に積極的に関わろうとする方なので、一緒に仲良く活動しています。

【文化や習慣の違い】

ボランティアをするおもちゃ美術館にも児童館にも、数年前から外国人来館者が増えました。たぶんお母さん方の口コミによるものが大きいと思います。おもちゃ美術館に来たことで児童館を知ったり、知り合いができたり、施設を媒介にして広がりがあります。

外国人親子の来館者とも自然に言葉を交わしています。子どもたちは日本語を話しますし、親御さんも日本語を少しお話できるので、どのような本を読んでいるか、どのようなおもちゃを選んだら良いかなどお話します。

ただ、靴を脱ぐスペースで脱がずに上がってしまうなど、習慣の違いからくるトラブルもあります。外国人の方にとってはルールを破って困らせてやろうと思っているわけではなく、知らないだけなのですが、日本人来館者からするとそうは見えない場合もあります。誤解から雰囲気が悪くならないよう、トラブルを未然に防ぐため、そのようなことが予測される場合には、事前に説明し、気をつけています。日本語で、丁寧に説明しよう、相手を傷つけないようにと思うとどうしても回りくどい表現になりがちですが、それでは外国人相手には伝わりません。相手の文化に敬意を払いつつも、しっかり伝える、このバランスが難しいところです。

【多文化共生のまちづくりについて】

住み始めた頃から、いろいろなものが混在し、活気がある印象があります。ここ数年特に、コンビニやスーパーでも外国人店員を見かけることが珍しくなくなりました。外国人を見かけること、外国語が聞こえてくることは、まちの風景の一部というか、それが普通になっています。

新宿区は、外国人が多く住むまちとして何十年もの歳月を経てきました。今後は、単に言葉が通じればいいということではなく、日本人と外国人がお互いの文化や習慣を知り、その差も認識できるような突っ込んだ交流を考えていかないといけない時期に来ているのではないかと思います。隣近所で住んでいるとおのずと接点が多くなり、お互いに知り合う機会はありますが、トラブルをきっかけに話すのではなく、お祭りや料理教室、スポーツ等、言語のいらない、「楽しい！」という気持ちを共有して、親しくなれるのが理想です。行政や地域がそのような場を設定しても、外国人の方がその情報にいきつくのが難しいため、情報は目のつくありとあらゆるところに出しておく必要があります。どこで何ができるのかフローチャートのように示すのも有効です。多文化共生に賛同し、支援に関わるサポーター制度を作って、そのような方たちの手を借りて、情報提供をするのはいかがでしょうか。

No. 29

女性 60歳代 日本語学習支援

【新宿のまちの印象】

にぎやかで、良い意味でごちゃごちゃしていて、いろいろなものが群衆の中に混じって活気がある所です。最近では、外国人観光客が店にも道にもあふれていて、その光景が違和感ないほどになりました。

【ボランティア活動と支援のなかで感じること】

乳幼児がいる外国人のための託児付き日本語教室で、ボランティアとして活動しています。約10年前、区役所の外国人相談窓口へ、ベビーカーに子どもを乗せた若い外国人女性たちから、日本語を勉強したいという相談がありました。その女性たちのほとんどに、日本人の夫がいたので、ほかの外国人より日本語の必要性を強く感じていたのでしょう。当時、区には大人向けの日本語教室がいくつかあったものの、子どもを連れて行ける教室がありませんでした。学びたい気持ちがあるにもかかわらず、学ぶ場がないのはもったいないと思い、周りの人に声をかけ、教室を立ち上げました。立ち上げたものの、日本語を教えた経験はみんななかったため、近隣で開かれた日本語に関するありとあらゆる講座に出て勉強しました。

現在は、小学校を会場にして週1回日本語教室を開催しており、保育士が隣の部屋で子どもを預かっています。学校からのお便りを読む、病院で診察を受ける、ごみを分別するなど、子育て中の親に必要な日本語という視点で運営しています。

立ち上げ当初は、日本人の夫を持つ外国人女性が多く参加していましたが、最近では外国人同士の夫婦、駐在員の妻なども増えてきました。学習者の国籍は、アジア、アメリカ、ヨーロッパ、中東と驚くほど多様です。

【活動で心がけていること】

日本人なら当たり前になることでも、文化や習慣の違いから外国人にはわからないことがあるため、当然わかっているだろうという前提で教えてしまうと相手は理解できません。教案などを準備するときは、「この人にはわかるかな」、「この人にはこれを足して教えた方がいいかな」と学習者のことを思い浮かべて確認しながら作るようにしています。日本語を教える教室ではありますが、日本のことを少しでも知ってほしいので、季節行事や伝統文化についての話も取り入れる工夫をしています。

また、言葉に気をつけています。日本語がわからないだけで人としては対等であるはずなの

に、外国人に対して子どもに話すような話し方をする人がいますが、それはとても失礼なことです。たとえ日本語がわからなくても、そのような気持ちは雰囲気やニュアンスで伝わります。わかりやすい話し方は必要ですが、相手が日本人でも外国人でも敬意を払って接するよう心がけています。

【多文化共生のまちづくりについて】

違うものは受け入れたくない、自分のものを守りたいという気持ちは、人間誰もが持つものです。しかし、果たして自分の考え方ややり方だけが正しいのでしょうか。時間はかかるかもしれませんが、少しそこから出て、違うもの、新しいものに出会ってみることで、考えが変わると思います。私は日本語教室の活動をしていくなかで、学習者の話から自分の知らないその国の文化を知ったり、考え方を知ったりして、どなたからも得るものがあると感じています。

No. 30

男性 60歳代 通訳・翻訳ボランティア

【新宿のまちの印象】

一言でいうと、「多様性」です。その理由は、「異質を受け入れる」という語感があるからです。特に新宿区役所周辺の歌舞伎町や新宿2丁目界限についてですが、画一的にしたがるのは良くないと思います。

サブカルチャー等の「異色文化」も含め、さまざまな業種が混在することが、そもそも「多文化共生」なのですから。

外国人も多いと感じています。柏木地区や新宿区役所周辺、また新宿駅周辺や角筈、大久保地区、若松地区、牛込神楽坂あたりを歩いていると、各国の言語が飛び交っているのがわかります。

【近所に住む外国人とのつき合いについて】

「おつき合い」までには至ってなくても、あいさつぐらいは、いつもしています。

日本語を話すことができる外国の方々でも、母語でごあいさつしてくれるとうれしいと思います。

例えば、外国では道で知らない人と目が合っても、軽く互いに「微笑みがえし」がされているようです。

【通訳・翻訳の活動】

まず、翻訳についてですが、普段は経済関係の「英→日翻訳」がほとんどです。

小さい頃から英語にふれ合う機会が多かったことや学生時代の英語漬け教育が、この活動を始めるきっかけとなっています。翻訳のときは、まず英語で考えて、日本語の適語を探していることが多いです。

一番困るのは、外国にはあるけれど日本にはないもの、日本にはあるけれど外国にはないものを扱うときです。翻訳にしても通訳にしても、相手の言ったことを完全に伝えることは無理ですけれども、とにかくそれを聞く人に誤解がないように伝えなければいけません。相手が間違っていたら、間違ったように伝えなければいけないのです。それを直してしまうのは良くないと思っています。

通訳については「記憶保持力(Retention)」が必要です。日本語から英語にするのは、否定が最後にくるために、最後まで聴かないとわからないのです。

【多文化のまちづくりについて】

多文化共生の「まちづくり」をするよりも、区役所の職員が英語などの外国語をなにかしや

べれるようになってほしいと思います。外国の方々が区役所を訪問されたら、分担して直接その方々の言葉で話せば、もっと良いのではないのでしょうか。それが外交儀礼(プロトコル=Protocol)というものです。そうした職員の常識的、教養的スキルアップが「語学研修」とともに必要です。

また日本人には、お互いに譲り合う気持ちなどの「互譲の精神」があるのですから、「何でも日本のルールに従ってください」と言うのはいかがなものでしょうね。

また、生活に密着した「ごみの出し方」や「路上喫煙禁止」などの公共的・公益的なサービスの利用・使用についてのルールは、ある程度知って、守ってもらわなければいけないし、自転車などで「道路交通法」で決まっている左側通行の所を右側で走られたら事故を起こします。それ以外のところでは、例えば洗濯物の干し方などは、近隣に迷惑がかからない範囲でならば、それぞれのやり方で良いのではないかと思います。

日本人でもはじめて外国で生活を始めたばかりのときは、その国の生活習慣やルール知らずにやっていることいっぱいありますよね。日本人、外国の方々、それぞれお互いもっとよく自分の生活する「国」を本国と同じと思っていただければと思います。

【多文化共生施策として必要なこと】

「しんじゅく多文化共生プラザ」はあまり知られていないですよ。有効に活用しようという知恵が必要です。例えば、「同プラザ」の運営に外国の方々にも積極的に「参画」していただき、その方々の意見をも取り入れながら現在の組織を改編する等の政策変更が必要でしょうね。

外国人の意識を変えるには、まず日本人の意識も同時に変えなくてははいけませんよね。

【最後にひとこと】

新宿区を国際化するまったく新しいやり方を考えてみてはどうでしょうか。できれば、世界で一番住みやすい都市、外国の方々を含め日本人も、人間として老若男女「みんなが平等に躍動できるまち、新宿」というぐらいになれば良いと思います。それが「みんなで活躍、新宿区」でしょうね。

理念的標語(Ideal Motto/The Great Charter)として『世界の中の「新宿区」、新宿区の中の「世界」を知りましょう!』などいかがでしょうか。つまり、「The Great Charter of the Liberties of Citizens, for the people, by the people of Shinjuku」というわけです。

日本人 自営業者

No. 31

男性 30歳代 建築士事務所経営

【現在の商売】

2007年に一級建築士事務所を開業しました。今までに一度だけ、外国で建築する建物の仕事を引き受けたことがあります。その仕事は途中で終わってしまったのですが、日本とは違う建築の好みを知ることができました。この仕事では、建築段階に入ればその国に常駐してもいいと思っていました。日本と違う文化や習慣を吸収しそれを現地の建物の空間に反映させるような仕事をしてみたいと思います。外国のお客様との仕事は、いろいろなことを考えたり感じたりすることができるので、とてもやりがいがあります。建築は生活や商売に直接関わるものなので、日本人のお客様と仕事をするときもコミュニケーションを丁寧にとり、言葉にならないところもくみ取るようにしています。外国人のお客様でも、コミュニケーションさえ取れば問題なくできると思います。機会があればぜひやってみたいですね。

【新宿のまちの印象】

大久保地域は、建物の雰囲気が変わってきたと感じています。日本の建物は何か落ち着いた印象のものが多いのですが、韓国系や中国系の建物は開放的で華やかなものが多いので、まちの雰囲気が外国的な街並みになってきた印象があります。こうした変化については、いろいろな意見があるとは思いますが、住んでいる人たちの好みに合わせて変わっていく風景を見ること自体は、興味が尽きません。

【外国人とのつき合い】

昨年の4月頃、近所に無認可保育園ができました。子どもを入れる保育園が見つからず焦っていたこともあり、さっそく子どもを入園させてみたところ、半分以上の子どもは両親もしくはどちらかの親が外国人でした。また、その保育園は先生の3分の2くらいが外国人でした。そのような環境の中で小さい頃を過ごしてみるのも良いと思いましたので、先生たちに、なるべく自分たちの言葉で話しかけてもらいたいとお願いしていました。実際、先生たち同士の会話は、日本語よりも中国語が多かったようです。胎教とまではいきませんが、外国の言葉の音やイントネーションに少しでも慣れてくれたらいいと思いましたし、そのような環境の中に子どもを入れるのもとても良いことだと思いました。今通っている保育園は、区立の認可保育園ですが、やはり3分の1くらいは外国人の子どもたちです。この点は新宿らしい良さだと思っています。

自分の子どもが大きくなったときに、日本を含めたアジアの国々がどのような状況になっているかは、なかなか想像できません。しかし、子どもには、アジアのどこの国に行っても生活していけるぐらいのたくましさを身につけてほしいと思っています。そうした意味では、私たちが子育てをしている新宿区の環境は恵まれていますし、そう思って暮らしていきたいと思っています。今は、国際化する社会での暮らしに備えた予行練習をしていると思っています。

【多文化共生のまちづくりについて】

10年後、20年後には、外国の人たちがもっと多くなると思います。そのときになって、多文化共生の下地ができていないとかなり大変な状況になるでしょう。多文化共生に向けたまちづくりの取組みが、外国の人たちが今よりもっと増えたときの社会の基盤となるような活動になってくれたらいいと思います。

No. 32

男性 60歳代 公衆浴場経営

【現在の商売】

公衆浴場を経営し、48年営業していて、私は二代目になります。

【お客様の変化】

創業当時、外国人のお客様はほとんどいませんでした。その後韓国や中国の方は来ていたと思いますが、この10年くらい前から、日本語を話せない方が増えてきたと感じます。最近では、なかなかマナーを直さない人が増えてきたようにも感じます。以前は、日本になじもうと努力し、問題を起こさないように気をつけてくれていましたから、変な話もありません。周りのお客様さんも協力してくれました。

【お客様同士の交流】

近所に住んでいる方は、やはり毎日顔を合わせているので、「元気？」とか「久しぶり」とか言って、会話をしています。また帰化しようとしている方は、地域のつき合いもがんばろうとしています。銭湯で毎日顔を合わせれば、徐々に友だちになってくると思いますね。

【外国人のお客様】

外国人のお客さんが増えることに関しては、ルールさえ守って入ってもらえれば全く問題はありません。どこで聞いてもほとんどそうですが、銭湯に来るような外国の方は、一生懸命なじもう、日本をもっと深く知ろうと思って来ているのでそれほどトラブルはありません。入り方がわからない人は、日本人や国の仲間などの友だちを連れて来て教わり、次からは一人で来ています。

【外国人のお客様への工夫】

10年、15年前ぐらい前からポスターを貼っています。最低限のポスターは本部で作っているので、それを流し場と脱衣場のガラスに貼っています。

日本語を話せなくても、お客さんは大体理解しており、理解していなければ、簡単な英語に身振り手振りを交えて対応しています。あとはジェスチャーだけで理解してもらっています。

銭湯を外国人に習慣として広めていきたいと思っており、せっかく日本に来ているので、日本の文化を知って、銭湯に入ってほしいと思います。友だちになっている人もいますし、決してマイナスではありません。かえって若い日本人同士の方が、礼儀も知らないので少し怖いのです。

ただ買い物に来る外国人と、銭湯に来る外国人は少し違うかもしれません。銭湯は、外国の方から見ると特殊だと思います。宗教、文化によって裸になってはいけないとか、人に裸を見られるのが嫌とかあると思いますが、それを乗り越えて来ているわけですから。

【外国人とのつき合い】

外国の方との個人的な交流は、時間的には仕事で手いっぱい、そこまで余裕がありませんね。

【多文化共生のまちづくりについて】

外国の方用のポスター等をお願いすることがあるかもしれないので、区も協力してほしいです。

また、多文化共生推進課という課はあまり知られていないと思います。このようなことをしているともっとPRしてほしい。商店街にしても、外国語を話せなくても対応できるマニュアルを作れば簡単だと思います。そうしたことを相談する所も知らないのではないのでしょうか。

No. 33

女性 60歳代 印鑑・印刷屋経営

【現在の商売】

印鑑やゴム印の製造販売のほか、名刺やはがきの印刷をしている昭和21年の創業のお店です。父がこの店を始め、私は、平成元年に二代目として引き継ぎました。

【外国人のお客様】

私が引き継いだ平成元年当時は、お店に来る外国人は昔から日本に暮らす韓国人で、名字も日本名だったので、特に意識はしていませんでした。大久保のまちも、外国の家庭料理のお店が数軒あったぐらいで、ほとんど日本のお店でした。

今はお客さまの8割が外国人で、日本人は少なくなりました。日本に来た留学生たちは、まず、住まいを借りたり銀行に口座をつくったりする必要がありますよね。こうしたアパートの契約や銀行口座開設のために印鑑を作りに来ます。文字は、韓国人は漢字、ネパール、ベトナム、ミャンマーなどの人はカタカナで作ります。今では、韓国や中国の人の印鑑はほとんど置いてあります。

外国人が来るようになって、それまで彫らなかった文字や、日本にない文字を彫るようになりました。もっぱら日本人の観光客向けに、ハングルの印鑑も作ります。外国人は、早く作

れる安い印鑑を買うので、良い印鑑の注文はほとんどありません。

近所に外国のお店ができると印鑑を作りに来るのですが、社長が来るわけではないので新しいおつき合いに発展することはありません。とはいえ、若い外国人の留学生に会えるのは、気持ち若くなっていいですね。必ず日本語ができる人がついてくるので、言葉で困ったことはありません。

【外国人のお客様への工夫】

外国人は、すぐ欲しい人が多く、印鑑を作る時間を待ってくれません。そこで、7、8年前に、印鑑が自動で作れる機械を購入しました。高い機械でしたが、購入しなければこうしたお客さんに対応できなかつたので、購入して良かったと思います。当店では印鑑がすぐできるので、友だちを連れて来てくれるのだと思います。でも、単価が安いので大変です。また、工夫と言えるかわかりませんが、「ありがとう」という言葉の外国語を調べて手元に置いてあります。例えば、ネパールの人に「ダンニャバード」と言うと、とても喜んでくれます。こうした工夫で外国人が増えるこの地域の状況に合わせることができ、結果的にお店を続けていられるのかもしれない。

【地域の変化】

この地域は、ずっと変化をしてきた地域なので、外国人が増えたことについても、特別に思うことはありません。個人的には、例えば韓国のお店が少なくなりベトナムやタイのお店が増えてきても、変化は変化でそのまま受け入れるということでしょうか。

ただ、商店会としては難しいことがたくさんあります。今、地元の商店会には、日本の店舗と外国の店舗が40ずつ加盟していますが、外国のお店のほとんどは議決権のない賛助会員です。外国のお店はすぐやめてしまうところも多くあります。外国のお店の正会員化はこれからですね。

【外国人とのつき合い】

お店の近くに住んでいますが、あいさつ程度で、あまりつき合いはありません。

【多文化共生のまちづくりについて】

地域全体に関わる問題などが起きたときに、行政がアドバイスをしてくれたり、一緒に考えてくれたりすると助かります。

No. 34

男性 50歳代 区内郵便局長

【お客様の変化】

当局は大正時代に創業したので、もう90年以上営業していることになります。私は千代田区や中央区のオフィス街の郵便局に勤めたのち、平成10年に局長として就任しました。

就任当時からすでに外国人のお客様はかなり多かったですね。ただし、現在のアジア出身の方が主ではなく、イランやイラクなどの中東の方や、コロンビアやホンジュラスなどの中南米系の方が多くことが特徴でした。これらの国の方々は、母国へ荷物を送りたいというご依頼が多かったのですが、その量が段ボール数箱分にもなる非常に膨大な量でした。禁制品(送れないもの)の説明も必ずして、「入っていませんか」という言葉もかけますが、実際にはその大量の荷物の中に入れてしまっているということが多くありました。また、送付先の国の事情もあり、「荷物が届かない」「中身が抜かれている」などの申告対応にも苦労しました。

最近では、いわゆる振り込め詐欺や、盗難通帳を使った貯金の出し入れ、盗んだ身分証明書で通帳を作ろうとしたなど、外国人が関連する事件の警察対応をすることが多くなっています。これは全国的に見ても外国人が集住しているこの地域の特徴ですね。

【外国人のお客様への工夫】

現在はおお客様の約半数が外国の方です。以前はいろいろな情報を英語とスペイン語に翻訳してご案内していましたが、現在は言語が多様化しすぎて対応しきれない状況です。ただし、新規で貯金通帳を作成する外国人のお客様が非常に多いため、こちらについては申請用紙を5、6か国語に翻訳したひな型を用意しています。

これまでに民間の通訳サービスなどを導入したこともありましたが、やはり顔を合わせた身ぶり手ぶりを交えたコミュニケーションの方が早くて伝えやすいということもあり現在は利用していません。

【日本生活の入口となる郵便局】

来日した外国人は、役所での手続きのすぐ後に郵便局や銀行で口座を開設し、携帯ショップで携帯電話の契約をするというルートで動きます。留学生で多いのが、学校の住所で在留カードをつくってしまい、その住所で口座開設の手続きをしてしまうケースです。この場合はすぐに住所変更をする必要が生じるほか、後日郵送されてくる通帳が受け取れない場合には口座を停止しなければならぬため、それに基づくトラブルも発生しています。私たちも、このような口座や通帳の仕組みをいろいろと工夫して説明はしているのですが、来日したばかりの方に理解してもらうのはなかなか難しいですよ。日本人にとっても難解な部分ですから。

【多文化共生のまちづくりについて】

郵便局の立場ではお客様として、一住民としては同じ地域の仲間として外国人を迎え入れていきたいです。ケンカや対立をするために日本に来ているわけではないのですから。郵便局の裏にもいくつか学校があってたくさんの若い留学生の方がいらしています。彼らは非常に友好的な印象を受けます。言語や文化の違いはもちろんあるけれど、若い人たちを中心にもっともっと仲良くなっていってくれば良いと思っています。

No. 35

男性 30歳代 コンビニエンスストア経営

【お客様の変化】

6年前の開店当時、外国人のお客様は日本に住んでいて日本文化に順応している方が多かったので、日本語で接客をし、対応に困ることは特にありませんでした。外国人のお客様は、その後増えていき、日本に住んでいる人たちだけでなく外国人観光客も多く来店しています。

また、開店当時はいなかった外国人店員が、今では全体の3割になりました。

【外国人のお客様への工夫】

扱う商品のパッケージを多言語化できれば一番良いのですが、それはメーカーが変えない限り難しいので、店では、商品名と値段を表示する部分に英語を併記しています。また、お客様が口頭で言わなければ注文できない商品、例えばレジ付近で売っているフライドフーズやおでん、コーヒーなどは、商品名のほかに味付けなどの簡単な説明を多言語でできる限り用意しています。

外国人のお客様の中で、特に観光客として来た方は、日本のコンビニエンスストアの店内マナーを知りません。カップラーメンのお湯は提供するけれども店内では飲食禁止であることや、購入前に開封しないことなど、守ってほしいマナーを店内に多言語で貼り出しています。

【外国人のお客様が来るメリット】

今まで売れなかったものが売れるようになり、販売数や売上げとして数字にあらわれてきています。日本人のお客様と外国人のお客様ではまるでニーズが異なっているため、外国人のお客様が多い地域の店舗では、専用の棚を設けている所もあります。今後は、外国人のお客様がどのような商品を求めているのか、店側が情報をつかんで、先手を打って展開したいと考えています。

【外国人店員】

外国人雇用が社会全体で進んでおり、コンビニ業界も積極的に採用しているところです。留学生からのアルバイトの応募が多いのですが、なかには日本に来てまだ2か月というような応募もあります。日本語で接客でき、お客様の要望が日本語で聞き取れることが重要です。日本語が話せても、仕事を教えるなかで、伝わらない部分もあります。そうした場合は、日本に長く住む同国人の先輩店員から詳しく説明するなどして工夫しています。外国人店員が増えているため、本部では外国人店員向けの接客マニュアルを多言語で作成しているところです。

文化の違いからクレームに発展してしまうことがあります。「袋を分けて入れてほしい」とおっしゃったお客様に対して、外国人店員が「なぜですか」と、聞き返してしまったことがありました。別の人に渡す、あるいは温かいものと冷たいものを分ける。長く日本の接客を受けていれば当たり前と言えることでも、それを知らないことが原因でクレームに発展することがあるため、気をつけています。

【多文化共生のまちづくりについて】

日本の労働人口が減っているなかで、外国人雇用は必須であり、東京にオリンピック・パラリンピック招致が決まってこれからさらに外国人観光客が増えます。まちも店も多言語化していく必要があります。

夜に女性一人でも安心して買い物ができて、24時間お酒が買えるコンビニエンスストアが、ここまでたくさんあるのはおそらく世界で日本だけではないでしょうか。外国人に日本を知っていただくという意味では、人と人とが接するところが日本の印象の一端になると思うので、外国人のお客様にできる限り丁寧な接客をして、外国人店員には日本が誇る接客方法を伝えたいと思っています。

日本人 不動産業者・大家

No. 36

男性 50歳代 不動産業 大久保地域

【お客様の变化】

昭和60年くらいから外国人への貸出しは多くなってきました。最近は韓国人への仲介が少なくなってきましたが、ミャンマー、ベトナム人が増えてきています。区の統計とだいたい同じ状況だと思いますが、全体として増えています。

【外国人の居住の傾向】

外国人は日本人に比べて定住率は低いと思います。長期で定住する人もいますが、1年以内で入れ替わる極端に短い人もいます。留学生や日本語学校の学生は、それぞれの学校が面倒を見ていることもあって、一般の賃貸業者に出てくる割合は小さくなっています。

【外国人に部屋を貸し出してトラブルになったこと】

文化、生活習慣が違うということで、いろいろなことがあります。今でもトラブルは多いで

す。例えば、以前事務所として貸していた物件がカジノになっていたこともありました。ほかにも、食べ物を廊下にまき散らしたり、家財を残して行方不明になったり、大勢で住んだりごみ部屋にしたりとか、そのようなことがいろいろあります。それをその都度、こつこつと解決している状況ですね。

【外国人とのつき合い】

外国人との商売上のつき合いは増えています。観光客も次々に来ていますから、もうそうした国際的な時代になっているということではないでしょうか。

商売としてみても、日本人の人口が減少しているなか、そこを外国人の増加で持ちこたえられるかどうかというところがあります。外国の方が増えることについて、何が良くて何が嫌いとか言える時代はもう終わっていて、その変化にどう向き合っていくかが大切だと思います。

【外国人に住宅を貸し出す際に気をつけていること】

原則はシンプルで、ちゃんとお金を払ってくれるかどうか、周りトラブルを起こさないかどうかというふたつだけです。

家賃の滞納リスクはものすごく高くなっています。自社で回収するのは大変です。この地域に特化した地域密着型の賃貸保証人を請け負う保証会社もあり、立ち退きまで面倒を見てくださるところがあります。だから、そういったところを使ってやっていくということですね。

外国人だから借りにくいということは、今はもうないと思います。外国人が部屋を借りられない時代は終わりましたので、それは心配には及びません。中には、嫌という方もいるかもしれませんが、それは少数派です。

【多文化共生のまちづくりについて】

経済や文化の交流は大いにやったほうが良いと思います。行政主導よりも、そうした民間の団体がいっぱいあるので、そちらを応援していただくのが良いのではないのでしょうか。

今は、水と油のようになってしまっているものを、何とか混ぜなくてはいけない時代ではないのかというのが、私の時代観です。民間レベルの交流をどんどんやっていただき、つながっていければいいと思います。

No. 37

男性 70歳代 大家 大久保地域

【新宿のまちの印象】

外国人がずいぶん増えたという実感があります。

以前は歌舞伎町には外国人がいなくてほとんどが日本人でした。だんだん外国の人が入ってきて、今、外国のお店もだいぶ増えてきていますね。

【外国人に貸し出しを始めたきっかけ】

以前、新大久保駅で韓国人が駅のホームに落ちた日本人を助けようとして亡くなった事故があって、私はものすごく心を痛めました。これを風化させてはいけないと三日三晩考え、日韓の交流を大切にしなければとの思いから、これまでいろいろな活動してきました。

この事故がきっかけで、私は、このマンションを韓国の学生に安く貸し出すようになりました。

【現在の居住者】

今、貸し出しているマンションは、すべて外国人が住んでいて、日本人はいません。

最初は韓国人の人が多かったですが、今はインドネシアの人が多いです。やはり同じ国の人がいる所に人が集まってきます。それからネパール、ベトナムの人たちもいます。中国人は5、6年前はいましたが、今はいません。

一時期、韓国の韓流ブームがあつて、人混みで大久保界隈の道路は歩けない状態のときもありましたが、ブームが去って、韓国人はほとんど帰国し、今は半分以下になりました。

【外国人に不動産を貸し出す際に気をつけていること】

まずは、あいさつから外国人にルールを伝えることを前々からやっています。部屋を貸し出す際には、「日本に来たら日本の法律に従わなきゃだめだよ。そうしないと仲良くできないし、貸せないよ」と私ははっきり言っています。それは基本ですからね。

【地域の変化】

このまちは住みにくいということは事実だと思います。なぜなら、ここは眠らないまちであると同時に、外国人がルールを守ってくれないからです。多文化共生と簡単に言うけれど、実際にその地域に住んでみると、それはすごく大変なことだというのがわかると思います。両隣のビルはすでにもう外国人に売られています。中には、日本の経営者としてここでがんばってほしいと私に言う人もいます。

【安全・安心なまちにするために】

違法建築が多いのがとても目につきます。資材を勝手に建物の上にあげていて、次の日にそこを見てもうすでに完成していることもあります。区役所には建築の専門家がいるわけですから、きちんと毎月見て歩くことが大切だと思います。実際に見てチェックして指導して、それでダメなほどの悪質な場合は、ご本人にもオーナーにも強制的な指導を通達すべきです。違法建築の取締りは、とても大事なことだと思います。

違法建築は防災面にも大きな悪影響をもたらしています。また、犯罪の温床にもなっているので、区も、実際に見てしっかり指導してほしいとお願いします。

狭い部屋に外国人がたくさん居住しているのを放っておくのも、防災・防犯の面から好ましくないのも、もっと目を向けなくてはいけないと思っています。

No. 38

男性 60歳代 マンション管理士

【新宿のまちの印象】

まちなかで若い人を見かけますが、日本語ではない会話が聞こえてきて、外国人が多いと実感します。また、ミャンマー料理やタイ料理などの外国料理のレストランが増えたと思います。

【マンション管理相談について】

大家のほか、マンション管理相談も行っています。中でも外国人に関する相談はたくさんありますね。例えば、区分所有の部屋を勝手に外国人向けホテルとして利用するという問題です。完全に無届状態でやられていて、同じマンションの住人からのクレームを受けて調べたら判明したというケースが最近は増えています。

分譲マンションの場合は、外国人が投資目的で購入することが多く、買った後に本人は帰国してしまいます。その場合、連絡が一切取れず、管理費や修繕積立金を払ってもらえません。

賃貸の場合は生活ルールの違いによる問題、分譲の場合は外国人の物件に対する所有感覚が日本人と違うことによる問題をそれぞれ抱えています。

一方で、役員の中に外国人がいる場合は、日本人と外国人がうまく共生しています。中国出身の方が理事長を務めたり、韓国人が役員となっているケースもありました。

【外国人に部屋を貸した際のトラブル経験】

契約者以外の複数の人が住んでいたり、住んでいる人が次々に変わったりというトラブルがありました。また、部屋を好きなように模様替えしてしまい、原状回復がままならないこともありました。ただ、もちろん日本人居住者でもトラブルはありました。

【外国人が部屋を借りやすくするため】

外国人に関するトラブルの相談に対しては、外国人は日本のルールがわかっていないことが多いので、それらを翻訳した文書を用意してはどうかとアドバイスしています。4、5年前に大規模修繕工事をやったマンションの事例ですと、居住者向け説明会を開催した際に、施工会社が日本語だけでなく韓国語や中国語の説明パンフレットを作成して配付したことがありました。それは大変評判が良かったのです。

また、外国籍の方が組合の役員などの中心的な立場にいれば、言葉が通じるし、ルールが徹底できると思います。日本人でも外国人でもキーパーソンと連携することが大事です。

【多文化共生のまちづくりについて】

分譲マンションについてはオーナー向け、賃貸マンションは居住者とオーナー向けにルールブックを多言語で作り、管理会社、管理組合も含めて配ると良いと思います。同じ情報が日本人と外国人双方にきちんと共有できていれば、オーナーも説明しやすいと思います。

また、日本と外国との文化の違いを扱うセミナーを、外国人向け、日本人向けと別々にやった後で、一緒に懇親会などをやってはどうかと思います。交流の機会は非常に重要です。

日本人 民生委員・児童委員

No. 39

男性 70歳代 大久保地域

【新宿のまちの印象】

新宿に住んで60年になりますが、本当によくわからないまちだと思います。育ってきた愛着はあっても、愛着が身についているかわかりません。感じるのは、多種多様な人がいることです。外国人は多くなったと思います。大久保地域だのご近所さんのように周りに外国籍の方がたくさんいるので、外に出ればすぐ会えるという感じです。

【外国人とのつき合い】

アパート経営をしており、個人的にもつき合いがあります。入居者の半数程度は外国人で、韓国、中国の方が多く、インドの方もいます。部屋を貸すうえで、外国人ということは特に意識していません。注意するときは、はっきり言います。不動産屋も私の意見を聞いてくれます。

トラブルでひどい目にあったのは日本人です。外国人は説明すればルールを守ってくれます。外国人に部屋を貸しづらいという課題は、管理人がしっかりしていないことが原因だと思います。私は入居者の顔を見たら声をかけるようにしています。お土産を持ってきてくれる外国人の入居者もいます。

【支援活動を行うなかでの変化】

民生委員・児童委員として28年間支援活動をしてきました。民生委員・児童委員の場合、個人情報関係もあり、自分の班のことは外部には出せないため、ほかの班が具体的にどのような支援をしているかはわかりませんが、私が担当するエリアでは支援を必要とする外国人は少ないです。担当地区によって対象者の抱える課題は大きく違います。

【支援活動を行うなかで感じること】

外国人も高齢化が進み、今まで育った人がそのままずっと地域に住んでいるという感覚です。また、新大久保駅の近くは子どもが表に出てきません。学校の行事に参加してみて、初めてここにいたのだと気付くぐらいです。最近では親子を見ても、子どもは外国籍か、日本国籍か、判断することが難しくなっています。

外国人と話す際は、自分の意見を少し抑えるようにしています。自分が理解できない言語を使う人とコミュニケーションをとるときは、通訳できる人に間に入ってもらうしかありません。

なお、私自身は外国人に対し、支援という考え方ではなく、互いにつき合っているという意識で接しています。対等のつき合いができれば良いというのが、私の考え方です。

【多文化共生のまちづくりについて】

区の多文化共生施策については、大きい会ではなく、7、8人の少人数で集まり、お互いの遊びや料理などを知る交流会などがもっとあれば良いと思います。肩ひじを張らずに集まり、楽しみながら交流するような会を一緒にやりたいです。

ほかの大家に聞くと、外国人を毛嫌いしている節はあると思います。それは個々人の意識の問題ですが、日本人と外国人、互いの差別意識は少なからずあるように感じます。そういった意識を減らすためには、交流を続けてなくしていくしかない、と思います。

一生懸命な外国籍の方が多いので、日本人がもう少しなじむと良いと思います。日本人の意識変化が重要です。大久保地域では、大久保通りの北側と南側でも考え方の違いがあります。

相手を非難せず自分を見つめる、というのが私の考えです。日本人と外国人が互いに相手の良いところを見ていくことが大切だと思います。

No. 40

女性 70歳代 柏木地域

【新宿のまちの印象】

私が住んでいる地域は、新宿区の中でも端の方の地域なので、都会という感じはしません。

外国人は多いと感じます。新宿区内で外国人が2番目に多く住んでいる地域でもありますので、まちを歩いても、民生委員・児童委員の活動で学校に行ってもそう感じます。

私が現在住んでいるマンションにも外国人はいます。若い方やお子さん連れが多いですね。こちらからあいさつはしますが、言葉がわからないからか返事が返ってこないことが多いし、個人的なつき合いはほとんどありません。

【支援活動を行うなかでの変化】

民生委員・児童委員の活動を続けて二十数年になります。最近では、母親が東南アジア出身という家庭から、学校からのお便りが読めないという相談が増えました。子どもは学校生活の中で日本語を覚えられますが、親の方はそうはいかず、子どもが家の中で学校の話ができないなど、親子のコミュニケーションが図れなくなっているという問題も出てきています。

【支援活動を行うなかで感じること】

外国人の家庭だからと特に注意するということはありません。ですが、学期などが日本と違うせいなのか、外国の方は子どもだけを置いて一時的に国に帰ってしまうことがあります。もちろん、私は民生委員・児童委員として問題のある家庭ばかり会っているからかもしれませんが、子どもだけが家に残されるということは、虐待と見られる場合もあります。そのため、ある程度そうした家庭には注意しています。

【偏見や差別意識】

やはり差別のないまちになってほしいと思っています。現在、学校にはいろいろな国籍の児童・生徒が通っており、日本人の子どもたちも外国人の子どもたちも、そのことに違和感を持っていません。むしろ大人たちに差別や人権について改めて学んでほしいと思います。

私の周囲では、日本人から外国人に対する差別意識はそれほどありません。逆に外国人から日本人に対する差別意識もありません。しかし、何かトラブルが起きたときに「外国人だから」という見方をすることは少なからずあるかもしれません。

【多文化共生のまちづくりについて】

われわれも外国に行くとなかなか恐怖心があるので、こちらに来ている外国の方たちにも、安心して暮らしてもらいたいと思っています。

また、日本人側がいろいろな言語を学ぶ機会があれば、私自身も外国語が話せればと思うことがあります。支援活動をしていながらも、言葉が通じないことによって何もできないことがあるのです。外国語が話せれば、もっと積極的にいろいろな対応ができると思います。

私たち日本人も外国の生活習慣を勉強しないといけないし、やはり受け入れるだけではなく、一緒にやっ払いこうという姿勢が必要ではないでしょうか。

第3章 団体調査

第3章 団体調査

I 要約（再掲）

団体は設立の目的、活動内容、サポートする対象が明確化されている。具体的な内容は、各団体のインタビュー結果にゆだねることとし、団体類型ごとの課題の概要を掲載する。

1 外国人コミュニティ団体

- 子育ての方法やご近所づき合いなど、日本の文化を理解することの難しさがある。
- 日本で長く暮らす外国人が高齢化しつつあり、失業対策、医療、福祉など、これまでになかった外国人支援が求められている。
- 外国人でも日本のメディアを見ながら育った場合は日本人の感覚に近くなる。その結果新たに来日した同国人と衝突することがある。
- 新しい法制度や外国人が受けられる行政サービスの情報を、外国人にもわかる形で提供してほしい。

2 外国人支援団体

- 日本人と外国人の国際結婚の子どもは、日本名で日本国籍の場合が多く、それらの子どもが抱える課題が見えにくくなっている。
- 就学年齢を超過した子どもの学ぶ場がなく、またその存在が明らかになっていないことから、課題として認識されていない。
- 都立高校の受験科目が5教科となったことで、外国にルーツを持つ子どもの進学機会がますます狭くなる。また、安定財源がないため、このような子どもへの支援事業の継続が困難になっている。
- 教育、子育て、福祉などさまざまな分野が連携した、学校の時間以外での支援を望む。
- さまざまな多文化共生施策を根拠づける法律がないため、国としてまとまりがない。
- 外国人に関する社会保障制度等のシステム面に大きな問題がある。
- 入管法の改正など、外国人が法律や制度に関する正しい情報を入手する体制が整っていない。

3 教育機関（小・中学校）

- 日本語の習得途中で受験を迎えることになり、学力があってもその力を発揮できない生徒がいる。
- ネパールの子どもへの日本語サポートでは、文字を教えられる人がいない。
- 学年便りなどのお知らせを多言語に翻訳しているが、それを読まない親がいる。
- まったく日本語を理解できない保護者も増え、面談などでの苦労がある。通訳が不可欠である。
- 移動教室で体調が悪くなったときなど、日本語が通じないと困る場面がある。
- わずかでも言葉が通じると安心するので、ある程度外国語を学習した教員を配置してほしい。

4 教育機関（日本語学校・専門学校）

- 学校生活、勉強、就職活動などすべての場面において、日本語能力の不足が課題となっている。
- 日本の就職活動がわからず、のんきに構えてしまう留学生もいる。
- 外国人にはマイナンバーがよくわからないのでフォローしてほしい。
- 非漢字圏の留学生に日本語を教える技術の不足、日本語教師の不足が課題である。

5 商店会

- 以前よりは良くなっているが、来日したばかりで日本語や日本のルールがよくわからない人たちが来るため、依然として路上看板や自転車の問題がある。
- ルールやマナーの問題は、外国人に限ったことではない。

6 医療機関

- 日本語が話せないと診察が難しく、検査や診察結果を説明するのに苦労する。
- 外国語対応できる病院が少ないのは、通訳にかかる費用が各医療機関の自己負担であることが一因と考えられる。国に通訳を保険の点数化してもらう必要がある。
- 外国人の多くは国民健康保険に入っているので区民健診の対象となるが、受診率が低いと聞いているので、案内封筒に外国語を併記し、外国語の書類を同封して受診につなげてほしい。
- 生活指導や衛生観念などで文化の違いがあり、日本の基準でどこまで指導するか悩む。
- 特に在留資格のない外国人の健康が心配である。公衆衛生の点から考えても、健康診断や結核検診は在留資格の有無に関係なく受診できるようにしてもらいたい。

7 子育て支援機関

- しつけなど、子育てに関する文化の違いを埋めるのは難しい。
- 子ども家庭支援センターが、親子がいつでも利用できる施設であることを外国人にどのように伝えていくかが課題となっている。

Ⅱ 調査結果

団体 外国人コミュニティ団体

No. 1

在日本大韓国民団 東京新宿支部

【団体の概要】

1947年2月に設立された任意団体で、会員が200～250世帯おり、毎月2、3世帯が新規入団しています。役員会は毎月開催しており、毎年1回4月後半に総会を開催します。新宿支部には婦人会もあり活発に活動しているところです。

【団体の活動内容】

ふれあいフェスタや大久保祭りなどあちこちのイベントに参加しています。大きな行事としては、新年会やお花見、次世代育成のための日帰りキャンプ、ボウリングなどがあります。団員には、公式な文書をはじめ、壁新聞のようなニュースやイベント案内を提供しており、さらに婦人会は連絡網を持っています。

今は、若い世代が活動に参加しない状況にあり、団員を増やす方法を考えています。団員減少の支部が多いなか、幸いにも新宿支部は毎月増えており、モデルケースになれば良いと考えています。古くからの在日韓国人がみんな高齢化していくなかで、40歳から50歳代の人たちを入れることによって理念を共有しながら、活性化を図りたいと思っています。

【活動をするなかで見えてきたこと】

現在の課題は、後継者の育成です。執行部の下の世代を見ると、日本で生まれた人が少ないです。以前は、年配者の意見を聞かなくてはいけないという文化が強くありましたが、今は若い世代と仲良く良い雰囲気を保つことが必要だと思っていますし、実際にそのように心がけています。

民団設立当初は、日本社会で受け入れてもらうために、状況を変えていこうというパワーがありました。その頃の在日一世の世代は引退しており、この10年くらいでニューカマーの人たちも入りやすい雰囲気になったと思います。民団に入るメリットはかつて、韓国語を話す同じ境遇の友人と知り合えることだったかもしれませんが、今は入団が子どものためになると伝えています。

私たちの世代は、日本で生まれて、日本の教育を受けています。日本のメディアを見ながら育ってきていて、韓国人というよりも、日本人という感覚に近い考え方があり、新しく来た韓国人と考え方で少しぶつかる点もあります。コミュニケーションをとるうえで、そこは少し気を使わなければいけないと思っています。日本で生まれたことを生かして、地道に活動して、日本人には韓国人を理解してもらいたいし、韓国人にも日本人を理解してもらいたいと思っています。

【他の団体との連携】

今、一番交流している団体は、新宿区日韓議員友好連盟です。かつてはほかにもありましたが、なくなっていました。行事などで後援という形で他の団体と並んでいることはあります。

【行政に望むこと】

世界中を見ても、日本だけではないかと思うぐらい、外国人に対して優しい支援を行っていると思っています。区には、そのまま続けて行ってほしいです。できれば、新宿区と韓国ソウル市の中区との姉妹都市関係を結んでほしいです。

また、難しいかもしれませんが、韓国学校に入学する生徒が多く、なかなか入学できないので、どこかに校舎を造ってもらえないかという願いもあります。

韓国人はうまくコミュニティをつくるほうなので、それほど苦労していないと思います。少人数の国の人たちへの支援を手厚くすると良いと思います。

No. 2

在日本韓国人連合会

【団体の概要】

約14年前に設立した日本全国のニューカマー団体です。理事会は約90人で、全国に一般会員が約1万人います。毎月第2火曜日、クリーン活動の後に理事会の定例会を開催するほか、年1回総会を開催しています。

【団体の活動内容】

クリーン活動のほか、日韓交流まつり、大久保祭りにも参加し、韓国語スピーチ大会、グローバル若者育成セミナー、若者向けセミナーも行っています。商店街や他団体のイベントに参加したり、学生に奨学金を提供したりするため、チャリティーイベントを開いています。また、語学支援や生活上のトラブルの相談、メールやSNSを活用した情報提供もしています。

三つの活動目標があり、第一は会員同士の親睦を深めること、第二は子どもたちに韓国の文化や言語を含めてきちんとルーツを残していくこと、第三は地域社会及び日本社会に貢献することです。

【活動するなかで見えてきたこと】

ニューカマーの若い人たちは、団体組織に関わろうとするのではなく、自分が困ったときに連絡してきます。留学生も情報はSNSなどで見られるので、組織に入っていない人が多いです。20歳から30歳代の人が基本的に組織活動に積極的ではないので、いかに目を向けさせるかということが課題です。組織内に青年会と婦人会をつくることを検討しており、そのための試みとして、昨年から若者向けリーダー育成セミナーを開き、30歳代の方に参加していただいています。

また、最近では経済的なことも課題だと思います。経済的に余裕がなくなると、自分のことに精一杯で組織活動ができなくなります。企業や団体が協賛できない状態になると、組織の運営力も低下します。

日本の組織はリーダーが変わっても、きちんと次の代に受け継がれますが、韓国の組織はそうでない場合が多く、運営が大変です。韓国は人間を中心にして組織が動くため、リーダーが変わると組織自体ががらりと変わり、事業の継続性が保たれないというリスクがあります。

【他の団体との連携】

領事館と大韓民国民団とは情報共有しています。数年前、池袋の中国人がニューカマー団体をつくったときなどはいろいろな方々とお会いしましたが、最近そういった動きは少なくなりました。

【行政に望むこと】

会の運営にはお金がかかるので、区や国に一部を支援してほしいです。日本社会や地域社会に貢献する当会のような組織が安定することは、区にとっても良い効果があると思います。区

民の10人に1人が外国人なので、区にはもう少し外国人を受け入れる姿勢をアピールしてもらえば、引っ越してきた人も過ごしやすいです。さらに、きちんと税金を納めているのに、社会でサービスを受ける際の壁を感じます。区だけでも良いので、その壁を少し低くすることが本当の多文化共生だと思います。

クリーン活動の支援をお願いしたいと思います。また、事務所の運営費が大きいので、事務所スペースの貸与ができないでしょうか。そうしていただければ会長が代わるたびに引っ越しする必要もないし、他の外国人コミュニティにも活動の場を提供すれば、全体的な多文化共生の連携ができると思います。

No. 3

タイ人ネットワーク（タイ在日互助会）

【団体の概要】

タイ人ネットワークは大使館公認の全国規模の組織で、10年前に設立され、会員が約150名います。会員のほとんどはタイ人で、タイが好き日本人も、数は少ないですが加入しています。会員になるために、国籍は問いません。タイ大使館とタイ外務省から財政的な支援を受けており、県ごとに会長を置いた支部があり、その下に2、3のグループがあります。

【団体の活動内容】

タイ人ネットワークの活動には、災害時の情報提供、セミナーなど勉強会の開催、弁護士や医師による専門相談などがあります。先日は、日本人配偶者が亡くなった場合の相続や遺産分与に関する法律セミナーが大使館で開かれ、参加してきました。さらに今年は、初めての試みとして在日タイ人のための健康ハンドブックを5000部作りました。タイ語と日本語を併記にして、病院関係者と日本人家族と一緒に読めるように工夫しています。費用は、代々木公園で行われたタイフェスティバルで得た収益を中心にして、大使館からの助成金や各団体からの寄付で賄いました。タイフェスティバルは、日本人にタイ文化を紹介だけでなく、自分の子どもや日本人の配偶者にタイを知ってもらって、誇りに思ってもらおうという目的があります。

私が所属する「タイ在日互助会」は、埼玉県グループで、現在は50名で活動中です。かつて互助会では、日常生活でわからないことや日本とタイの文化の違いなどからくる悩みを相談し合ったり、日本語を話せる会員が話せない会員のことを通訳として手伝ったりしていました。しかし最近は、そういった悩みを抱えるタイ人が、私たちのグループの周りにはいなくなってきたため、むしろタイで暮らしに困っている人たちを助けようという活動に変化してきています。今年は、地元のお祭りにタイ料理の店を出し、民族舞踊を披露して、その収益をタイの学校に寄付しました。県には別のグループがいくつかあり、親に連れられてタイからやってきた子どもに日本語を教える教室を開いているところもあれば、就職のための職業説明や資格取得支援をしているようなところもあります。

タイ人は同国人同士のつながりが強いのが特徴です。メールや電話などで連絡をとり合い、各地に点在しているタイの寺院で顔を合わせるため、話す機会が頻繁にあります。

【活動するなかで見えてきたこと】

日本の文化を理解することが課題だと感じています。性格や日本語能力は人それぞれで、日本人の家族が協力的か否かにもよりますが、日本の子育ての仕方やご近所付き合いなどがきちんと理解できなくて、一人で悩みを抱え込んでいることがあります。

さらに、日本語がわからないと苦労はさらに大きくなります。例えば、子どもの学校のお知らせが日本語で書かれていて読めないために持ち物の用意ができず、子どもは必要な物を持たずに学校に行き、先生から「ちゃんとしていない親」と思われてしまう。漢字が読めない、宿題を教えられないとなると親子のコミュニケーションがうまくいかなくなる。こうした問題はタイ人によく見られるものです。

ミッターファンデーション**【団体の概要】**

私は、大久保地域にある百人町の日本語学校の職員として外国人留学生の相談にのってきました。学校をやめた後も、私あてに相談の電話がたくさんかかってきたため、2003年3月に支援団体を設立しました。日本人と外国人を合わせ、全部で9名のスタッフで活動しています。

【団体の活動内容】

ミャンマー人からの相談に対応するほか、ミャンマー文化の紹介、ミャンマー人の子どもの学習支援をしており、最近ではミャンマー企業と日本企業の仲介も始めました。

相談は留学生からが多く、日常生活でわからないこと、部屋探し、学校卒業後の進路などその内容はさまざまです。文化や習慣の違いからくる悩みには、ミャンマーの習慣と違って、自分が今いる日本の法律や習慣に従わないといけないと伝えていきます。

学習支援を始めたのは、日本で暮らすミャンマー人夫婦の子どもたちが日常会話のほとんどを日本語でして、ミャンマー語が話せない、書けない子どもが増えていることが残念だったからです。ミャンマーは、今、発展してきているので、ミャンマー語やミャンマーの習慣を身につけておくことは、将来必ず子どもたちの役に立つと思いい、教室への参加を呼びかけているところです。

【活動するなかで見えてきたこと】

ミャンマーが目覚ましい発展をとげるなか、日本で暮らすミャンマー人の傾向が変化しています。以前は、難民として来日する人が多く、難民認定をもらって、ミャンマーへ仕送りしながら日本に永住したいという考えの方が多かったのですが、最近では日本で学校を卒業した後、ミャンマーでの就職を希望する学生が増えました。日系企業の進出や日本人観光客も増えているので、留学生たちには日本語をしっかり身につけ、日本の技術だけでなく、ごみの分別やあいさつなど日本の良い習慣をミャンマーに持ち帰って、紹介するようアドバイスしています。

また、日本で長く暮らすミャンマー人が高齢化しており、それに伴う問題が出てきています。ミャンマーに帰国することができず、高齢のため働くこともできなくなって収入を失い、母国ではない土地で年をとっていくことに不安を感じている方が多くいます。診てもらえる医療機関を探すこと、生活困窮に陥る前に福祉関係の部署につなぐこと、亡くなったときのミャンマーの形式に則った葬儀の手配や部屋の片づけなど、今までにはなかった支援が求められていると感じています。

【多文化共生のまちづくりについて】

新宿区に住んで30年が経ち、今では第二のふるさとのように感じています。この地域でお世話になっていることに感謝して、この地域のために私も団体も何か役に立てたらと思っています。

新宿区の日本人は外国人に慣れているので、暮らしやすいところです。日本人ばかりの地域に自分一人となったら、寂しく感じるかもしれません。先日、銭湯でお風呂に入りながら地域の日本人女性たちといろいろと話をしました。コミュニティの一員としてこうして会話ができることは素晴らしいと感じました。

新宿区の外国人には留学生もいれば家族滞在の人もいて、いろいろな国の人がいます。日本人と外国人を区別しないコラボレーションが生まれたら良いと思っています。

在日フランス人協会

【団体の概要】

在日フランス大使館が公認する一般社団法人で、特に領事部と密接な関係にあり、設立から約60年を迎えます。現在の定期会員数はフランス人が約300人、日本人を含むフランス人以外の会員も40人ほどいます。会長は選挙で選ばれ、事務局としてフランス人専任スタッフが1名おり、その他は案件の規模に応じて、フランス人や日本人のボランティアが実行委員会形式で運営をサポートしています。

【団体の活動内容】

会員は主に、日本に短期的に住むフランス人駐在員とその家族で、彼らの日本での暮らしを充実させるために活動しています。具体的には、新規来日者向けの日本生活オリエンテーションを兼ねた朝食会、日本文化の紹介や暮らしに必要な情報をまとめたフランス語冊子の発行、富士登山や鎌倉散策、相撲や歌舞伎鑑賞、スキー旅行の実施、また定期会員だけでなく、フランス人、フランス語を話す外国人同士の交流を目的としたパーティーの開催などがあります。オリエンテーションでは、フランス人に関わるさまざまな団体、例えばフランス人の趣味サークル、フランス語で診療を受けられる医療機関、フランス人の国際結婚に伴う問題を扱う団体などを招き、会員が協会以外の情報やサービスにアクセスできるようにしています。協会として得た収益は、日本に生活拠点を置くフランス人が急な失業等で困窮した場合の生活費や帰国費用の貸与に充てるため基金として積み立てています。

【フランス人コミュニティ】

日本で働く外国人は大きく分けて、現地採用職員と駐在員がいます。留学生として来日してそのまま就職したり、日本文化ファンであったり、日本人と結婚していたりする現地採用職員に比べ、転勤として来た駐在員にとっては、言語の問題もあり日本になじむことは容易ではありません。協会の会員の多くは駐在員であるため、協会の一組織である Japon Accueil（ジャポンアクイユ）が、日本在住歴が長いフランス人を各区に1名ずつ責任者として置き、日常生活の相談にのる体制をとっています。災害時についても、大使館の領事部が、各区にリーダーを置いて支援体制をとっています。大使館や在日フランス人協会など母国側のサポート体制が整っていることもあって、困ったときは、日本の行政を頼るよりは、そうした母国のサポートに助けを求める方がほとんどです。

フランス人駐在員のコミュニティは、少しの期間を東京で暮らしたらお互い顔見知りになれるほど小さいものです。特に、家族を伴う駐在員は、子どもをフランス人学校に通わせるので、仕事以外でもおのずと顔を合わせる機会が多くなります。駐在期間のほとんどが2、3年間のため、このような短い期間で日本語を習得するのは難しく、日本生活に慣れ、伝統文化や料理などの文化を一通り体験したところで帰国が決まるか、次の国へ転勤します。こうした状況を見ると、どこの国の駐在員も同じかもしれませんが、駐在員と地域社会との接点が乏しいのは、やむを得ないように感じます。現地採用職員の方が、日本語が話せるため行動範囲が広く、また、自身が希望して日本にいるわけですから、地域への定着度が高いのは当然の結果かもしれません。

【行政に望むこと】

新しい法制度、外国人が受けられる行政サービス、催しなどの情報を提供していただきたいと思います。言語やコミュニティの性質上、地域社会や行政との接点を個人があまり持てていない状況にありますが、協会を媒介としてつながっていったら良いと考えています。

NPO法人 国際活動市民中心（CINGA）

【団体の概要】

当会は2004年10月に「専門性を持った市民の集まり」により発足しました。弁護士・行政書士・税理士・社労士・社会福祉士などの専門家による外国人への支援活動を行っています。

【活動内容】

法務省入国管理局から受託した業務として、しんじゅく多文化共生プラザ内で「外国人総合相談支援センター」の運営を行っています。また、CINGA独自の活動として、特に専門家による外国人の在留資格や法律相談を受け付ける「専門家相談」を月2回行っています。そのほか、団体の専門性を生かし、東京外国人支援ネットワークが実施する外国人のためのリレー専門家相談会への協力や、都内の国際交流協会、NPO団体等の活動に対し、講師派遣などのサポートを行っています。

【さまざまな相談の内容】

外国人総合相談支援センターや専門家相談会で受ける相談は多岐にわたります。近年では、技能実習生や留学生が増えたことにより、「就労のルール外で仕事をしてしまった」「雇用主からひどい扱いを受けた」という仕事に関する相談や、「親を日本に呼びよせたい」という在留資格に関する相談が増えています。

また、大きな法改正があったときには、必ず在住外国人の中で間違った情報がうわさとして広がります。例えば入管法が改正される際には、うわさを聞いて心配になった外国人から「在留資格がなくなるのではないか、退去強制の対象になるのではないか」という相談があります。これらは、法律や制度について、外国人が正しい情報を入手できる環境が整っていないことが原因だと思います。

【ワンストップサービスの姿勢】

外国人総合相談支援センターは、どのような相談もワンストップで受けることを趣旨としています。近年、精神的な疾患を抱えている方からの相談が非常に増えてきており、それらの方に共通するのが身近に相談できる方がいないということです。母語で話をするだけで気が晴れるという方もいるし、紹介できる場があればしっかりとつないでいく。どのような相談でも決して断らず、まず話を聞くという姿勢を大事にしていきたいです。

【行政に望むこと】

現在、自治体ごとにさまざまな多文化共生施策が行われていますが、それを根拠づける法律がないため、国全体のまとまりがない印象を受けます。オリンピック・パラリンピックを控えて、今後來日する外国人に対する通訳や医療支援をどうするかという話も出ていますが、すでに日本には200万人の外国人が暮らしています。それらの方への支援をどうするかを、中長期的な視点で捉えた法律、政策が早急に必要だと感じています。

NPO法人 みんなのおうち

【団体の概要】

地域のつながりが希薄で、子育て中の親が孤立しがちな状況を懸念し、地域というものを再構築することを目的に2005年7月に設立しました。会員は、日本人20人です。趣旨への賛同

を条件に会員を募っていますが、会員でなくても活動には参加できます。ひとり親、外国人の親など子育てに不安を抱える親は少なくありません。地域みんなで子どもを育てようとログハウスでの自然体験、昔遊び体験、学習支援教室を中心に活動しています。

【団体の活動内容】

子育て支援を続けるなかで、外国人の親が子どもの教育に不安を感じていること、そしてその子どもたちの多くは、日本語が十分でないため勉強ができていないことがわかってきました。そこで区に協働事業提案をし、外国にルーツを持つ子どもとその家庭の支援を行うことになりました。

ログハウスでの自然体験は、経済的事情から旅行に行くことができない家庭のために企画したもので、同じ地域で暮らす日本人の家庭に参加を呼びかけて、外国人家庭が地域につながるきっかけをつくっています。学習支援は区の施設で週5日間、教科学習を中心に行っています。

【活動するなかで見えてきたこと】

立上げ当初は、教員ではないボランティアに本当にできるのかという視線で見られていました。また、ボランティアを募った際には、英語を使いたいという思いや、「支援をしてあげる」という上から目線の方もいて、私たちが目的とする、地域の人々のつながりを取り戻すというこの教室の意義を共有してもらうのに苦労しました。

外国にルーツを持つ子どもの中には、外国人同士の夫婦の子どものほか、日本人と外国人の国際結婚の子どもがいます。国際結婚の場合は、どれだけ日本人配偶者が、外国人配偶者と子どもに配慮し、ケアできるかが、生活環境や子どもの学力に影響してきます。外国人同士の子どもの場合、国籍も外国籍なので、支援が必要な子どもと周りも認識しやすいのですが、国際結婚の子どもは日本名の日本国籍である場合が多く、抱える問題が見えにくくなっています。日本語が十分にできていないことも、家庭内言語が外国語で日本語の習得語彙が少ないことが原因であるにもかかわらず、子どもの努力不足であるように言われてしまうことが多いのです。文部科学省がそうした児童・生徒への日本語教育を教育課程として認めることにした「特別の教育課程」のスタートをきっかけに、こうした子どもたちが抱える課題を正しく理解する必要があると思います。

【行政に望むこと】

今年度から全日制のすべての都立高校が5教科受験になることで高校進学ハードルが一段と高くなりました。募集人数のうち在京外国人枠にも来日3年未満であることと条件がつけられており、実態に見合う措置ではありません。また、学習支援教室を卒業し、青年となった子どもたちをみていくなかで新たな課題として浮き彫りになってきたのは、在留資格の問題です。資格区分が「家族滞在」である場合、就労時間が週28時間に制限されているため、低賃金労働しか選択ができず、自立ができません。また、大学進学を希望した場合も、日本で中学校や高校を卒業していると、在留資格の「留学」扱いではないため、授業料の減額や奨学金等を受けるチャンスが狭まります。これらの問題は、国や都による一刻も早い是正が求められます。

外国にルーツを持つ子どもの抱える課題の解決には、子どもの生きる24時間すべてに着目する必要があります。行政には、学校にいる時間だけを焦点とした支援策ではなく、教育・子育て・福祉とさまざまな分野の連携を望みます。

No. 8

認定NPO法人 多文化共生センター東京

【団体の概要】

さまざまな事情で来日したものの、日本の就学年齢を超えていたり、母国で中学校を卒業していたりするために日本の公立中学校に入学できず、学ぶ場がない子どもたちがいます。こう

した外国にルーツを持つ子どもたちの高校進学を支援するため、2001年に設立されたNPO法人です。現在、団体の趣旨に賛同し、会費を納め、総会で決議資格を持つ正会員が約120名、趣旨に賛同して会費を納める賛助会員が約70名、概数で約200名の会員がいます。

【団体の活動内容】

日本語や教科学習支援をする「たぶんかフリースクール」を荒川区と新宿区に開校しています。新宿校では、平日朝9時から13時まで週20時間、授業形式で教え、昼食を挟んで、午後は自習時間です。毎年、秋以降は子どもの人数が増えるため、2部制をとり、15時までのクラスも開講しています。学齢超過の子どもたちの数は増加しており、今年は60名を超えています。フリースクールの運営のほか、外国にルーツを持つ子どもたちの持つ豊かな表現力を発表する「多文化ユースフェスタ」の開催、こうした子どもたちの実態を明らかにするための「教育実態調査」、外国人保護者に対する「教育相談」も行っています。

【活動をするなかで見えてきたこと】

日本語がまったくわからない状態で来日した子どもたちにとって、高校受験は大きな壁です。そうした子どもたちは、短期間での合格をめざして、母国で学んだ数学や英語の点数をできるだけ伸ばし、苦手な国語をカバーして合格できる3教科受験の学校を選びます。しかし2015年度から、全日制都立高校の受験科目が原則5教科になり、習ったことがない日本史が含まれる社会、単語が難しい理科が加わることになりました。5教科受験になると、数学と英語だけで合格点をとることは不可能なので、進学のチャンスはますます狭まってしまうことが予想されます。都の教育委員会は、辞書の使用許可や各教科10分の試験時間延長を提示していますが、非漢字圏出身の子どもにとっては辞書を引くこと自体が難しいなど、適切な措置とはいえません。

子どもたちを取り巻く状況の変化は、受験科目だけではありません。これまで「たぶんかフリースクール」の経費は、文部科学省による定住外国人の子どもへの就学支援事業「虹の架け橋教室」の助成金を充てており、保護者が負担する授業料はわずかでした。しかしながら2015年2月をもって「虹の架け橋教室」事業が終了したため、助成が受けられず、現在は、団体に寄せられる寄付金を充て、保護者が負担する授業料も値上げしています。安定した財源がないため、このままではフリースクールの存続が危ぶまれる状況に陥っています。

【行政に望むこと】

学齢主義の日本では就学年齢を超過した子どもが学ぶ場がないこと、さらに、そうした子どもたちは公教育に属していないためにその存在が明らかになっておらず、課題として認識されていないことが大きな問題です。「たぶんかフリースクール」に通う子どもの人数は年々増えており、入学してきた子どもに話を聞いてみると、しばらく不就学であったケースも見受けられ、想像以上の人数の子どもがいまだに教育にアクセスできずに潜在している可能性があります。

課題として認識されていないため、行政の中にも担当部署がありません。学齢超過の子どもたちだけでなく、外国にルーツを持つ子どもの教育をどうするか、指針を明確にして、総合的なサポート体制を組む必要があります。

No. 9

認定NPO法人 難民支援協会(JAR)

【団体概要】

難民とは、自分の命を守るために、やむを得ず、母国を離れ、他の国に逃げざるを得ない人たちのことです。たとえば、改宗したことや、民主化活動に参加したこと、同性を好きになったことなどが理由で、母国の政府から迫害を受ける人がいます。また、迫害を受けるだろう恐れを感じ、何とか逃げてくる人もいます。世界全体で難民の数は約6100万人にのぼります。

JARは1999年に設立され、日本に逃れてきた難民が、自立した生活を安心して送れるよう支援している認定NPO法人です。難民への難民申請の手続きや、日本での医食住、教育、就労などに関する支援を行うと同時に、難民受け入れに関する政策提言や、イベントなどの開催を通じた認知啓発も実施しています。年間の支援対象者の国籍数は約60か国にのぼります。また、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の事業実施契約パートナーとしても活動しています。難民問題は国際的な問題なので、アジア・太平洋地域20か国以上の団体とネットワークをつくっています。

また、これらの活動から得られたノウハウを生かし、災害時の支援活動なども行っています。

【活動するなかで見えてきたこと】

難民の方々が日本で生活するうえでは「ことば」の問題などもありますが、最も問題なのは、受け入れ側である日本社会からの「外国人に対する意識」ではないでしょうか。例えば、部屋を借りる時に「外国人だから」という理由だけで入居を断られることが多くありますし、公園に同国の友人と集まって話をしただけで通報されてしまったということもありました。さまざまなトラブルの裏にはこういった差別意識が結びついていることから、日本社会もまだまだ努力すべき点が多くあると思います。

社会保障制度等のシステム面にも大きな問題があると感じています。外国人が利用できない制度が多いほか、さらにその中でも入国管理局が定めた在留資格のカテゴリーひとつで圧倒的な格差が生まれてしまっています。普段の活動では、このような日本の制度や、社会保障の枠組みの問題を痛感する毎日です。

【「ウェルカム」の気持ち・姿勢】

受けられる公的サービスが大変少なく、普段から大変苦勞している難民の方の中には、行政窓口に行っても良い対応をしてもらえないのではないかと不安に思っている方も少なくありません。

そのようななか、難民や外国人の方が訪ねていく行政の窓口では、「ウェルカム」の気持ちや姿勢をきちんと伝えていただくことが大切ではないかと思えます。

例えば、難民の方が行政のある窓口に行った際、そちらが担当窓口ではなかったにもかかわらず、職員の方が別の窓口に丁寧に案内してくださり、また支援団体（NPO）なども紹介してくださるなどし、難民の方は自治体に対し、大変感謝をしていらっしゃいました。

たとえ、行政の窓口では対応できないことも、窓口に来たことを歓迎し、親身になって対応することで、ポジティブな印象へと変えていくこともできると思います。

【多文化共生をまちの強みに】

東日本大震災の際に、難民の方々がボランティアで現地に支援活動に入られ、活躍されました。それぞれの得意分野を生かし、土木関係で働いている方はガレキなどを片付けたり、飲食業の方が炊き出しをしたりと、現地の方にも喜ばれました。

新宿区で多文化共生のまちづくりをしっかりとしていくことで、もし災害が新宿区で起きた場合も、国籍などに関係なく、それぞれの得意分野で力を発揮できる、「災害に強いまち新宿」をつくっていけるのではないかと思います。

No. 10

一般財団法人 日本国際協力センター

【団体の概要】

当団体は、わが国と諸外国との互惠関係の強化に関連する事業を通じて、国際社会の発展に寄与することを目的とし、1977年に設立されました。現在のスタッフは254人で、国際協力に関するさまざまな事業を行っています。

【団体の活動内容】

現在、新宿区内の当団体本部を含む都内3か所において、厚生労働省からの受託業務である「外国人就労・定着支援研修」を実施しています。これは、熱心に求職活動を行い、就職への意欲が高いと認められるにもかかわらず、日本語でのコミュニケーション能力が十分でないことが理由で安定的な就労が困難な状況にいる定住外国人の方を対象とした支援事業です。

2008年に起きたリーマンショックの影響により、日系ブラジル人、ペルー人等多くの南米諸国出身者が失業しました。これをきっかけに、2009年度から「日系人就業準備研修」として、南米諸国出身者への研修事業がスタートしました。当時は緊急雇用の一環として主に製造業を中心としている群馬県や静岡県を中心に行っていましたが、2015年度からは、介護、建設、サービス業等といった労働力不足となっている分野に、外国人の力を積極的に生かす観点から「外国人就業・定着支援研修」として新たに東京、大阪を含む15都府県で実施しています。

【研修の内容】

メインとなる基本コースでは、レベル1から3まで計396時間をかけて初級レベルの日本語を身につけるための研修を行います。このコースは基本的な日本語のほか、就労に向けた日本語の習得という観点から、入社後の自己紹介や上司からの指示をメモにして残すことなど、就労場面を想定した内容となっています。

次に専門コースとして「就業準備コース」「職業訓練準備コース」、「分野別専門コース(介護)」という3つのコースのほか、日本語資格準備コースとしてN2からN3レベルの日本語能力の資格を得るためのコースも用意しています。レベルチェックのほか、どのような分野での就労を希望しているかなどによって、コースが決まります。

受講者には、基本コースは修了してほしいと案内しています。やはり、レベルの高いコースまで受講した方ほど希望の職種・仕事に就けるという傾向があります。また、仕事の選択の幅が広がるということは、安定した就労にもつながります。

【活動をするなかで見えてきたこと】

リーマンショック直後は、年間で6,000名を超える受講者がいましたが、雇用状況がよくなってきた現在は、いかに受講者を確保するかが課題となっています。今後、リーマンショックのような不況が再度訪れた場合、日本語能力が不十分である外国人が真っ先に解雇される可能性が高いと考えられます。だからこそ、今の時期からこの研修を通じて確実に日本語能力を身につけてもらいたいと思っています。

【行政に望むこと】

これまで実施してきた地域と比較して、受講者が圧倒的に多国籍です。新宿で開講したコースの参加者10数名の方の国籍がそれぞれ違いました。これは、国籍別の人口比率から想定していた当初の想定とはまったく異なる結果であり、他の地域との決定的な違いと言えます。

会場の継続的な確保に苦勞しています。今後の事業展開の中で、例えば、介護に関することを学びたい外国人に対する研修を自治体が行いたいと考えた場合に、自治体がハード面を、私どもがソフト面を用意することで効果的な就業支援に向けた取組みにつなげていければと思います。

今後も日本で暮らしていく定住外国人の方々にとっては、日本語の習得は大きな課題です。こういった国の事業で無料で日本語を学ぶ機会があるのでぜひ効果的に活用していただきたいと思っています。

カイ日本語スクール

【団体の概要】

1987年2月に設立しました。社員は日本人が12人、外国人が2人、講師が30人です。学生は外国人約200人、外国にルーツを持つ日本人が1人在籍しています。

【留学生の受入れ状況】

現在、約40か国の国籍の留学生が在籍しています。

震災後、韓国人学生が激減しましたが、当校の場合はアジア出身者が減った分、ヨーロッパが増えました。ヨーロッパでは日本の人気が高まっています。当校は、IALCという欧米に本部のある国際語学学校協会に入っており、そのルートを通して学生が来てくれています。今、一番多いのはスウェーデン人です。

欧米諸国にとっての日本留学は、以前はかなりのマニアしか希望しなかったのが、最近はリクエストも増え、ニーズも上がってきているのがわかります。ヨーロッパの経済・雇用状況が今は不安定なので、自己投資として、例えば日本に来て自分の好きなアニメ関係の専門学校に入って、専門技術を身につけ、アニメやゲーム業界に就職している人などが増えていると感じます。

【留学生の受入れで課題となっていること】

日本は留学生30万人という大きな計画を掲げていますが、そのための膨大な予算は、日本語学校にはほとんどおいていません。主に大学の国費留学等が対象です。学生たちへの奨学金は少しありますが、奨学金だけでなく、学生を募集するためのマーケティングの費用、広報宣伝や募集活動への支援が多少でもあると、質も上がってくると思います。

国内の留学生は、ベトナム人・ネパール人が増えてきていますが、経済的背景の弱い学生たちが多いようです。ある非公式な調査結果によれば、こうした非漢字圏の留学生は、2年間学習したときの到達度が、漢字圏、特に韓国人に比べて700時間前後の差が出るとも見られますが、これは日本語学校での学習時間の1年分近い差に相当します。

そういった学生側の習得時間の問題に加えて、教師側も中国人・韓国人と違う非漢字圏の人たちに教える経験が不足しているため、2年経っても初級レベルということも起こっています。

さらに、急激な学生の増加に教師の供給が全然追いつかず、今は空前の教師不足となり、現場は質の向上などと言っていられないほど大変な状況でもあります。

そうした日本語教育機関の質向上のためにつくられた日本語教育振興協会の審査認定事業は仕分け対象となり求心力が低下、国立国語研究所も縮小され教員研修部門は廃止となるなど、グローバル時代の日本語教育の環境は、ニーズの高まりに反し、決して明るいとは言えません。

【留学生受入れのため工夫】

母語別の交流会を行っています。ピアサポートといって仲間同士のサポートは機能しやすいので、同じ母語を持つ学生同士で先に入った人が後輩をサポートし、ピア関係を構築するのが一つの指針です。他にも、ASK (Advisory Services @KAI) という、事務局が窓口の相談受付システムや「談話室」という授業外で日本語会話を楽しむシステムがあり、その中で学生はトラブルなどの相談をしています。

【留学生の日本での生活について】

入学当初は、生活情報の入手方法での戸惑いがあります。生活に慣れてくると、今度はモチベーションの変化とカルチャーショックを繰り返し、不安定になることがあります。でもそれ

は、むしろノーマルなことで、大切なのは自分がその状態にあると気づけることだと、最初のオリエンテーションのときに言うようにしています。

日常的には、相談しやすい雰囲気づくりや外国人スタッフ採用のほか、夏と冬のパーティや毎月行う自由参加のアクティビティなど、息抜きも提供するなど工夫を続けています。

【留学生の進路について】

卒業後の進路については、帰国が多いのですが、就職も年間 20 人くらいと増えつつあります。進学者は 10 人くらいです。日本で進学しなくても日本語ができるようになって帰国すると、母国の良い大学に入れたりもします。

進路決めでは、欧米人は自立している人が多く、比較的手はかかりませんが、日本の進学や就活事情が分からない点では共通しているので、ニーズや個性に応じた対応をしています。

【他の団体と連携した活動】

外国人の急増と混雑の解消のアイデアとして新大久保駅の駅長さん（当時）の発案で、18 か国語で駅構内の右側通行の呼びかけを録音し、現在、駅で流れています。その後、混雑時の通行障害は多少軽減されたと聞いています。それに続いて、多言語（22ヶ国語）で新大久保商店街の案内放送も作らせていただきました。学生たちはこうした活動に参加することで、「今まではただ通り過ぎるだけだったのが、地域の一員になったような気がする」と喜んでます。

こうした機会を通して、外国人留学生に対する日本語学校におけるシチズンシップ教育の可能性を感じているところです。

【行政に望むこと】

地域関連で言えば、防災関係が気になります。地域の人たちの思いと一時滞在者である留学生というのは、必ずしも合わないですね。そこを、どうしたら機能するのかと感じます。折角、若い力があるのに、学校は当然ながら学校単位で避難計画を立てるので、被災時に地域の中でボランティアとしてどのように関わっていけるかは難問です。まさにシチズンシップを持たなければ、進んで関わることはできないでしょう。訓練も大事ですが、地域のメンバーシップ感が持てる取り組みを教育プログラムの一環として考えられると、防災先進国である日本留学の価値も広がり、人材育成もできると思います。

ほかには、地域の小学校の年少者の子どもたちや親のケアみたいところに、もう少し留学生や日本語教師が関われるのではないかという気がしています。親としての自分を振り返るに、特に小学校時代は学校からのPTA向けプリントは毎日多くて大変でした。学校文化は独特なので、PTAマニュアルみたいなものもあると良いと思います。親の中には日本語教師や日本語ボランティアの方もいますが、声がかからない限り手を挙げる人は少ないようです。学校がその視点を持って声かけをすることで、良い支援につながるのではないのでしょうか。

【最後に気になること】

マイナンバーが外国人にはよくわかりません。予期せぬことが起こりそうで心配なので、しっかりフォローしていただきたいと思います。

No. 12

学校法人電子学園 日本電子専門学校

【団体の概要】

設立は 1951 年で、スタッフは日本人が約 200 人、外国人が 5 人です。生徒は、2015 年 9 月 2 日現在約 2,500 人で、うち外国人が 414 人、そのうち留学ビザの人が 400 人です。

【留学生の国別の傾向について】

現在、24か国の留学生在籍しています。

東日本大震災以降に韓国籍が少なくなり、中国籍がシェアだけでなく総数も伸びています。中国から入国しやすくなったという理由もあります。

日本語学校は、学生獲得を韓国や中国から、ASEANのミャンマー、ネパール、ベトナムといった国々にシフトしています。

【留学生の受入れで課題となっていること】

留学生を受け入れるにあたっての課題は、彼らの日本語能力です。ほとんどの留学生在が、日本語学校で6か月から1年以上勉強します。また、本校の入学時にも日本語能力の試験を行います。授業は全て日本語で行いますので、教員の言葉をナチュラルスピードで理解でき、自分の意思表示が7、8割できることが望ましいです。入学の時点で日本語能力が全く不足している場合には、授業にもついていけず、就職サポートも困難なため、不合格にせざるを得ません。

【留学生を受入れるために工夫していること】

最近、非漢字圏の国の入学希望者が多くなっていることもあり、入学後の日本語レッスンの必要性が高まっています。非漢字圏を含む日本語能力に不足がある留学生に対して、入学直後から夏休み前までの特別授業として、10回（10週間）の日本語レッスンを受けることを義務付けています。

また、中途退学生・卒業生の不法残留が絶対にならないように厳しく指導しています。例えば、退学して帰国する留学生には、帰国のエアチケットを見せるように義務づけるとか。帰国したらすぐに、入国スタンプの画像ファイルを送ってもらいます。また、帰国以外の場合は、転校先など次の行き先を確認してから除籍します。

【留学生の日本での生活について】

高校卒業後すぐに入学する留学生は少なく、ある程度年齢を経ている学生や、大学を卒業した留学生が多いため、仕送りしてもらっていない学生もいて、経済的な面で問題が生じる場合があります。ときどきアルバイトの金銭的なトラブルもあります。学校としても授業料の支払いについて便宜を図るため、国の奨学金受給の便宜を図り、分納制度をはじめ、いろいろな形の本校独自の奨学金制度を行っています。

【日本人の学生と留学生の違い】

日本語能力が不足する学生は、授業が理解できない場合があり、中途退学につながる可能性があります。日本語で行われる学力検査に通らないために、就職が決まらないケースも残念ながらあります。

また、留学生は不動産契約で日本の慣習（手付等）を知らないため、年に1、2件はトラブルがあります。

成績については、詳細に比較したデータは今のところありませんが、優秀な学生の割合は日本人と同じぐらいではないかと思えます。

【留学生の進路について】

留学生の就職率は95.8%で、日本人を含めた就職率（94.8%）より高くなっています。2014年度の求人状況は、2,395社、37,133名で、うち留学生積極採用企業数は634社となっています。

求人企業2,395社の業種内訳は、メディア&アート系が476社、コンピュータ系が1,116社、エレクトロニクス系が555社、ビジネス系が248社となっています。留学生は付加価値が高い存在になっており、全ての業種で留学生を採用していただきました。能力本位で日本人と同等に評価する会社も多いです。

就職活動での課題はやはり日本語能力です。特にエントリーシートや履歴書を書く能力や、日本語の学力検査に通る能力が必要です。また、海外は卒業してから就職活動を始めますが、日本の就職活動はスタートが早い。そういった日本の雇用慣習を、留学生には特にわかりやすく伝えなければいけません。しかし、のんきに構えている留学生がいます。

【他の団体と連携した活動】

日本語レッスンは近隣の日本語学校と連携しております。また、行政機関の声掛けにも応じています。

専門学校は新しい制度（職業実践専門課程）で変わってきました。企業と連携し、今現在産業界で必要な技術の情報をキャッチし、企業と連携してカリキュラムをつくったり、授業を行ったりすることが必要とされるようになってきました。

さらに日本語学校から要請を受けて、進路を決めるにあたって参考となるよう、出張授業を行っています。

【行政に望むこと】

学校としては、良好なアルバイトが必要と考えています。時給が良い案件には、不適切なアルバイトもあります。留学生アルバイトの法規制について、パンフレットを作成して企業に説明しています。また本人にも、アルバイト情報の提供を義務づけています。雇用者側が、留学生は週 28 時間までという法規制を守ってくれば良いのですが、実際にシフトに入ってしまうと留学生は弱い立場になり、学校の授業の優先度が下がってしまいます。そういった不適切なアルバイトに応募しないように、新宿区全体で、企業への法規制の周知を強めていただきたいと思います。我々が留学生を指導するだけではなく、企業の公平さを求めなければ、なかなか是正されません。

また、留学生が外で楽しく参加できるような区の行事があれば情報提供していただきたいです。

No. 13

大久保小学校

【団体の概要】

児童数は 178 人で、そのうち外国籍の子どもが 28%、外国にルーツを持つ子どもも合わせると 58~59%です。

【どのような外国ルーツの子どもが在学しているか】

現在在籍している外国籍は、韓国、フィリピン、中国、タイ、ミャンマー、米国、ネパール、シンガポールです。日本籍であっても、中国籍も持っている場合もあります。日本にいるときは日本名で、パスポートは外国のものという場合もあります。

【外国ルーツの児童が増えたことにより、どのような影響があるか】

日本語学級には、11 月 1 日現在 42 名が在籍しています。ここ数年、40 名は越えず、30 名から 40 名でしたが、去年くらいから日本語をまったく初めて学ぶ子どもが増えてきています。

日本語を母語にする子どもと違い、日常会話ができて、その本当の意味がわからない子どもがいます。そこで、写真や実物を見せてふれさせるようにしています。

日本語学級担当の話では、ある程度母語が確立した状態で日本に来ると、日本語を初めて学ぶ子どもであっても、考える言語が子どもの中にあるため、日本語も比較的入りやすく、反対に母語が確立していないとすべてがいい加減になることが多いそうです。言葉は話せるが、文字が書けない、読めないとなると、家できちんと母語で会話をしていないと、母語も獲得できない。個人差はありますが、そういう子は、日本語の入り方も悪くなります。

1 年生であれば、日本の子どもと同じ様に最初から国語を勉強するため、比較的時間はかかりますが、何とか日本語も入ります。言葉の確立は 10 歳の壁といわれ、8 歳、9 歳くらいまでの間にしっかり日本語を学ばせないと難しい部分があるのかもしれない。

これから日本は人口が減り、労働人口としてさまざまな国々の方の子どもたちが日本に来ると思います。日本の社会の中で自分の将来、夢をもって働ける力を、どの子どもにもつけさせなくては行けないと、切実に考えます。

区の日本語指導員は、韓国と中国の方が常駐し、このほかにタガログ語の指導員がいます。先日、フィリピンから来た4年生の子がいました。その子どもの母親は英語で大丈夫と言っていたのですが、4年生の子には英語が通じていなかったため、タガログ語で日本語を教えられる先生を探してもらいました。その結果、無口だと思っていた子がタガログ語で話し出し、向学心も、いろいろなことを理解したいという気持ちもあることがわかり、ぐんと力も伸びました。

今一番困っているのは、これからほかの学校でも増えてくると思うネパールの方です。ネパールの方の日本語サポートはなかなか見つかりません。話すことは教えられても文字まで教えるとなると、また違うのです。

ベトナムの方はまだ入ってきていません。子どもが学齢に達していないのではないのでしょうか。あと4、5年したら入ってくるのではと話しています。

【外国ルーツの児童が増えたことにより、特別な対応を迫られるようなこと】

例えば、学校から出す学年だより等の細かいものも、教員にすべて日本語ルビ付きにしてもらっています。入学のしおり、アレルギー対応の手紙、夏休み等の長期休業前のお知らせは、日本語、中国語、韓国語、タイ語、タガログ語、スペイン語に翻訳を依頼し、配布しています。教育委員会に依頼し、シニアボランティアを活かす会が翻訳をしています。

しかし、これだけ翻訳しているのになぜ親は読んでいないのかと、担任がぼやいていることがあったため、本当に伝わっているのかと不安に思っています。このため、「わからないことは電話でいいよ、電話で答えるから、電話で話して」と保護者の方には話しています。保護者の方が日本語が書けないので、連絡帳に欠席すると書いて伝えてもらうことは、していません。

アンケート等も、ハングルで書いてくる場合は読める人に読んでもらい、ローマ字のわかる方はアルファベットで日本語のローマ字を使って書いてくれています。英語は辞書を引きながら、中国語は日本語国際学級の教員で意味がわかる方がいて対応しています。

一斉メールも、漢字にはルビをひらがなで括弧の中に入れる形で発信しています。

【外国ルーツの児童に対する接し方で特に気をつけていること】

特に気をつけていることはありません。宗教上食べられないものには気をつけていますが、栄養士も理解しています。日本に暮らしているので、給食を食べたがる子どももいましたが、話し合っ、最終的にはお弁当を持ってきてもらったことがあります。

【日本語が十分に理解できない子どもたちや親に向けての取組み】

放課後、日本語サポートの後、学校が場所を提供して学習支援をやらせてもらっています。日本語がまったくわからなくて、もっと日本語を学びたい保護者には、親御さんにも話せるようになってもらうため、親子日本語教室も紹介しています。保護者会や個人面談の際には、教育センターの国際理解室に依頼して通訳を派遣してもらっています。

【日本語が十分に理解できない親に向けての取組み】

本校は幼稚園も含めいろいろな国籍の方がいるので、保護者も受け入れてくださっています。同じ言語の方同士で助け合っています。就学申請時等、お互いに教え合ったりしています。

【外国ルーツの児童が母国の文化を保持し、それぞれの文化を理解し、尊重するための取組み】

日本語タイムで発表したり、日本語学級で学習したことを自分の学級で友だちに教えたりしています。自分の国の料理を調べて発表し、給食に出せるか栄養士に相談し出してもらったこともあります。また数年前、区内の飲食店に協力してもらってカレーを作ってから、世界のカレーとしていろいろな国のカレーを出したことがあります。給食の献立も意識しています。

日本語学級の子どもたちは、特に母親が日本人でない場合が多いので、正月にはかるた、百人一首で遊んだり、お餅を食べる体験も行いました。

【日本語学級について】

日本語を初めて学ぶ子どもが増えると入門期の指導が大変になります。入門期・初級・中級と分けていますが、1年生と6年生は一緒にできません。本校の場合、国語の授業の時に日本語学級に行くことになっていますので、日本語、国語の課題別、習熟度別の少人数指導のような形になっています。

基本的な考え方として、3つにグルーピングし、ある程度話せる子どもは、自分の学級に戻りやすい形の指導を最初からやっています。入門期は多くても2人です。母語が違う場合、日本語しかコミュニケーションツールがなく、片言でもいいから日本語を出すという形です。

最近では、初級段階では、3年生の子にも1年生の教科書をコピーし、習った漢字は直したものを使って学習しています。簡単なもので文章の組み立てを学ばないと、内容も言葉も理解できません。また、国語の時間は日本語学級で学習できますが、算数や社会は母語が話せる方が教室にいてくれると、子どもの学習の助けになっていいと思います。

No. 14

新宿中学校

【学校の概要】

生徒の数は242人です。そのうち、外国籍の生徒は、推定で約3割です。国籍は日本でも母親が外国の方の場合もあります。

【どのような外国ルーツの子どもが在学しているか】

現在の国籍は、中国、韓国、フィリピンが多く、その他の国にルーツのある生徒もいます。最近では中国国籍の生徒が増えています。日本語がまったくわからない例もあります。

【外国ルーツの生徒が増えたことにより、どのような影響があるか】

日本語学級には10名在籍しています。国籍は中国、韓国、フィリピンが多く、あとネパール国籍もいます。以前は集中指導終了後、日本語学級に入る場合が多かったのですが、今は並行して指導している生徒もいます。これは保護者の要望や、本人の日本語の習得状況などを勘案し学校側の判断で、並行して指導しています。

日本語学級は、基本的に全部マンツーマンで、その生徒に応じた指導をしているため、かなり効果があると思います。例えば学校行事の前、持ち物等の注意事項は教室で聞いても1回ではわからないため、丁寧に話をして理解させます。わかっていない点を深く理解させるという部分と、日本語を理解、習得させる点でも意味があるものと思います。

最近の例で本当に困ったのは、移動教室に行った際、日本語がほとんどわからない生徒の体調が悪くなり、対応に苦慮したことがありました。生徒も教員に意思を伝えられない、教員も生徒に伝えられないため、本当に困りました。

【外国ルーツの生徒が増えたことにより、特別な対応を迫られるようなこと】

例えば、学校だよりは全部かなを振っています。しかしPTAから、いくつかの言語でこちらの趣旨が伝わらなくなっていると言われ、課題となっています。まったく日本語を理解できない保護者も増えてきています。長い間日本に滞在していてもその国の方々の社会の中ですでに生活しており、まったく日本語を習得していない方もいます。そのため面談を含めて苦労しています。

面談は通訳に入ってもらいます。物事が正確に伝わっているかという点では、通訳の必要性は不可欠だと思います。

【外国ルーツの生徒に対する接し方で特に気をつけていること】

日本語を話せなくても、他の生徒と同様に声をかけています。生徒を見ていると、国が違うからという理由で差別することはないようです。「どこの国だから」という意識が出てくることはほとんどないと思います。小学生の頃から一緒に生活しているため抵抗感がないのかもしれませんが。

【日本語が十分に理解できない子どもに向けての取組み】

自分から積極的に日本語をしゃべろうとしたり、友だちとかかわろうとしたりする生徒は日本語の習得が速いのですが、そうでない生徒は厳しいです。

高校進学指導は、例えば3年生として秋に転入してくる生徒の中には、2年生からスタートする生徒もいます。秋からの数か月間で、受験するための学習言語は身につけません。このため、1年遅らせて2年に入る生徒が毎年何人かいます。しかし、学校から2年に入りなさいと言えませんので、受験の状況等を説明したしうえで2年生に入ってもらいます。

高校入試制度も外国籍の生徒たちへの配慮は十分ではありません。外国籍生徒の入試に関する会議の中で、特別措置が必要だろうと発言しますが、逆にそれが差別になるのではとの意見もあります。また受け入れる枠も十分ではありません。

都立田柄高校には外国文化コースがあり、面接も英語で受けることができます。去年推薦で入学した生徒も英語で面接して合格しています。こういう学校があれば良いのですが、まだ日本語も習得の途中にある中で受験を迎えてしまいます。このため、学力のあってもその力を発揮できない生徒がいます。高校入学後伸びるだろうという生徒もいますが、それだけでは認められません。そうした生徒の保護者には、高校に行って伸びるからがんばってやってくださいと話をします。

【外国ルーツの生徒が母国の文化を保持し、それぞれの文化を理解し、尊重するための取組み】

自分の母語も話せて日本語も話せるというのは、大切にしていきたいと思います。自分の国に誇りを持ち、自分の国の言葉をどんどん話さないというようなことも言っています。

この学校の特徴としては、母語でも自然に会話ができる学校というがあります。タガログ語、中国語、韓国語を話す生徒たちがいて違和感がありません。学校の中で外国語が話せる、聞ける、そういう学校の環境があります。また外国をルーツに持つ生徒たちの文化も大切にしています。

【指導、支援体制について、国、都、区に望むこと】

生徒の指導は学校が行いますが、家庭に帰ってからの支援、親への支援が必要と思います。保護者会を開いても来ない、来られない、来てもわからない状況です。学校行事に参加する親が少ないのは言葉の問題もあると思います。また、学校から配布するプリント類もどこまで理解してもらえるのか、生徒から伝わるだけでは、都合の悪いことは伝わりません。そのあたりの支援をどうしていくのか、孤立しがちな保護者をどうしたらよいのか、考えています。

また教員の問題もあります。言語もこれだけある中で、ある程度それらの言語を習得している、学習したことがある教員を配置してもらえないかと思っています。わずかでも言葉が通じると相手も安心します。今は英語が唯一の頼みで、中国語は生徒を介さないといけないのは非常に制限があります。

特に新宿では、多言語に対する支援体制がないと突発的なことが起きた時に対応しきれない。手続きをとって、書類を書いて申請し、通訳に来てくれという状況では間に合わないこともある。そのような事態が起きた時にどうするのか。その点を危惧しています。

新大久保商店街振興組合

【団体の概要】

新大久保商店街振興組合は、昭和22年にできました。会員は全体で160名、そのうち40名は外国人で、ほとんどが韓国人です。およそ4分の1ですが、日本人は大家の数が多く、実際に商売していない人もいるので、店だけの割合では韓国の店の割合がもう少し高いと思います。

振興組合の会費は月2000円からです。各店には、月2回の清掃やクリーン活動へ出てもらいたいということと、商店街のスタンプカードに極力参加してほしいことを、お願いしています。

毎月理事会だよりを出し、そこに活動内容や予定を書いています。韓国人会員は読まない方が多いです。社長が不在の店も多く、情報がうまく伝わっていないこともよくあります。

【団体の活動内容】

月2回の清掃とクリーン活動は商店街で独自に行います。また商店街のスタンプカード活動があります。以前は年2回の福引大売出しもやっていましたが、参加店舗が減り準備なども大変なので、スタンプカードにしました。あとは大久保まつりに一番お金を使っています。

【活動をするなかで見えてきたこと】

最近、ベトナム料理店が2店できました。タイ料理店もありましたが、同じ経営者が中華料理店から韓国料理店に変えたりもしています。

ほかの国の料理店が出てくると来街者が流れるのか、中国人、欧米系やアジア系なども含め、いろいろな国から人が来ているという実感があります。ただ、まだまだバラエティに富むまではいっていません。

振興組合の街頭放送を、今年の8月から新しくしました。これまでは4か国語でしたが、多くの国の人のために、日本語学校の協力のもと、簡単なあいさつを20数か国語で入れました。

課題としては、日本語や日本のルールがよくわかっていない、来日したばかりの人たちが入れ替わりやって来るので、以前から、路上にはみ出した看板や自転車の問題があります。ただ、クリーン活動や自転車の撤去活動をしているので、少し前に比べたら良くなっています。地道に活動してきたから今の程度で収まっていると思います。

活動の中で注意しているのは、どのようにコミュニケーションをとるかです。商店街が何をやっているかをわかってくれれば、店頭にいる人の対応も変わるので、まちで会ったらあいさつをするなど、日々の積み重ねが大事だと思っています。

【他の団体との連携】

在日本韓国人連合会、新宿韓国商人連合会と連携しており、クリーン活動のように、一緒に何かできれば良いと思います。一緒にイベントをやろうと声はかけられますが、会員も高齢で、新しいイベントはなかなか厳しい状況です。最近では大韓国民団からもお声がけいただきました。

日本語冊子の翻訳は、日本語学校がボランティアで協力すると言ってくれて、20数か国の街頭放送もその協力があってできました。これほど協力してもらえるのだったら、もっと早く声をかけておけば良かったと思いました。

【最後に】

外国人について行政に要望することは特にありません。よく言われるルールやマナーの問題は、外国人に限ったことではなく、日本人にも見られるものと思っています。

神楽坂商店街振興組合**【団体の概要】**

昭和58年4月に組織を法人化しました。商店街の会員は174軒で、そのうち外国人の店が1軒あります。振興組合の活動は、各商店の結束を図り、商売の環境を整えようというものです。

神楽坂は、ほかの地域と比較すると外国人はそれほど多くありませんが、特徴は欧米系の人が多いことです。振興組合のある地域は、それほど大きな店はないのですが、落ち着いた雰囲気の良いまちです。

【活動するなかで見えてきたこと】

神楽坂の商店街というのは、道幅が非常に狭いのですが、それがひとつの特徴として、皆さんが集まるようになってきました。まちの観光振興に努力したことで、このところお客様が増えています。

最近、外国人観光客も日本中に多いのですが、2、3回来日していてすでに有名なところを回っている外国人観光客には、神楽坂は落ち着いたまちなので行ってみたらという案内があるようです。それで私たちのまちにもだいぶ増えていると思います。また、神楽坂には昔から文豪がたくさん住んでいて、関連の史跡もたくさん残っているので、団体で観光しています。

神楽坂は非常に坂道が多く、フランスのモンマルトルの丘の道に似ているということで、フランス人がかなり多くいます。また、土・日・祭日に神楽坂を訪れる外国人も多くなり、阿波踊りにもたくさん参加しています。今まで外国人が増えてきたことによるトラブルはありません。

外国人用の多言語マップづくりはしていませんが、神楽坂には知識人が多く、外国に何年か行って帰ってきた帰国子女たちが住んでいます。そうした人たちがアパートなども持っていて、部屋を外国人の友人に長期的に貸すことが多いのです。

【活動の中で工夫していること】

会員の中に、外国人に接することの多い人が何人かいて、最近、中国語や英語の放送を商店街でしています。また、いろいろなイベントのポスターなども、英語や中国語に詳しい人がポスター作りに参加して、おもしろ味のあるものを作ってお客さんを呼んでいます。しかし、フランス語はまだやっていません。今後も、かなりの外国人が増えるのではないかと予想しています。

【多文化共生のまちづくりについて】

多文化共生の推進には、新しい方向性が必要だと思います。区内には、出張所がたくさんあります。出張所が、多文化共生の役割をもっともったほうが良いと思います。出張所の職員は、各地域の自治会との接触が多いので、外国人がどこに住んでいるかなど生の声がいろいろと入ると思うのです。そのようなまちをよく知っている人たちや、自治会の若手を集めて、懇談会のようなものを持ってみてはどうかと思います。

区が進めている多文化共生は良いことです。これだけ外国人が増え、これからもどんどん増えてきます。文化と同じレベルのまちづくり、環境づくりをやらなくてはいけません。いつまでも同じものの考え方でやったのではいけないと思っています。

中井駅前クリニック

【団体の概要】

開業は2002年、スタッフは日本人5人です。

【外国人の患者について】

5、6年前までは、駐在やそのご家族の方々に、ミャンマー、韓国が多かったです。特にミャンマーの方たちは、以前は在留資格をもらっておらず、健康保険証を持っていない方が多かったので大変でした。健康保険証がなくて診てくれるところがほとんどなかったから、皆こちらの病院にいらっしやいました。今は、難民申請を認められ、健康保険証を保持しています。ほかに、政権が変わったという理由で帰国された方もかなりいます。

最近の傾向としては、留学生が増え、国籍では中国、韓国、特にベトナムの留学生が多くなっています。

外国人の患者さんには、まず最初は日本語で話すようにしています。英語、ベトナム語、フランス語は対応できますが、こちらで先入観を持たないようにしています。例えば、欧米系の患者さんが来て、こちらが英語でしゃべってしまうと相手の方には下手な日本語だから英語で話してきたと不快感を与えてしまうことになりますので、注意しています。

中国や韓国の患者さんには、筆談です。特に中国の方は漢字がわかっていますから、容易です。

日本と中国の漢字は違いますけれども、日本にいれば日本の漢字がわかるはずですから、例えば、単語で「熱」とか、「既往歴」もすぐわかります。

【外国人を診療するにあたって】

基本的に、外国人も日本人も同じように診ています。

診察して命に関わるような場合であれば、お金の問題も説明したうえで、大きな病院へ紹介します。大きな病院にはソーシャルワーカーもいますし、とりあえず診てもらうことが優先です。もし本人が日本語に不自由であれば、紹介状には、私に教えていただければ私が責任を持って説明しますと書きます。

【通訳等支援体制について】

支援体制のような大きなことについては、一度も考えたことはありません。通訳等の支援も、広い世の中で全部対応できるはずがありません。日本語が不自由なことはわかっていることで、日本人も外国に行けば、不自由なく過ごせるわけではありません。だから、不可能だと思います。

【行政に求めること】

日本ほど親切な国はないと思います。外国に行ってみればわかります。こんなに患者さんを日本人と外国人の区別なく診てくれる所はないです。日本の保険制度は3割負担ですが、外国は国により事情が違います。日本は先進医療ですが、それにもかかわらず、こんなに診療費が安い国はありません。MRIやCTは日本では4～5万円ですが、アメリカでは20～30万円かかります。日本はこんなに進んでいるのに、これ以上何を求めるのかと思います。

【最後にひとこと】

今は留学生が多いですが、日本語学校の指導員や先生たちはすごく丁寧に面倒を見られていますね。病状が悪くなる前に来られます。そういう意味も含め、こんなに丁寧な国はないです。

よう。健康相談的な事や病気以外のことも聞かれますので、答えられるものは答えるようにしています。

No. 18

高田馬場さくらクリニック

【病院の概要】

2014年3月に開所しました。現在常勤の日本人3人、非常勤で日本人18人と外国人3人が勤務しています。

【外国人患者の傾向】

外国人患者は、受診者全体の約15%で、そのうち約7割、全体の10%以上がミャンマー人という状況です。もともと高田馬場周辺はミャンマー人が多く居住していることから、開所当初からミャンマー語通訳を採用し、現在は週4日対応しています。

外国人患者の国籍は、ミャンマー人に続き、中国人、ネパール人、韓国人、タイ人が多く、上位5か国が外国人患者の9割を占めています。近年、ベトナム人患者が急増しており、今年に入ってその増加傾向が顕著になりました。しかし患者として来院するベトナム人の多くは、日本語も英語も通じないため、ベトナム人医師の診療所を紹介するなど対応しているところ

【外国人を診察するにあたって】

一番難しい点は、言葉が通じないことです。本人はどこが悪いのか日本語で説明できないため、診察が難しく、検査をするにも診察結果を説明するにも苦労します。日本語ができないなか、診療所に来る外国人患者は大変緊張している場合が多いので、診察を始める前にあいさつと自己紹介をして、言葉は通じない場合でも、表情や態度から「私はきちんとあなたを診察しますよ」という姿勢を感じてもらえるよう努めています。また、外国人患者は診察で処方した薬を院外薬局に取りに行かないケースがよく見受けられます。日本語ができないなかでは診療所に来るのがやっとなので、そのうえ、薬局に行くというのはハードルが高すぎるのかもしれませんが。薬を飲まないで快復しないので何とかしなければと思い、一部の薬については院内処方をはじめ、近隣薬局にはミャンマー語の薬局用問診票を配りました。

診察を行ううえで気をつけていることは、外国人患者の保険種別と生活形態を確認することです。外国人患者の中には難民申請中の方もいますので、保険加入の有無や種別を見て、医療費が高額にならないように気をつけています。また、生活形態については、主に体を使う仕事なのか、睡眠時間はどれだけとれるのか、食事は何を食べているのかなどを聞きます。飲食店をかけ持ちして一日中立ち仕事をして働いているの人に安静を求めても難しいですし、食事がすべて勤務先のまかないだという人に厳格な栄養指導をしようとしても現実的ではありません。生活形態に応じたアドバイスを心がけています。外国人患者の国の料理を知るため、休みの日はよく食事に出かけます。「確かに脂っこい、だから高脂血症が多いのか」とか「暑い国なら発汗して解消できるけれど、日本では体内に蓄積しそうだ」とか実際に体験してみるとわかることは多くあります。

【行政に望むこと】

診療所では、手術や入院が必要な重症患者を送り出せる外国語対応可能な病院が少ないことに大変困っています。医療の質を確保するためには言葉が通じることが不可欠なのですが、現在の医療保険制度の中では通訳費用が認められていません。このため全額を医療機関か本人が負担しなければならず、通訳のいる病院はわずかです。通訳にかかる費用を公的にカバーする仕組みが必要となっています。

外国人患者の多くは国民健康保険に加入しているので区民健診の対象ですが、受診率は低い状況と聞いています。封筒に大きく外国語を併記し、外国語版の書類を同封して、受診につな

げてほしいと思っています。また、在留資格のない外国人の健康が大変心配です。外国人の登録制度が変わったことでそうした外国人がどの程度いるかわからなくなりました。公衆衛生の点から考えても、健康診断や結核健診は在留資格に関係なく受診できるようにしていただけたらと思います。

No. 19

東新宿保健センター

【保健センターを利用する外国人について】

もともと中国や韓国の方が多い地域ですが、ここ数年で、東南アジアの方が多くなっています。他の保健センターでも東南アジアの方が増えてきていると聞いています。

東新宿保健センターでは中国と韓国の通訳が予算措置されていますが、現場で支障があるのは、最近増えてきたベトナム、ネパール、ミャンマー、カンボジアなどの東南アジア系の方々の対応です。両親のどちらかが日本人であれば対応できるのですが、お友だちなど、ある程度日本語ができる方と一緒に来ていただくようお願いしています。外国人が来られる割合は1、2割ぐらいです。

母親学級は30人定員なのですが、外国人の参加は1人か2人で、中国系か日本語が片言でも話せる方が多いです。

【外国人の対応をするにあたり課題となっていること】

言葉の問題です。そもそも情報提供の際に、書類が読めない方もいますし、逆に読めるけど話せない方やひらがななら読める方もいます。どの理由で来られないのかははっきりしません。中には、説明するとうなづかれますが、細かいことを言うとわからない方もいます。

例えば、日本語学校を出ているから日本語文書を送って大丈夫と言っていたネパールの方が、乳児検診の予防接種に一度も来られませんでした。あとで聞いたら、文書に漢字が入っていたからわからなかったと言われました。日本語の習得は在日歴とは関係ないようで、東南アジア系の言語の情報提供の必要性を感じます。

【課題解決のために工夫していること、そのために要望したいこと】

ストレスチェックやアンケートは数か国語を用意しています。片言が話せる人はローマ字だと読める方も結構いて、保健師が全部ローマ字で打って送ったり、ひらがなが読める人には全部ひらがなに打ち直したりして、一件一件個別対応をしています。

できれば、英語、中国語、韓国語といった言語以外の翻訳もお願いしたいです。今はお金がなくて周知できない現状があります。何月に何人来るとわかった時点で通訳を依頼できる制度があると良いです。新生児訪問でもフォローは結構大変です。

【育児相談や親と子の相談室で抱える悩み】

健診で日本語が通じないことがほとんどです。問診票を書いてこなくて質問をしようと思っても通じません。こちらも、かかりつけ医や既往歴を聞きたくても聞けません。その意味でご本人の悩みがあまり引き出せていないかもしれません。外国人はこちらの言葉が聞き取れない場合でも大丈夫とか、はいと言われることも多いので、もどかしい気もしています。

【外国人への特別な対応、気をつけていること】

日本語のわからない東南アジア系の方々は、フォローの手段が少なく、相談としてもあがってきづらいです。産後鬱の方向けの精神保健相談がありますが、なかなかそういうところに繋がられません。この相談は中国の方が多のですが、中国の方ばかり鬱になるとも限りません。ほかの国の方があがってこないのはなぜだろうと思います。フォローには通訳も同行しないといけないので、お金がかかると言われたり、医療対応はできないと言われたりで…。おそらく自分の言葉がわかるだけでも心を開いてくれると思いますので、ご協力いただける方が欲しい

です。

生活指導については、お国柄があるので特に気をつけています。例えば、離乳食の開始も日本では5か月ぐらいから始めるのですが、国によってはかなり早くから固いものをあげています。日本式に指導しても国に帰られるかもしれないので、一律に押し付けることはしません。衛生観念についても文化の違いがあります。日本の生真面目なところをどこまで指導するかということも考えています。

【これだけは要望したいと思うこと】

やはり通訳の問題です。医療機関の受入れも外国人は日本語がわからないので敬遠されがちです。ご家族が精神疾患の場合やDVで逃げてくる外国の方、重度心身障害をお持ちの方などは、言葉の壁で治療につながりづらいのが現状です。

外国人の方の相談を把握できるような総合的な仕組みがあるといいと思います。

団体 子育て支援機関

No. 20

北新宿子ども家庭支援センター

【外国人の利用者】

外国人は、若干増えていると思います。国籍もかなりバラエティに富んでいます。韓国や中国の方が特に多いほかネパールなどアジア系の方が多いようです。

お祭りなどのときに、幼児と一緒に楽しんでいるお母さんが結構います。また、無料の幼児サークルなどの案内をしていますが、無料であることがわかると参加してくれます。

無料であることの口頭での案内は、特に外国語を使っていません。大体の人は利用者自身が少し日本語を話せるか、日本語を話せる同じ国の友人と一緒に来るので、特に困ったことはありません。特に日本語を話せる友人と一緒に来られる人は、その人から子育てに関する情報を教えてもらっているようです。とはいえ、日本語が話せないとコミュニケーションが難しい面もあります。

【文化の違い】

子育てに関しては文化の違いが結構あります。

例えば、子どもを、たたき棒でたたいてしかるというしつけの文化の国があります。その時の泣き声やどなり声が外に聞こえると、通報につながってしまうことがあります。そういう時には、担当の職員が行ってお話を聞くこととなります。職員が、日本では虐待になることを説明するのですが、ご両親自身そのようなしつけを受けてきているので、なかなか日本の考え方を受け入れることができません。また、風邪を引いたときには背中を缶詰の底で引っかいて、赤く丸い印をつけると早く治る、という民間療法を信じているというようなこともありました。

こうした文化の違いを埋めるのは難しいと感じます。

【サービスの周知】

子ども総合センター、子ども家庭支援センターのサービスについては、日本語のほかに、英語、中国語、韓国語、タガログ語、タイ語の6か国語で説明したパンフレットを用意しています。このパンフレットは、区内のさまざまな機関にお送りして、必要な方に渡していただくようお願いしていますが、そのような機関とのつながりがない場合、情報が伝わらない場合があります。

行政とのつながりがなくなった外国人の中で、友人が少ない人などは親子で閉じこもってしまったり、保育園にも行かなかつたりなどして、孤立してしまう場合があります。こうした人たちに、親と子がいつでも来られるしお昼も食べられるし、遊ぶこともできるということをご

のように伝えていくかが一番の課題だと思っています。

【外国人の抱えている課題や悩み】

総合相談では、夜泣きがあるとか、あまり日本人と変わったものはそれほどないと思います。しつけについては、自分の国に帰れば別に普通のことなのに、日本に来て急にいけないことだと言われても納得がいけないという食い違いは感じています。

【外国人への特別な対応を迫られること】

外国の方ですと、ご自宅まで行かないとわからないことがあります。多いときは、月に3、4回行くこともあります。場合によっては、子どものことだけではなく、お母様のよろず相談のようなケアもすることがあります。その場合、本当に日本語が話せない方からの相談はまれなので、通訳を同行しなくてはいけないというケースは今のところ特にありません。

外国人の方には特にきめ細かい対応をして、信頼関係がきちんとできるように心がけています。